

# 第2回全国大学生調査（2018）

## 第1次報告書



2019年8月

東京大学大学院教育学研究科  
大学経営・政策研究センター  
(CRUMP)



# 第2回 全国大学生調査（2018）

## 第1次報告書

2019年8月

東京大学大学院教育学研究科  
大学経営・政策研究センター



## はしがき

21 世紀になって、高等教育の焦点は量的な拡大から質的な革新・改革に移った。しかも大学がどう教育しているか、だけでなく、学生がどのように学修しているか、という視座の転換がきわめて重要であることが認識されてきた。大学教育を通じて学生が、より密度の高い学習経験を得て、それが卒業後の生活の知的基盤をより強固なものとする基礎となることが求められている。

これまでも日本の大学教育は、実質的な学生の学習の点からいえば十分でないことが、いわば常識のように言われてきたが、それがあえて問題とされることもなかった。しかし我々が 2008 年に行った大学生の学習状況の調査（「CRUMP 学生調査」）の結果によると、日本の大学生は、特に授業外での自律的な学習時間が著しく少ない。大学教育の改革が各国にまして重要な課題となっていることなどがあらためて認識されたのである。

こうした状況から文科省は大学教育の改善に向けて、「GP (Good Practice)」プログラムなど競争資金による政策を進めてきた。また大学の授業方法、組織運営、学習成果の可視化・測定についての調査研究も行われてきた。改革の雰囲気は生じているといえよう。

ところがこうした動きにもかかわらず、現在までのところ大学生の学習活動に大きな変化が生じている明らかな兆しはない。2016 年に国立教育政策研究所・日本学生支援機構が学生生活調査に付帯させた質問項目への回答によれば、学生の学習時間は申請者らの調査の時点からほとんど変化していない。大学教育改革へのかけ声や研究の隆盛にもかかわらず、その実態は混沌としており、むしろ行き詰まりが生じているとさえいえるかもしれない。

こうした背景を踏まえて、この十年間に、大学生の学習行動に、現実にもどのような変化が起こってきたのか、あるいは起こってこなかったのか。またそれが大学教員、大学の組織、そして政策や社会環境によってどのように規定されているのか。さらにそれは、大学の教育面でのガバナンス、さらに政策にどのような問題を提起するのか。こうした問題を実証的に分析する基礎を形成するために、科学研究費補助金を得てこの調査を実施した。調査実施にあたり、(株) マーケティング総合研究所の野口修一氏にご協力いただいた。

こうした我々の意図に応じて、77 大学、154 学部にて在学する、32,913 人の学生の方々から調査への回答をいただくことができた。実施にご協力いただいた学長、学部長、教職員のかたがた、回答していただいた学生のかたがたに深く感謝申し上げます。

本報告書には、調査の第一次報告書として、回答の単純集計を中心として、結果の概要を述べた。さらに立ち入った分析、2007 年度調査との比較については、今後、別の形で発表する予定である。様々な批判、ご要望を寄せていただきたい。

金子元久 (筑波大学特命教授)

## 目 次

<b>序章 調査の概要</b> .....	1
0-1 調査の概要と方法.....	2
0-2 データの特徴.....	5
<b>第1章 授業</b> .....	7
1-1 履修科目数.....	8
1-2 大学入学後の経験.....	9
1-3 授業形態.....	17
1-4 授業の印象.....	20
1-5 成績.....	29
1-6 卒業論文・卒業研究とゼミ・研究室への所属.....	31
<b>第2章 大学教育への評価</b> .....	33
2-1 大学の授業と自分との関係.....	34
2-2 大学の授業への評価と自分の能力認識.....	37
2-3 大学満足度.....	43
2-4 大学に入学するまでの経緯.....	47
<b>第3章 日常生活</b> .....	51
3-1 学期中の過ごし方.....	52
3-2 読書.....	58
3-3 居住形態.....	59
3-4 授業料を除きた1か月の生活費の出所.....	60
3-5 日常の意識.....	64
3-6 授業への取組み方.....	67
<b>資料編 調査票</b> .....	69

## 第1次報告書 執筆担当者・担当箇所

小方 直幸	(東京大学・大学院教育学研究科・教授) 序章・第1章1-4・第3章3-1
濱中 義隆	(国立教育政策研究所・高等教育研究部・総括研究官) 第1章1-1・第1章1-2・第1章1-3
島 一則	(東北大学・大学院教育学研究科・教授) 第1章1-5・第1章1-6
両角 亜希子	(東京大学・大学院教育学研究科・准教授) 第2章2-1・第2章2-2
朴澤 泰男	(国立教育政策研究所・高等教育研究部・総括研究官) 第2章2-3
福留 東土	(東京大学・大学院教育学研究科・教授) 第2章2-4
王 帥	(東京大学・社会科学研究所・助教) 第3章3-2・第3章3-3・第3章3-4
谷村 英洋	(帝京大学・教育学部・助教) 第3章3-5・3-6

(所属はいずれも 2019 年 7 月現在)

\*この報告書は、2018 年度～2020 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 A）「大学教育改革の動態とその規定要因」（研究代表者 金子元久）による研究成果の一部です。

\*この報告書は、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターのウェブサイト (<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>) からダウンロードできます。

## 凡 例

1. 本文の図の中に示した回答の割合 (%) は、原則として無回答を除いて算出した。
2. 資料編の調査票に掲載された回答の割合 (%) は、原則として無回答を含む。
3. 原則として、学問分野（人社教芸、理工農、保健・その他）別の集計結果を示した。
4. 小数点第二位以下の四捨五入により、図の中に示した回答の割合 (%) の合計が 100%にならない場合がある。
5. 自由記述については、紙幅の関係から本報告書には掲載していない。

## 序章

### 調査の概要

## 0-1 調査の概要と方法

### 「全国大学生調査（第2回）」の概要

2007年に実施した「全国大学生調査」からほぼ10年を経過した（以下2007年調査と呼ぶ）。2007年調査は、全国の127大学288学部の協力を得て、48,233人の学生の皆さんから回答を得ることができた。この間、政策レベルでは例えば2012年の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」は、学生の主体的な学びのあり方としてアクティブ・ラーニング型への授業転換や、授業時間外の学習時間の少なさから、自律的な学びの時間の増加・確保が課題視され、個別の大学・学部レベルでも、様々な取組・工夫等が行われてきたと推察される。

そのため、この10年間で実際の学生の学びがどのように変化したのか、あるいは変化していないのか、を検証するために、2007年調査に参加した大学・学部を対象として、2018年に全国大学生調査（第2回）を実施した（以下2018年調査と呼ぶ）。2007年調査は合計31問を設定していたが、2007年調査の分析経験を踏まえて、2018年調査では合計17問の間（学年、性別に関する問いは別置）へと、絞り込んだ。問い自体は基本的に2007年調査を踏襲する設計としたが、同じ問いの中で項目を一部加えたりカットしたりしたのがあり、また新規の問いを2つ加えた。

最終的には、77大学154学部の協力を得て、32,913人の学生の皆さんから回答を得ることができた。調査協力いただいた大学・学部、そして学生の皆さんには、この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。なおこの調査ならびにこの報告書は、2018年度~2020年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(A)）「大学教育改革の動態とその規定要因」（研究代表者 金子元久）による研究成果の一部である。この報告書は、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターのウェブサイト（<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>）からもダウンロード可能となっている。

### 調査の実施時期・方法・フィードバック

2018年の9月に、2007年調査への協力校に対して、調査協力依頼を行い、調査への参加大学・学部をお願いし、最終的に上で述べた77大学154学部から協力を得られることとなった。前回調査と比較して、参加大学数は50大学、参加学部数は134学部減ったことになる。調査時期の問題や、この間、個々の大学・学部でも様々な調査の実施が進み、参加大学・学部の減少に繋がったと想定される。参加した大学・学部名を図表0-1に示す。

調査の実施は2018年11月に行った。具体的な調査方法は2007年調査と同様に、参加大学・学部には担当者を決めていただき、調査の時期、調査票の配布・回収方法については、各担当者と個別に相談しつつ決定した。仮に、調査に参加して1票以上の回収があった大学・学部を基準にした場合、配布総数に対する回収率は54.4%であった。

調査結果は、2007年調査と同様、参加大学・学部でフィードバックした。フィードバック

クの内容は、設問ごとの、全国値、当該大学の全体値、当該学部の値であり、また当該学部の値については、性別および学年別の集計値も付す形とした。加えて、2007年調査との比較も行ってもらえるように、2007年調査の結果も同様の形式で作成し、その情報も併せてフィードバックした。関連して、2007年調査と2018年調査の設問対比表も作成した上で、添付した。

図表〇ー1 参加大学一覧

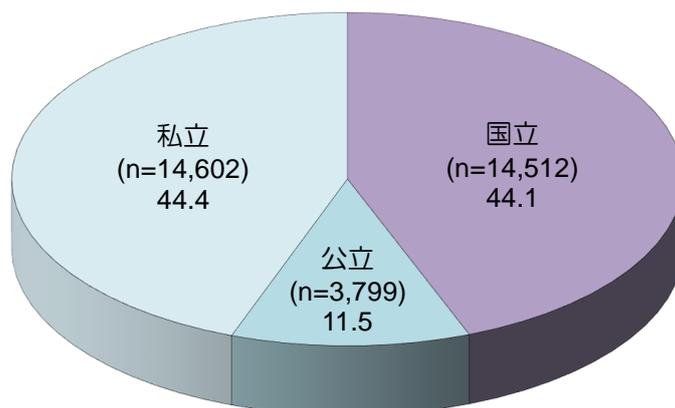
国立大学		国立大学（続き）	
東北大学	教育学部	富山大学	経済学部
	歯学部		工学部
	農学部		人間発達科学部
新潟大学	工学部		人文学部
	理学部		理学部
信州大学	医学部		山口大学
	繊維学部	広島大学	教育学部
東京大学	医学部		総合科学部
	教育学部		医学部
	教養学部		歯学部
	経済学部		生物生産学部
	工学部		文学部
	農学部	香川大学	医学部
	薬学部		教育学部
	文学部		経済学部
法学部	農学部		
理学部	九州大学	法学部	
東京工業大学	生命理工学院	九州大学	教育学部
お茶の水女子大学	理学部		芸術工学部
一橋大学	商学部		薬学部
	法学部		理学部
東京医科歯科大学	医学部	熊本大学	医学部
埼玉大学	工学部		教育学部
群馬大学	医学部		工学部
	教育学部	理学部	
	理工学部	大分大学	理工学部
山梨大学	医学部	宮崎大学	教育学部
	教育学部		工学部
静岡大学	工学部		農学部
	情報学部	鹿屋体育大学	体育学部
	人文社会科学部	鹿児島大学	農学部
応用生物科学部	理学部		
岐阜大学	教育学部	琉球大学	理学部
	工学部	公立大学	
	名古屋大学	教育学部	青森県立保健大学
経済学部		山形県立保健医療大学	保健医療学部
文学部		長野県看護大学	看護学部
京都大学	総合人間学部	都留文科大学	文学部
大阪大学	理学部	愛知県立大学	外国語学部
	工学部		情報科学部
	人間科学部		日本文化学部

公立大学（続き）		私立大学（続き）	
滋賀県立大学	環境科学部	武蔵野大学	薬学部
	工学部	立正大学	地球環境科学部
	人間看護学部	和光大学	現代人間学部
	人間文化学部	桐蔭横浜大学	医用工学部
医学部	法学部		
大阪市立大学	工学部	東洋英和女学院大学	国際社会学部
大阪府立大学	総合リハビリテーション学類	千葉商科大学	商経学部
福井県立大学	看護福祉学部	東邦大学	薬学部
	生物資源学部		理学部
福岡県立大学	看護学部	埼玉工業大学	工学部
北九州市立大学	経済学部	尚美学園大学	総合政策学部
熊本県立大学	環境共生学部	足利工業大学	工学部
	総合管理学部	愛知学院大学	薬学部
宮崎公立大学	人文学部		経営学部
沖縄県立芸術大学	美術工芸学部	愛知産業大学	経営学部
私立大学			造形学部
北海学園大学	人文学部	名古屋経済大学	経営学部
岩手医科大学	歯学部		経済学部
東北学院大学	教養学部		人間生活科学部
	経済学部		法学部
	工学部	名古屋文理大学	情報メディア学部
	文学部	千里金蘭大学	生活科学部
杏林大学	医学部	大阪女学院大学	国際・英語学部
工学院大学	工学部	関西福祉科学大学	社会福祉学部
創価大学	教育学部	星城大学	経営学部
	経済学部	関西福祉大学	社会福祉学部
	理工学部	岡山理科大学	理学部
	法学部	広島国際大学	医療福祉学部
東京家政学院大学	現代生活学部		保健医療学部
東京工芸大学	工学部	広島女学院大学	薬学部
東京国際大学	経済学部	四国大学	人間生活学部
	言語コミュニケーション学部	松山東雲女子大学	経営情報学部
	国際関係学部	九州国際大学	人文科学部
	商学部	西南女学院大学	法学部
	人間社会学部	沖縄国際大学	人文学部
日本大学	松戸歯学部		経済学部
			産業情報学部

## 0-2 データの特徴

### 設置者：全国値と比較して「国立」が多い

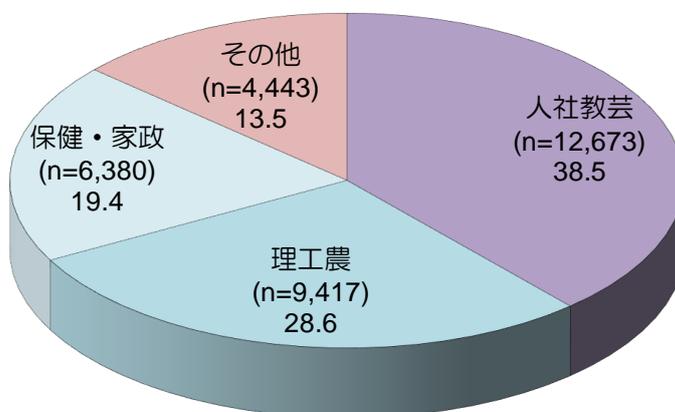
回答者の設置者別の分布を図表0-2に示した。前回の調査と比べて、「国立」の割合が10%増え、その分「公立」と「私立」の割合は減ったため、2018年の学校基本調査では17%、5%、78%という構成比なので、前回調査以上に国立の割合が高くなっている。



図表0-2 回答者の内訳（設置者別）

### 学問分野：全国値と比較して「人社教芸」が少ない

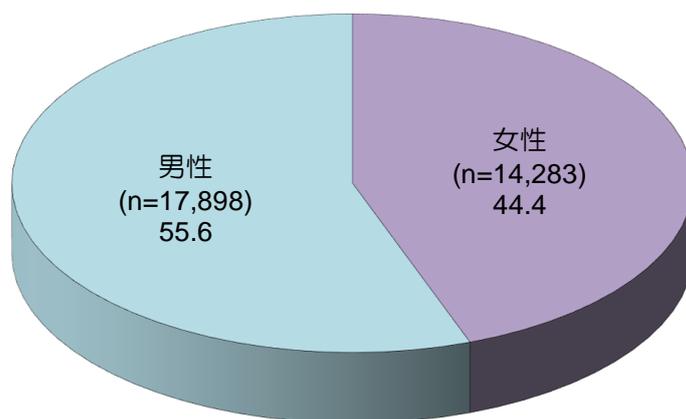
回答者の所属学問分野別の分布を図表0-3に示した。前回の調査と比べて、「人社教芸」の割合が7%減り、「理工農」と「保健・家政」は5%、4%増え、「その他」は2%減っている。その結果、2018年の学校基本調査では、「人社教芸」56%、「理工農」21%、「保健・家政」は15%、8%という構成になっているので、全国値と比較すると、「人社教芸」が少なく、「理工農」、「保健・家政」、「その他」は何れも多い構成となっている。



図表0-3 回答者の内訳（学問分野別）

### 性別：ほぼ全国値なみ

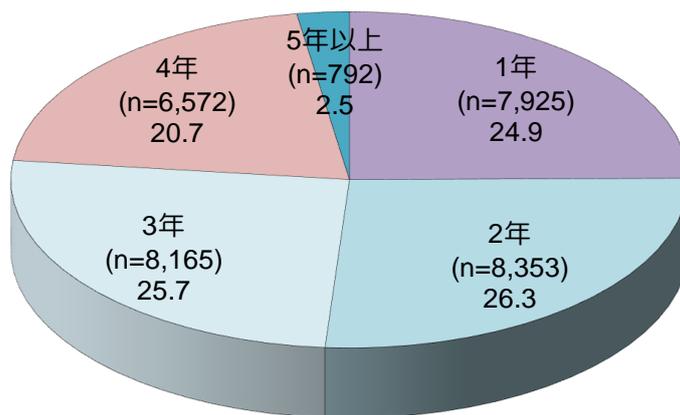
回答者の性別の分布を図表0-4に示した。前回の調査と比べて、女性の割合が若干減ったため、2018年の学校基本調査における女性と男性の比率である、45%、55%とほぼ同じ構成となっている。



図表0-4 回答者の内訳（性別）

### 学年別：4年生がやや少なめ

回答者の学年別の分布を図表0-5に示した。ほぼ均等な分布となっているものの、前回調査と比べて2年生と4年生の割合がやや減り、3年生と5年生以上がやや増加している。結果として、4年生の割合がやや少なくなっている。



図表0-5 回答者の内訳（学年別）

# 第 1 章

## 授業

## 1-1 履修科目数

### 1週間あたりの授業コマ数 最頻値は11～15コマ、保健・家政で多い履修科目数

1週間あたりの履修科目数（コマ数）は11～15コマ程度が最も多い。専門領域別に見ると、保健・家政系で16～20コマが30.3%、21コマ以上も13.4%となり、他の分野よりも明らかに多くの科目数を履修している。理工農系で0コマ（履修登録なし）が多いのは、4年生の回答者が他の分野よりやや多いためである。（図1-1）

学年別では、1年生の履修コマ数が最も多く、学年が上がるにつれて減少する。4年生では5コマ以下が約8割（最頻値は「1コマ」：25.4%）を占める。（図1-2）

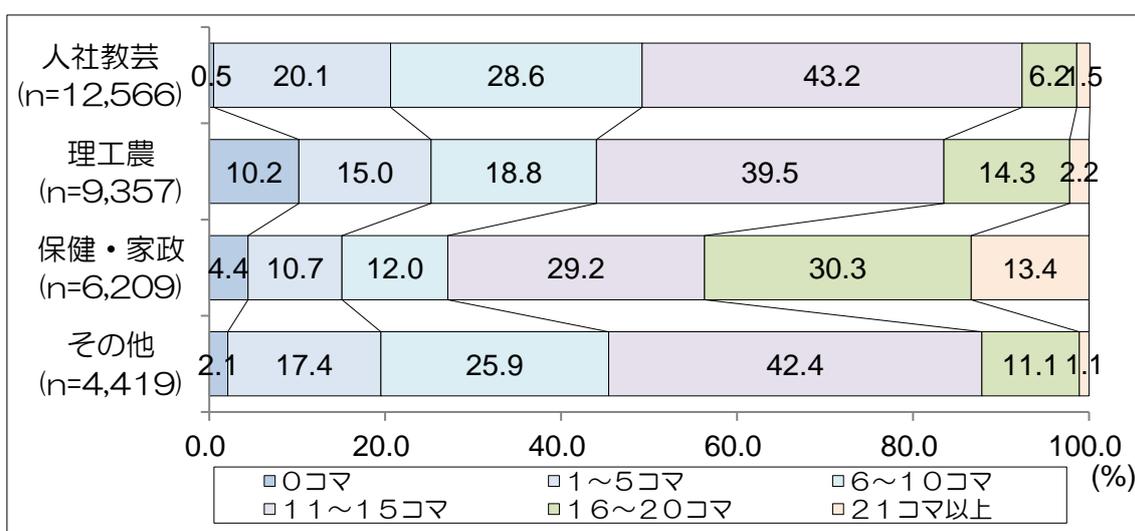


図1-1 1週間あたりの履修コマ数（専門領域別）

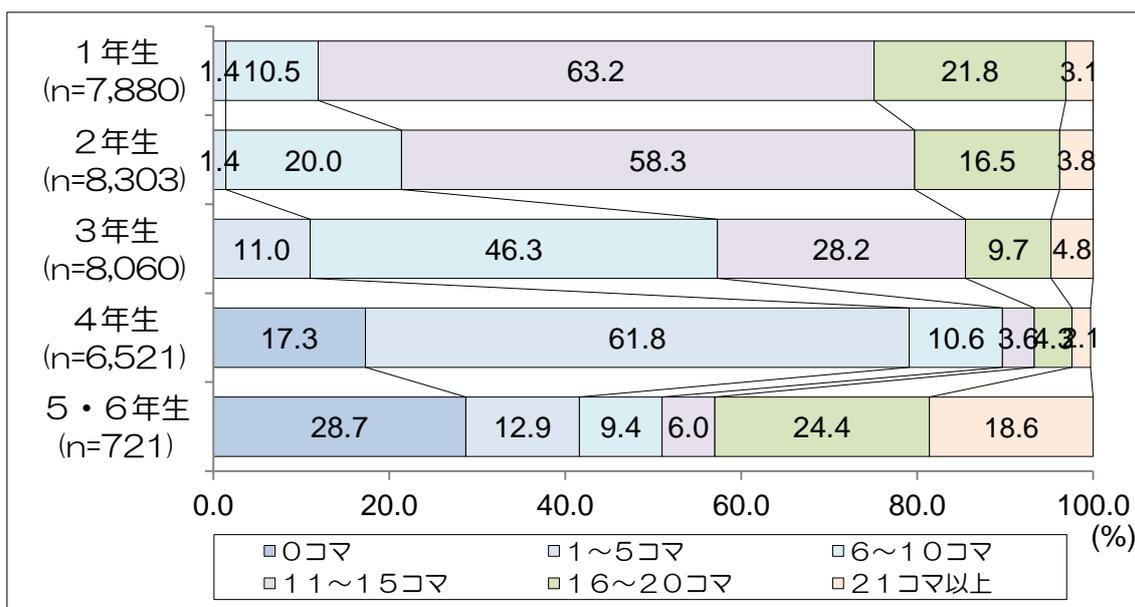


図1-2 1週間あたりの履修コマ数（学年別）

## 1-2 大学入学後の経験

### フレッシュマンセミナー経験者は全体の約25%

大学入学時に行われるフレッシュマンセミナーの経験の有無を尋ねたところ、経験者は全体の 24.4%に止まる結果となった。専門領域別にみると、人教芸系 28.2%、理工農系 24.9%、保健・家政系 17.9%、その他 21.6%の経験率となり、人教芸系における経験率がやや高い。フレッシュマンセミナーを経験した学生の中では、「非常に有用」、「有用」と回答する学生が半数以上を占めており（保健・家政系を除く）、一定の有効性が認められる。（図1-3）

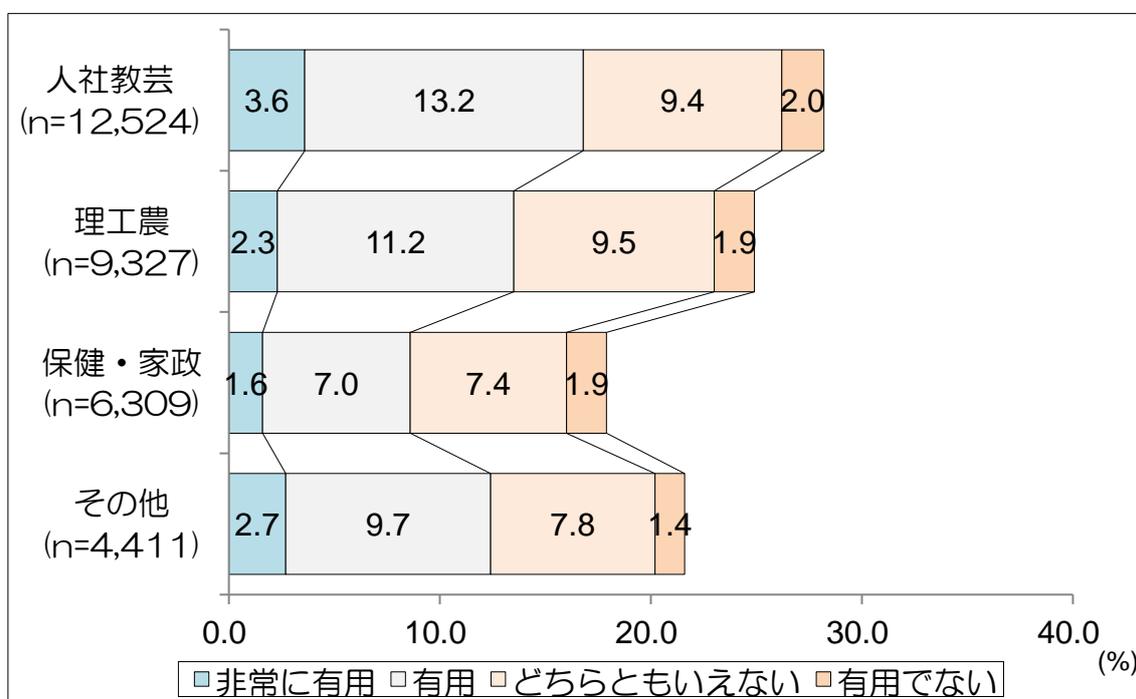


図1-3 フレッシュマンセミナーへの参加経験

### 補習科目を全体の4～5割の学生が受講。理系分野において高い受講率

「高校での未習科目を学ぶための補習的な科目」の経験の有無を尋ねたところ、全体で44.0%の学生が経験ありと回答した。専門領域別には、人社教芸系で42.7%、理工農系で44.8%、保健・家政系で48.2%、その他で40.3%の学生が経験ありと回答しており、いわゆる理系の専門領域の学生において補習的な科目の受講率はやや高い傾向にある。実際に補習科目を経験した学生のなかでは、いずれの専門領域においても「非常に有用」、「有用」だったとする回答が6割を超えている。(図1-4)

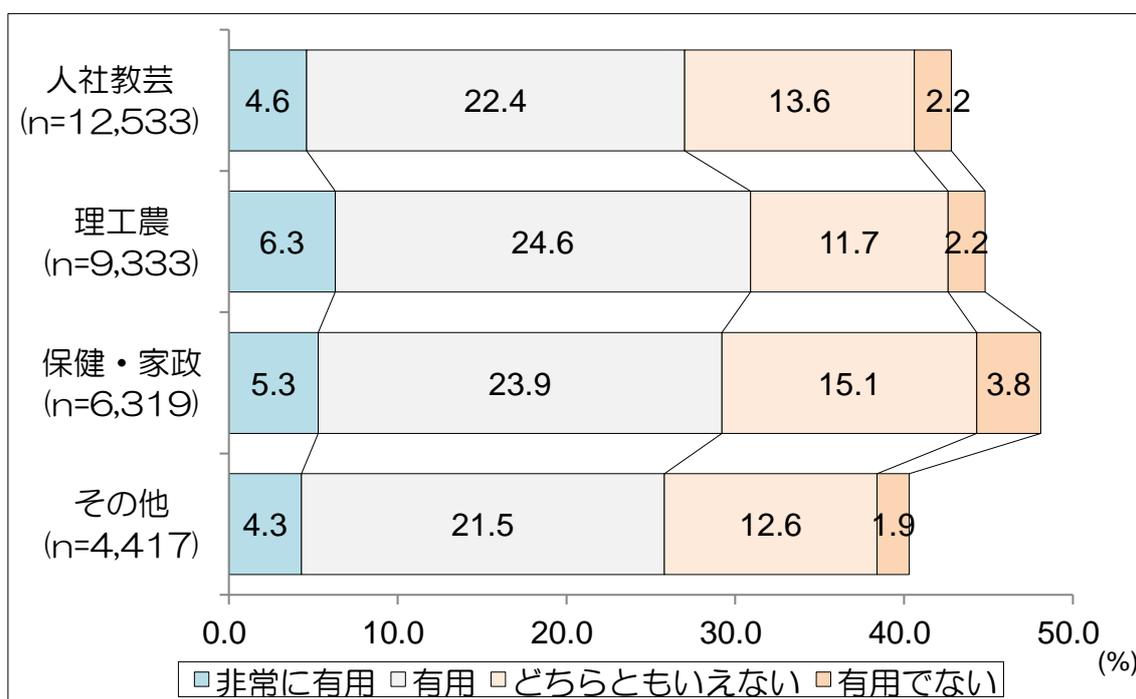


図1-4 補習科目の受講経験

### スタディ・スキルを学ぶ科目は半数の学生が経験、文系において有用性高い

「大学での勉強の方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目」の経験の有無を尋ねたところ、全体の約半数（49.6%）の学生が経験ありと回答した。専門領域別にみると、人教芸系 58.6%、理工農系 42.3%、保健・家政系 42.9%、その他 54.8%の学生が経験ありと回答しており、いわゆる文系の専門領域において経験率が高いという結果になった。

スタディ・スキルを学ぶ科目を経験した学生のうち、「非常に有用」、「有用」だったと回答した学生の比率をみても、人教芸系 69.2%、その他 66.9%に対して、理工農系 59.7%、保健・家政系 59.4%となり、経験率の高い人教芸系、その他において、有用だったと回答する学生が多い傾向にある。（図1-5）

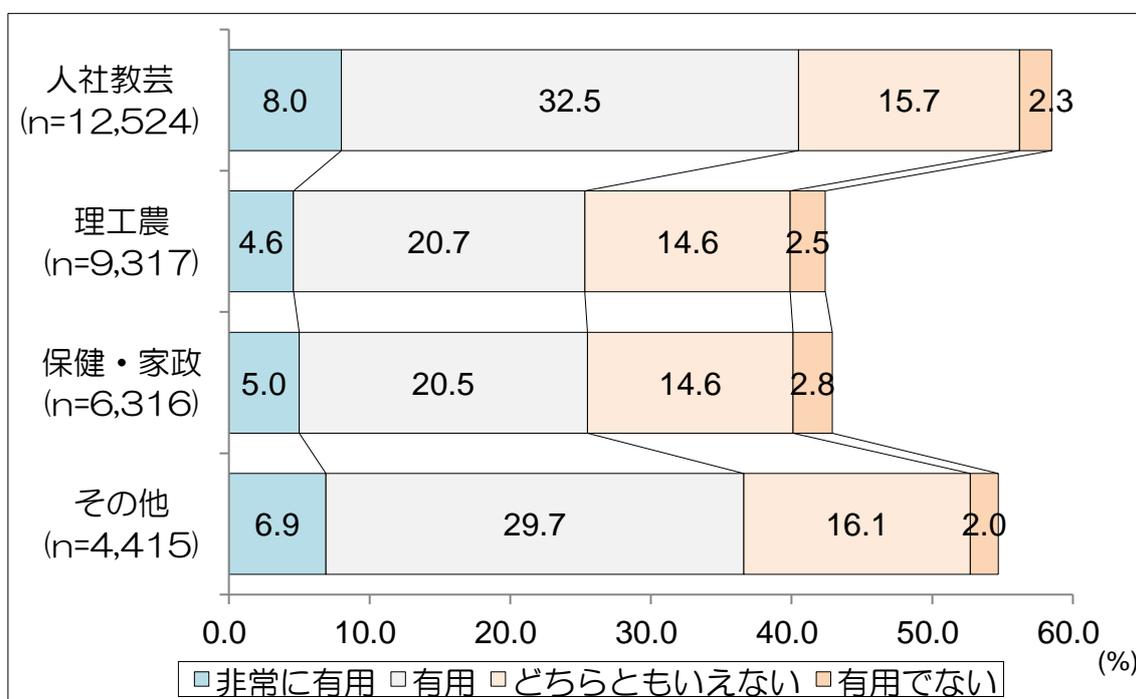


図1-5 スタディ・スキルを学ぶ科目の受講経験

### キャリア教育科目の受講率 前回調査より大きく増加

「就職や将来のキャリアをテーマにした科目」の経験の有無を尋ねたところ、全体の63.1%の学生が経験ありと回答した。専門領域別にみると、人教芸系 70.3%、理工農系 57.5%、保健・家政系 54.4%、その他 66.8%の経験率となった。2007年調査時（約50%）に比べて大きく増加した項目の一つである。

専門領域別に比較すると、専門で学ぶ内容と将来の職業・キャリアの関係がある程度明瞭な保健・家政系、理工農系に比べて、対応関係が多様な人教芸系、その他においてキャリア教育に該当する科目がより広く開講されているものとみられる。また、キャリア教育該当科目の経験が「非常に有用」、「有用」と回答した学生の割合も人教芸系、その他において高くなっている。（図1-6）

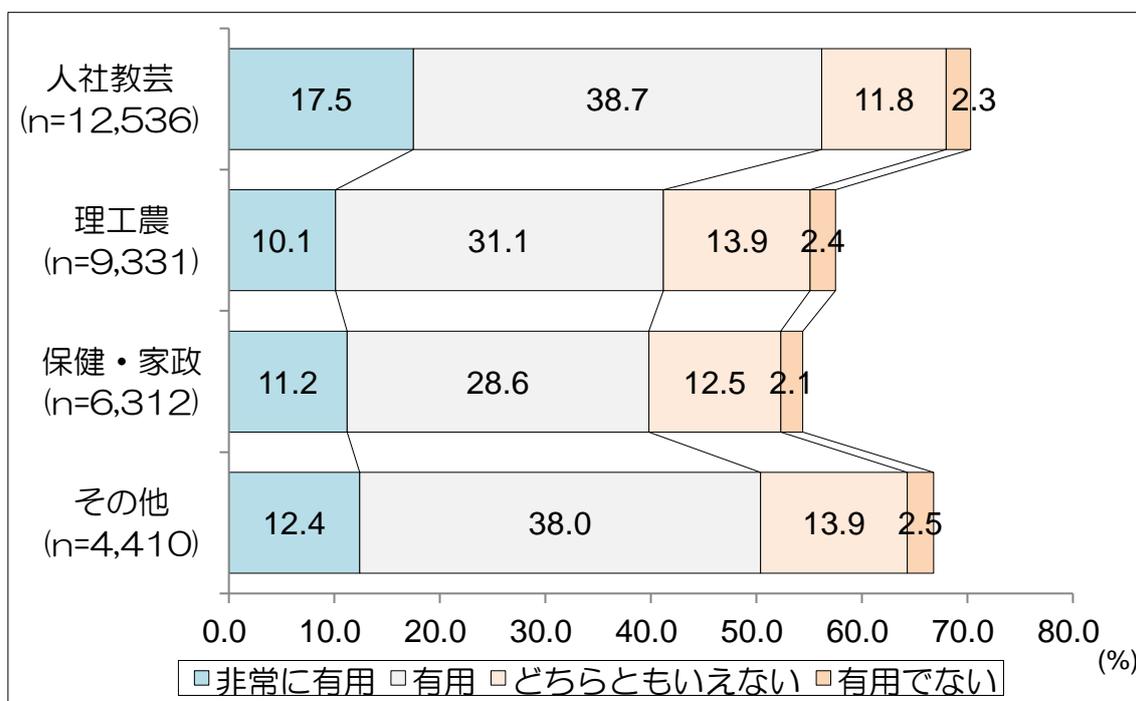


図1-6 キャリア教育該当科目の受講経験

### 約4割の学生がインターシップを経験 人社会芸系で著しく増加

「インターンシップ（教育実習や工場実習を含む）」の経験の有無を尋ねたところ、全体の38.3%の学生が経験ありと回答した。2007年調査時の24.6%に比べて大きく増加している。特に人社会芸系における増加が著しい（21.6%→43.3%）。

インターンシップの経験ありと回答した学生においては、いずれの専門領域においても8割以上の学生が「非常に有用」、「有用」と回答しており、インターンシップの成果は参加した学生からとても肯定的に評価されている。（図1-7）

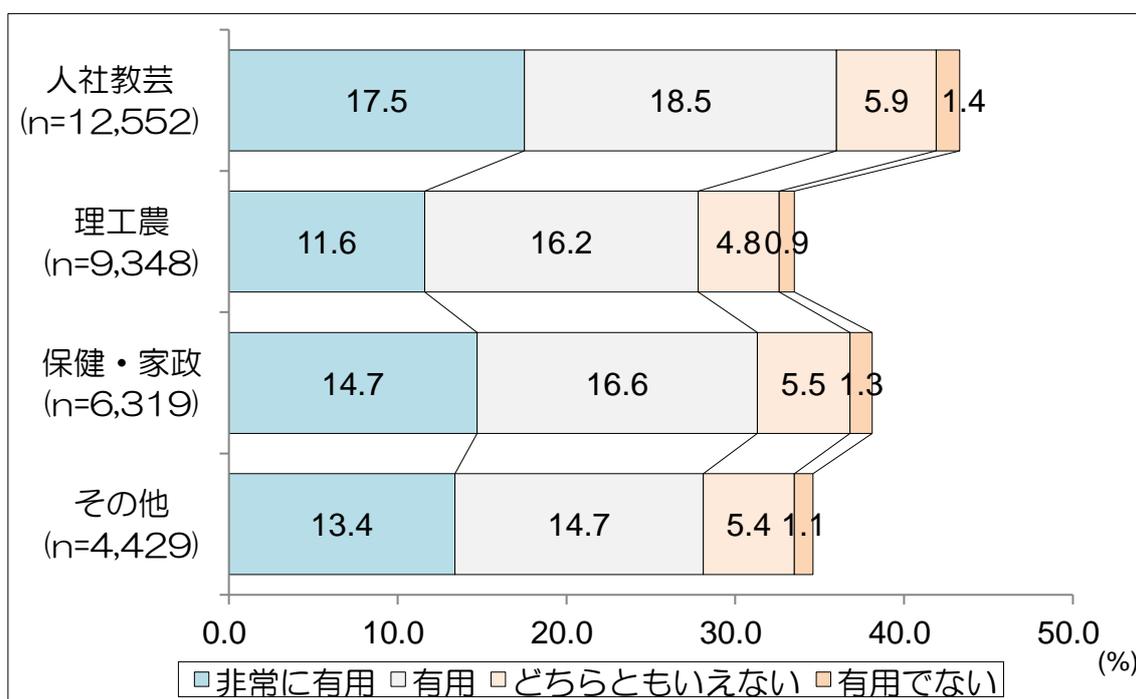


図1-7 インターンシップの受講経験

### 他学部聴講を行う学生は全体の約3割

「他学部聴講」の経験を尋ねたところ全体の30.3%の学生が経験ありと回答した。専門領域別の経験率は、人教芸系36.5%、理工農系27.1%、保健・家政系20.5%、その他33.3%となり、保健・家政系で経験者が少ない理由としては、単科系の大学が多いことに加えて、もともと必修の履修科目が多く他学部聴講が行いにくいことなどが考えられる。(図1-8)

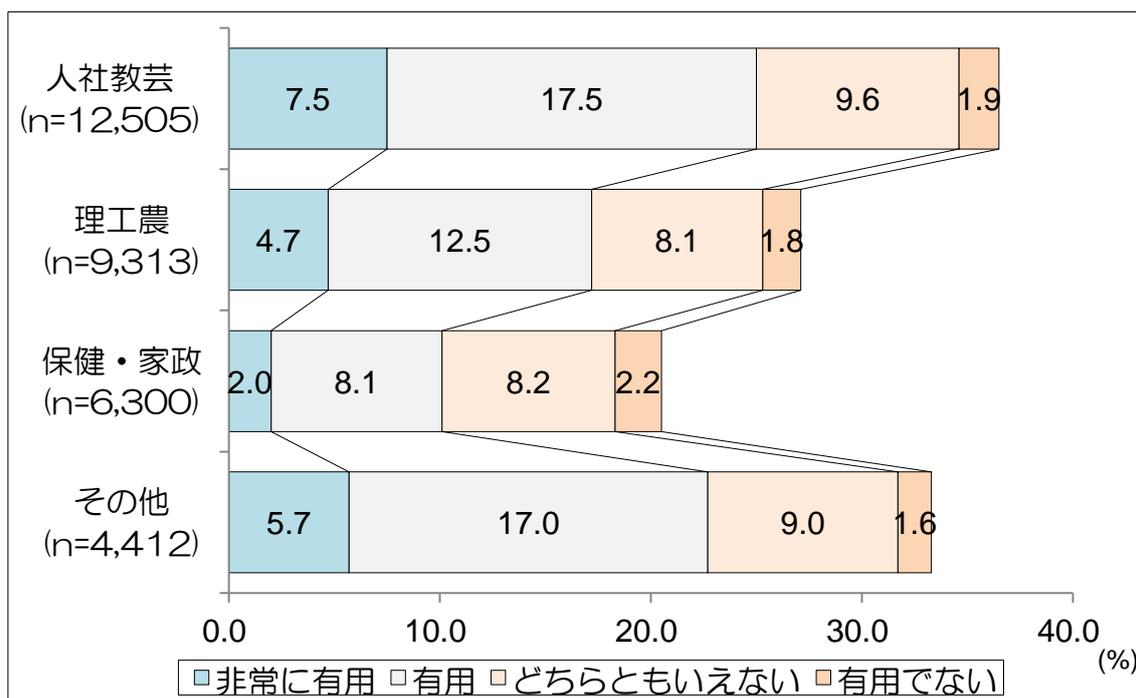


図1-8 他学部聴講の経験

### 留学(4か月未満)の経験率は約1割

留学経験について、本調査では期間が「4か月未満」のもの、「4か月以上」（1セメスタ以上に相当）のものに分けて、それぞれ経験の有無と有用性を尋ねている。

4か月未満の短期留学についてみると、全体の約1割（11.7%）の学生が経験ありと回答した。専門領域別では人社会系における経験率が15.5%と、他の専門領域の学生に比べてやや高くなっている。短期留学の経験者においてはいずれの専門領域でも7割前後の学生が「非常に有用」「有用」と回答している。（図1-9）

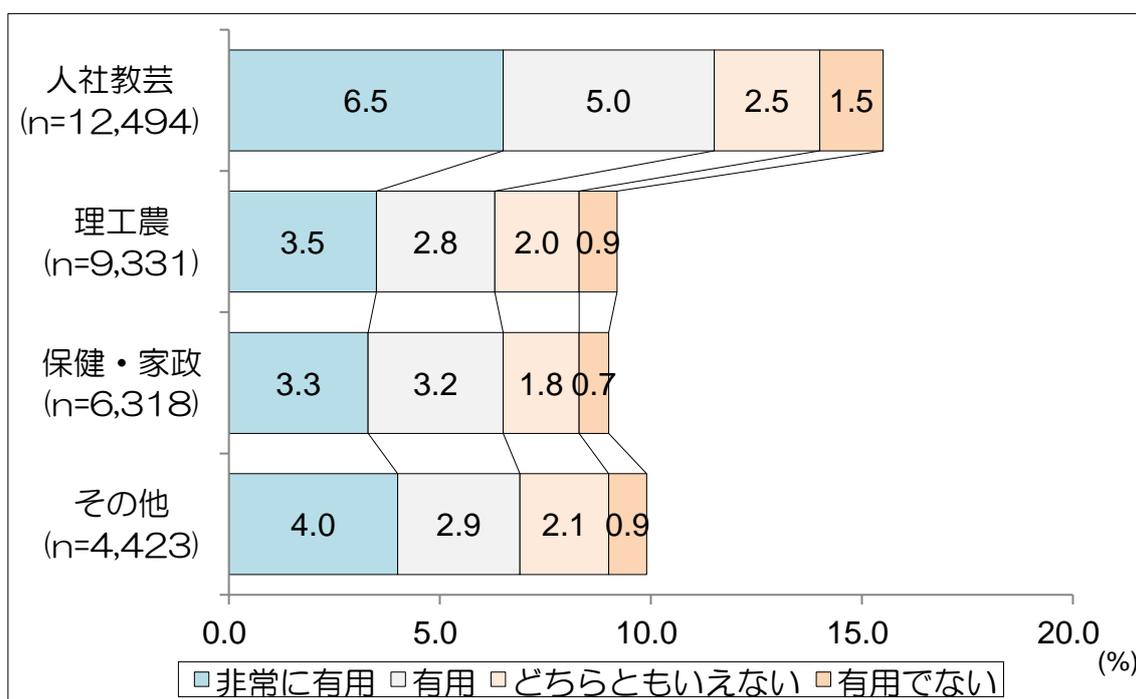


図1-9 留学（4か月未満）の経験

### 約7%の学生が4か月以上の留学を経験 短期留学と比べて評価が分かれる

4か月以上の留学については、全体の7.2%の学生が経験ありと回答した。4か月未満の短期の留学に比べて、経験率はやや低くなっている。「4か月以上」、「4か月未満」とともに経験ありと回答した学生が全体の5.6%おり、期間の長さを問わず何らかの留学経験ありと回答した学生の率は13.0%であった。4か月以上の留学においても、人教芸系の学生の参加率が10.5%と他の専門領域よりも高い。

経験者のうち、「非常に有用」、「有用」と回答した学生の割合は、いずれの専門領域においても「4か月未満」の留学経験よりも低くなった。とくに理工農系（52%）、保健・家政系（44%）において、有用性に対する評価が分かれている。（図1-10）

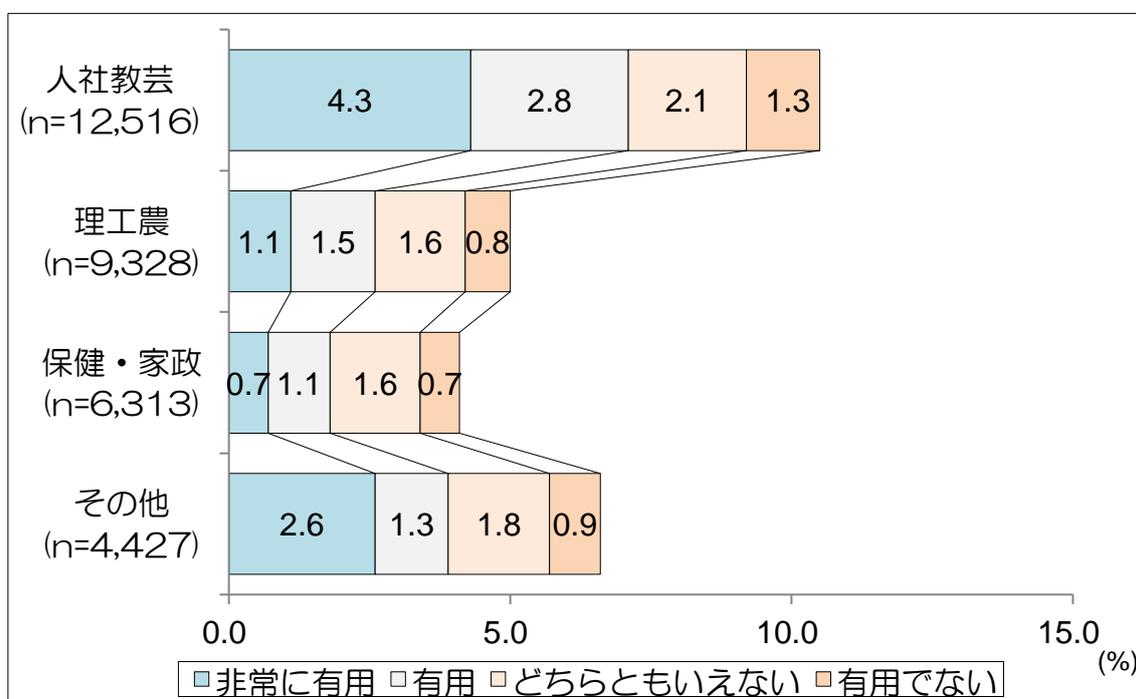


図1-10 留学（4か月以上）の経験

### 1-3 授業形態

#### これまで受けた授業の約半数は受講者数50名以上の講義形式

授業の形態を「講義（100人以上）」、「講義（50人以上100人未満）」、「講義（50人未満）」、「演習・ゼミ」、「実験・実習」の5つのカテゴリーに分け、これまで受けた授業の形態の内訳がどのようなであったかについて、合計が10割となるように記入してもらった。図1-1-1は、各授業形態の割合に対する回答の平均値を積み上げて、平均的な授業の形態の内訳を示したものである。

図が示すように、どの専門領域においても、履修した科目の約5割が、「受講者数50人以上の講義科目」、50人未満の比較的小規模クラスでの授業を含めて約8割が講義形式の科目で占められている。「演習・ゼミ」、「実験・実習」の比重は専門領域によって差があり、人社教芸系、その他では「演習・ゼミ」が、理工農系、保健・家政系では「実験・実習」の割合が高くなっている。（図1-1-1）

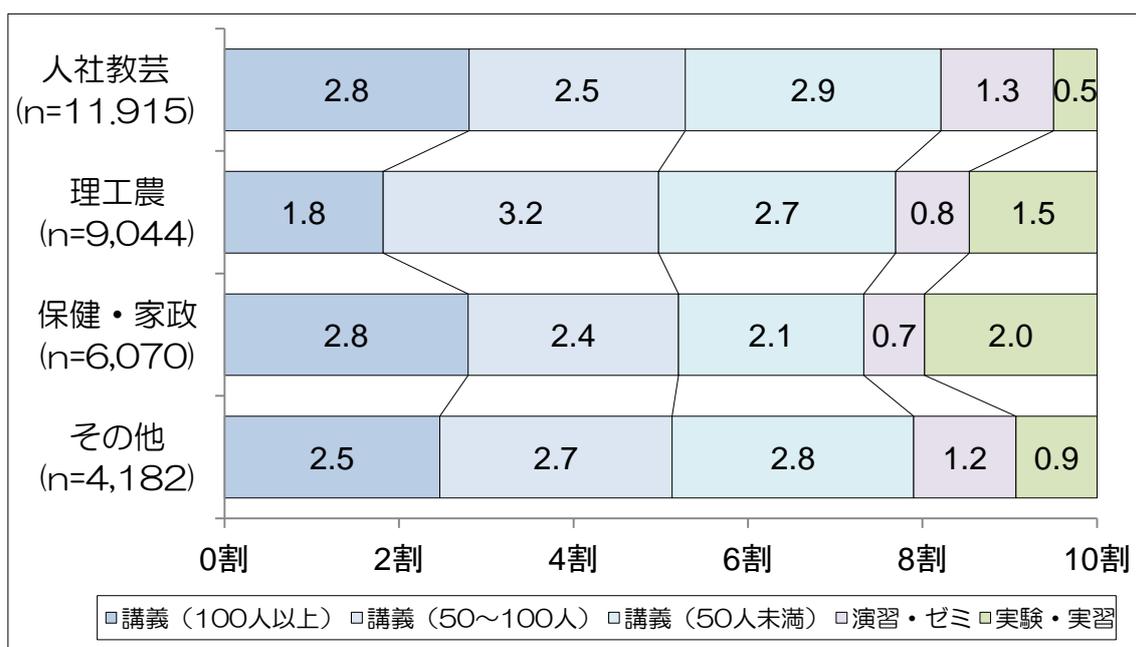


図1-1-1 授業形態の内訳（各授業形態の割合の平均値）

なお、授業の形態ごとの回答の分布は図1-1-2から図1-1-6のとおりである。

（図1-1-2、図1-1-3、図1-1-4、図1-1-5、図1-1-6）

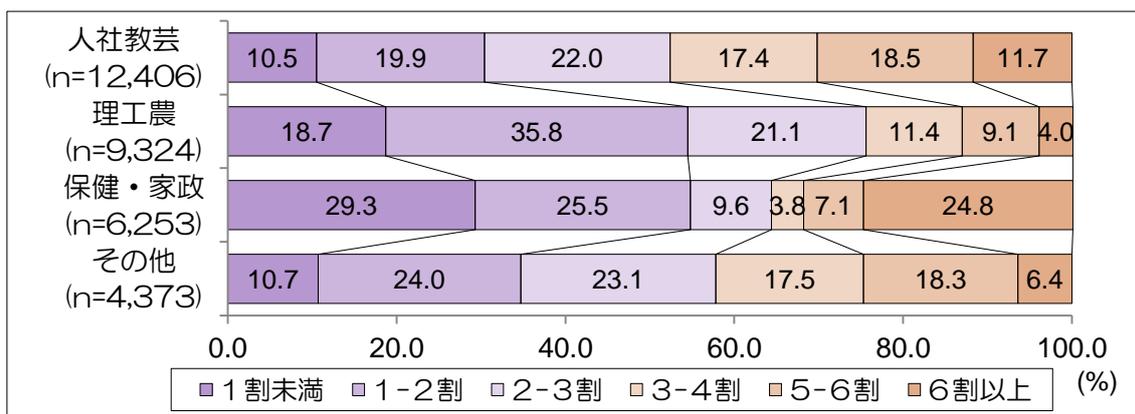


図1-12 授業形態-100人以上の講義

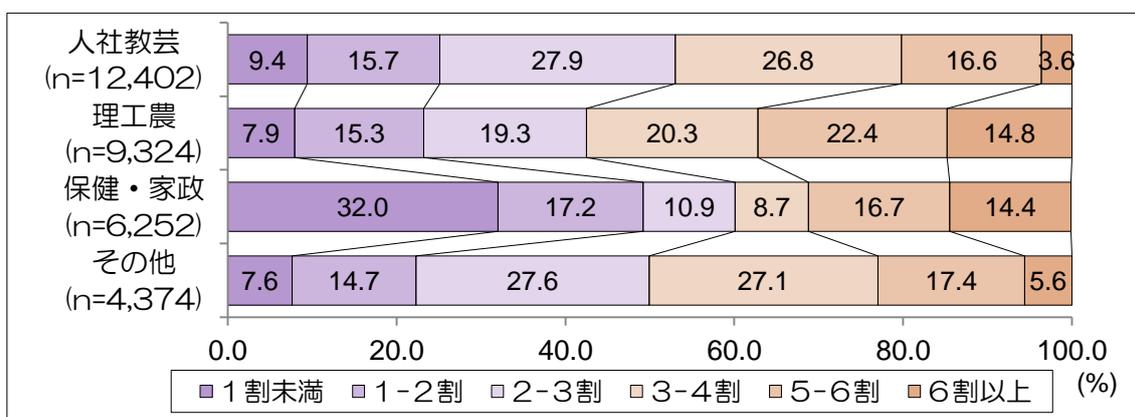


図1-13 授業形態-50人以上100人未満の講義

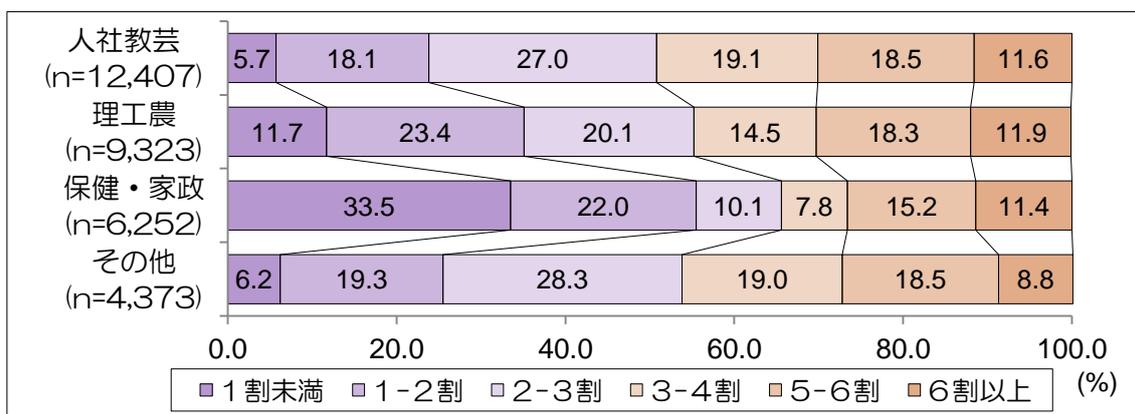


図1-14 授業形態-50人未満の講義

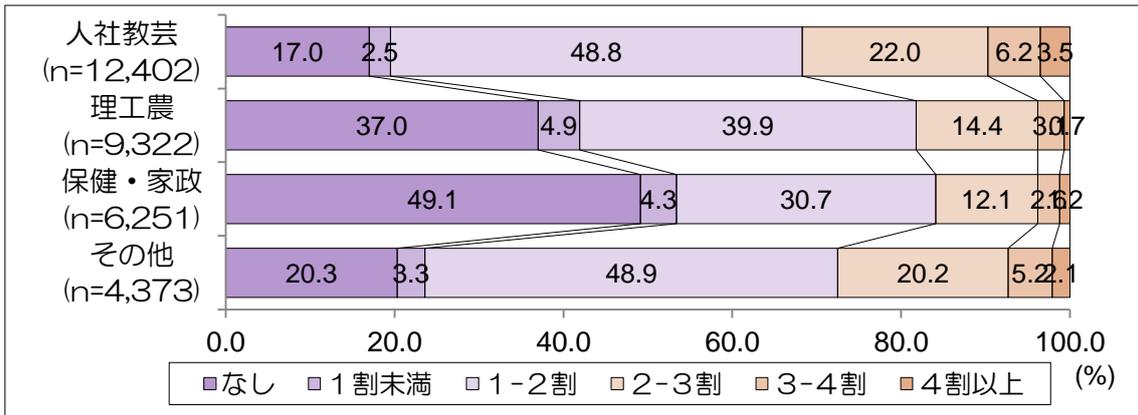


図1-15 授業形態-演習・ゼミ

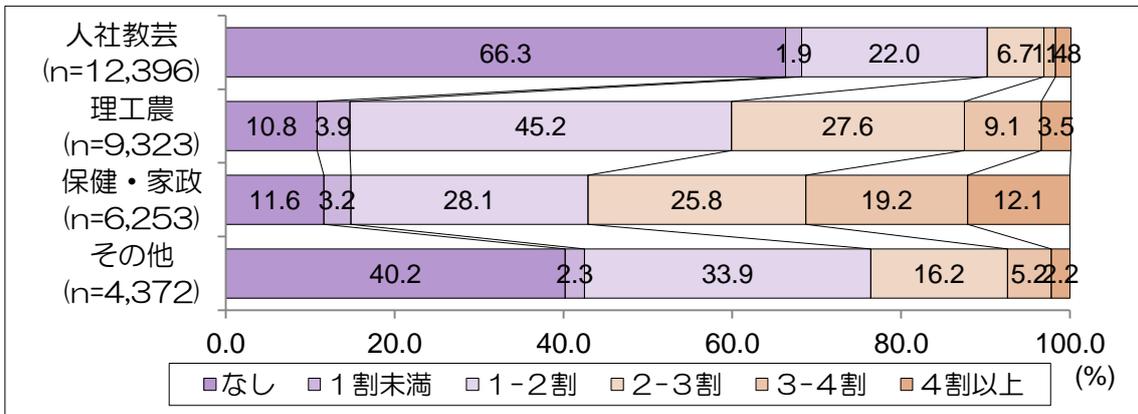


図1-16 授業形態-演習・ゼミ

## 1-4 授業の印象

### ほぼすべての学生が授業内容に興味がわくよう工夫されることを期待

これまで受けた授業が「授業内容に興味がわくよう工夫されている」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」（「よくあった」と「ある程度あった」の合計、以下図1-34まで同じ）については、全体の約7割（71.6%）の学生が「あった」と答え、「必要か」（「非常に必要」と「ある程度必要」の合計、以下同じ）についてはほぼ全員の学生が「必要」と回答している。専門領域別の集計では、前者について理工農系で肯定的な回答が7割に達しておらず、若干低くなっているが、後者については専門領域別の相違はほとんど認められない。（図1-17、図1-18）

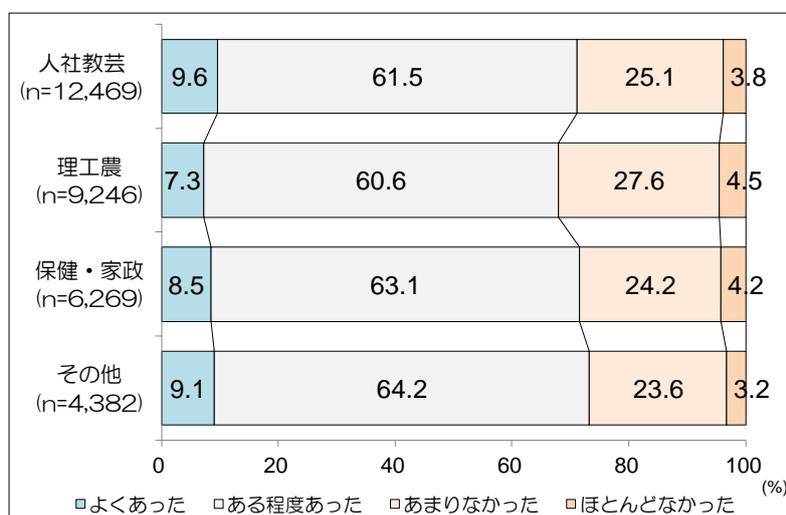


図1-17 授業内容に興味がわくよう工夫されている—経験の有無

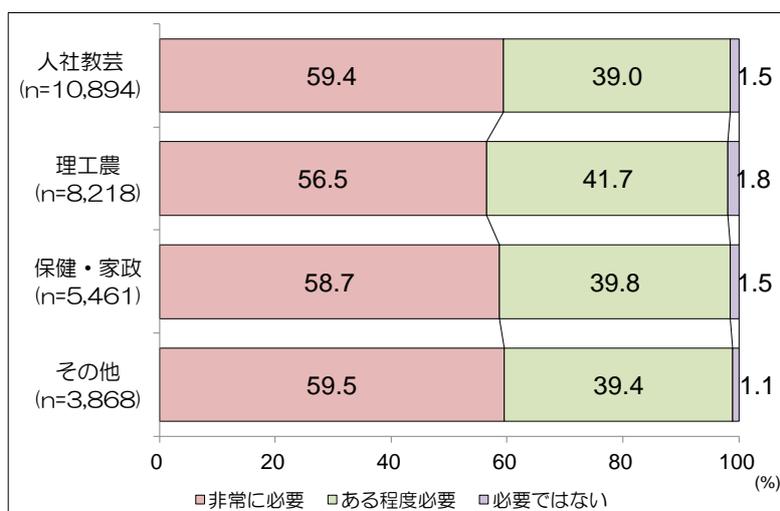


図1-18 授業内容に興味がわくよう工夫されている—必要の有無

### 授業の理解がしやすいように工夫されることは、興味がわくよう工夫される以上に期待

これまで受けた授業が「理解がしやすいように工夫されている」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、全体の8割（77.4%）近い学生が「あった」と答え、「必要か」についてもほぼ全員の学生が「必要」と回答している。また「非常に必要」という回答に着目すると、「授業内容に興味がわくよう工夫されている」以上に強く求めていることがわかる。専門領域別の集計では、「経験したか」についても「必要か」についても、専門領域別の相違がほとんどなく、どの学生にも共通の傾向となっている。（図1-19、図1-20）

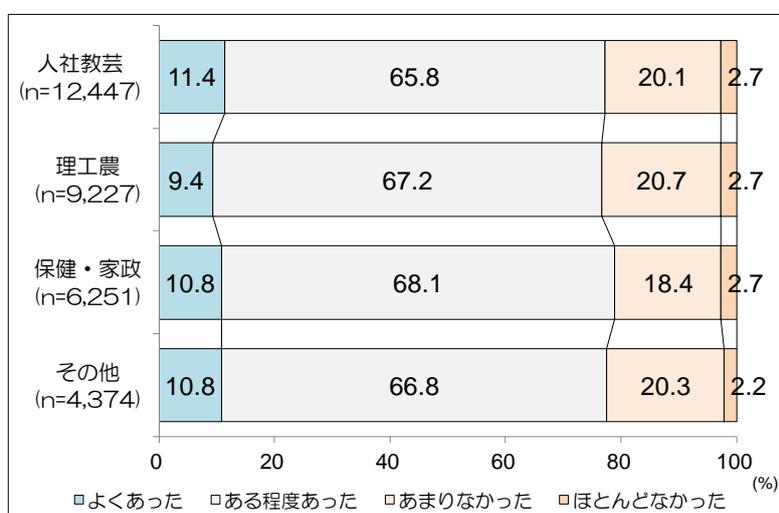


図1-19 理解がしやすいように工夫されている—経験の有無

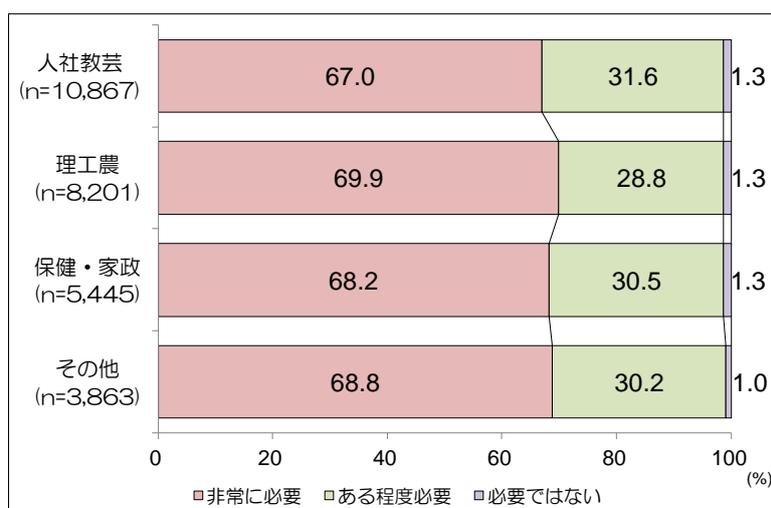


図1-20 理解がしやすいように工夫されている—必要の有無

### TA などの補助的な指導の実施は必要性に比して低く、専門領域による相違も明確

これまで受けた授業に「TA などによる補助的な指導がある」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、全体のほぼ半数(46.8%)近い学生が「あった」と答える一方、「必要か」については「非常に必要」の割合は高くないものの、8割の学生(83.3%)が「必要」と回答し、経験と必要性の間には一定のギャップが認められる。また専門領域別の相違も大きく、「経験したか」について8割近くが肯定した理工農系と他の領域との間の差が顕著である。「必要か」についても、理工農系では「非常に必要」が3割を超え、9割以上が必要という認識を示している。理工農系では、授業の補助的な指導の定着が進んでいるといえる。(図1-21、図1-22)

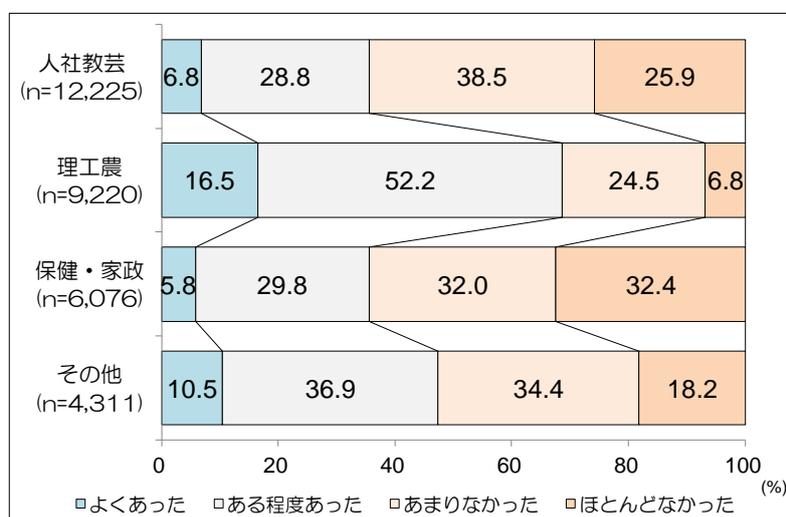


図1-21 TA などによる補助的な指導がある—経験の有無

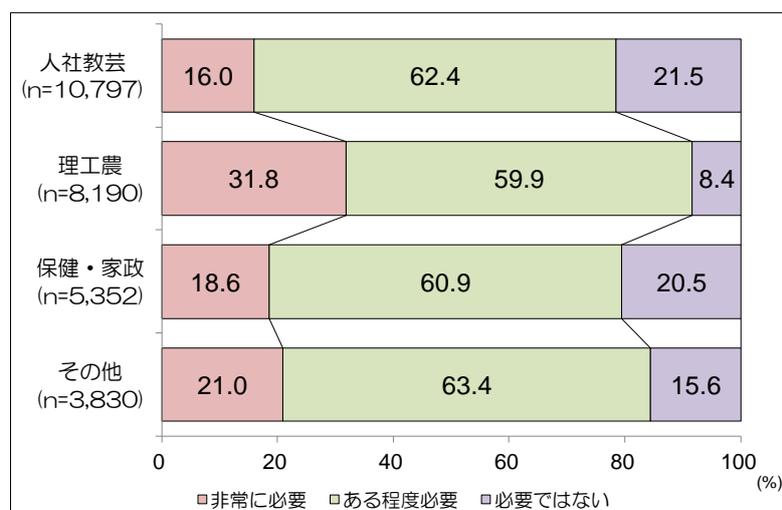


図1-22 TA などによる補助的な指導がある—必要の有無

## 出席を重視した授業が行われ、学生もそれを望んでいる

これまで受けた授業に「出席が重視される」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、8割の学生(84.0%)が「あった」と答え、「必要か」についてもほぼ同水準の8割の学生(82.3%)が「必要」と回答している。ただし専門領域別の相違もあり、保健・家政系で「よくあった」の割合が43.3%と高く、理工農系では「よくあった」の割合が28.0%にとどまる。「必要か」についても、理工農系では「必要」の割合が8割に満たない結果となっている。(図1-23、図1-24)

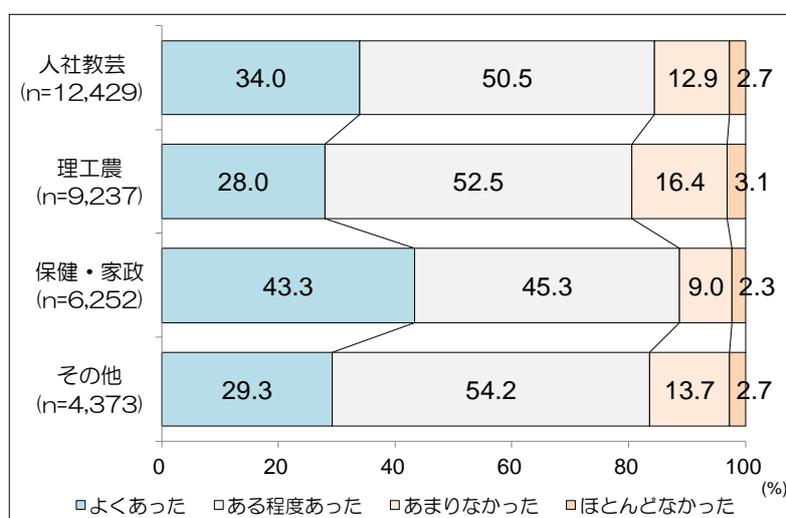


図1-23 出席が重視される—経験の有無

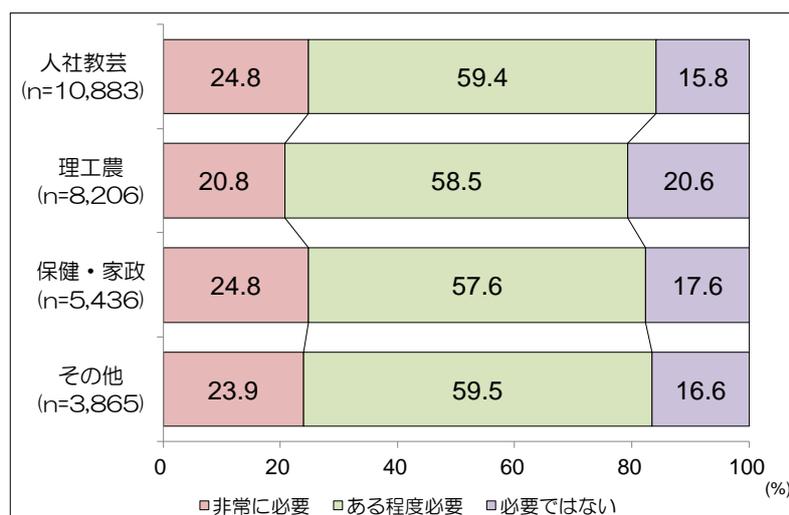


図1-24 出席が重視される—必要の有無

### 進捗を管理したり理解を確認・促したりするための課題の提出を行う授業が定着

これまで受けた授業で「最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、9割の学生（91.5%）が「あった」と答え、「必要か」についても9割の学生（89.7%）が「必要」と回答している。専門領域別にみても、「よくあった」の割合が人社教芸系で高いという相違があるものの、何れの領域でも課題が出される授業を広く経験しており、「必要か」についても、理工農系で「非常に必要」の割合が他よりも高い傾向にあるが、どの領域でも必要性は認識されている。最終試験に至る前に授業の理解度等を知り、また学習を促すための課題を提出する授業が定着し、学生もそれを望んでいるといえる。（図1-25、図1-26）

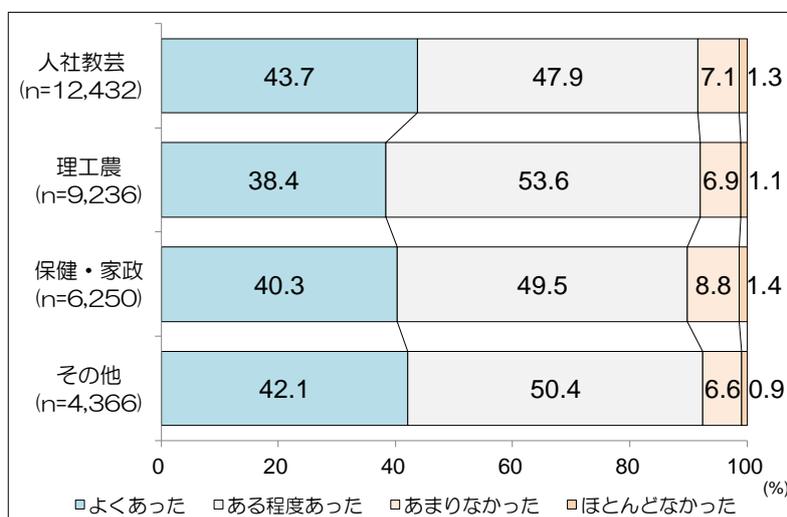


図1-25 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される—経験の有無

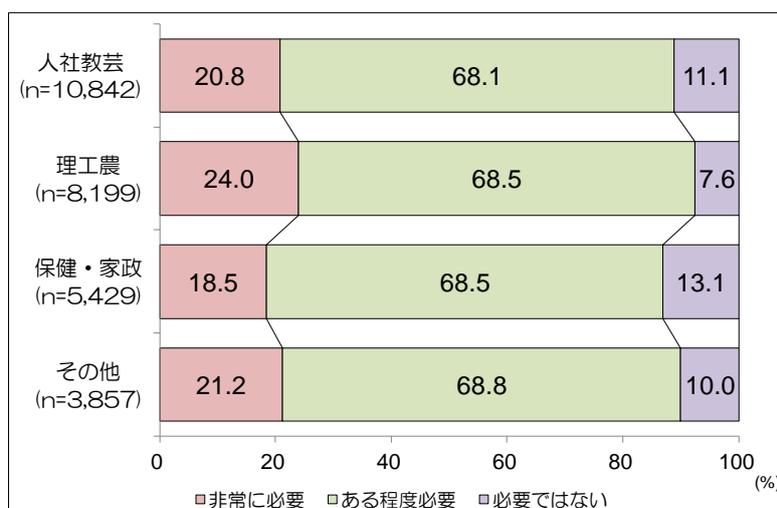


図1-26 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される—必要の有無

### 提出した課題のコメント付き返却を望むものの、十分に行われているとはいえない

これまで受けた授業で「適切なコメントが付されて課題などの提出が返却される」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、3人に1人(34.2%)しか「あった」と答えていない。他方で「必要か」については9割の学生(89.1%)が「必要」と回答し、両者にはギャップがある。専門領域別にみると、コメントを付した課題の返却は保健・家政系で相対的に進んでいるが、「必要か」については、専門領域の間に大きな相違はなく、多くの学生がそれを望んでいる。学生の要求に見合う課題返却時の対応が進んでいないといえ、授業規模等、その実現可能性や困難性も考慮しながらの対応が求められる。(図1-27、図1-28)

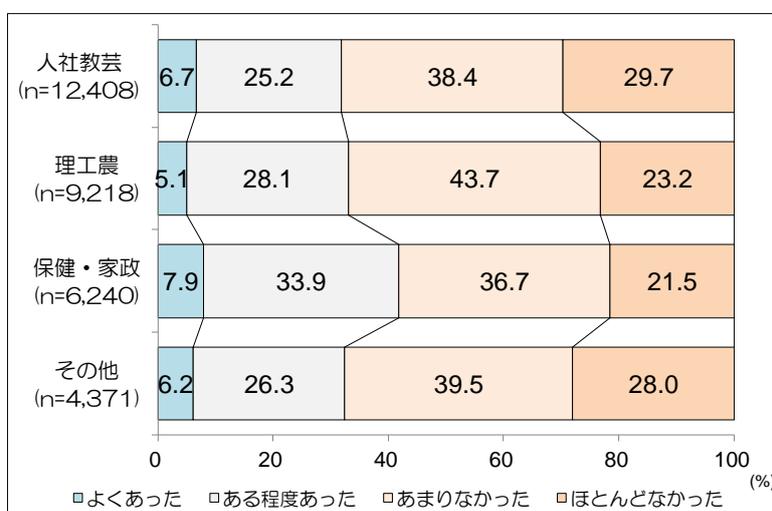


図1-27 適切なコメントが付されて課題などの提出が返却される一経験の有無

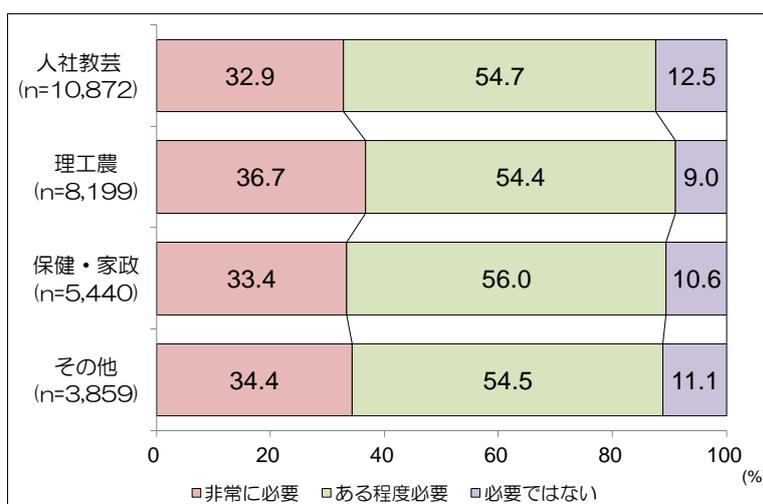


図1-28 適切なコメントが付されて課題などの提出が返却される一必要の有無

### 前回調査よりも導入は進むも意見表明を求める授業はそれほど多くない

これまで受けた授業で「授業中に自分の意見や考えを述べる」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、4割（45.4%）が「あった」と答え、「必要か」については8割以上の学生（84.9%）が「必要」と回答し、ここでも両者の間にはギャップがある。ただし、コメントを付した課題の返却に比べると、「非常に必要」と考えている割合は低めである。専門領域による相違も大きく、学問的な特性を反映している可能性もあるが、理工農系で経験した割合が低くなっている。また「必要か」についても、人教芸系に比して、理工農系や保健・家政系では「非常に必要」の割合がやや低い傾向にある。経験を通じて必要性が認識されるという側面もあり、その意味でも双方向的な授業の導入は、まだ模索中の段階にあるともいえる。（図1-29、図1-30）

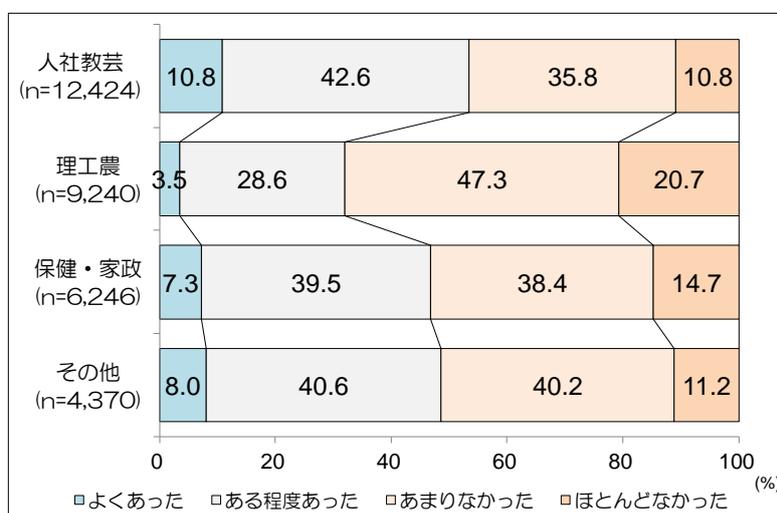


図1-29 授業中に自分の意見や考えを述べる—経験の有無

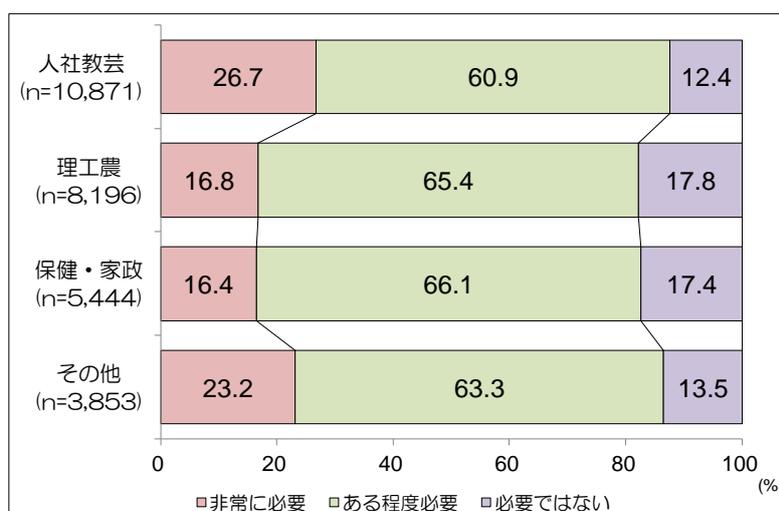


図1-30 授業中に自分の意見や考えを述べる—必要の有無

### 参加型の授業も前回調査よりも導入進んでいるが、専門領域による相違も小さくない

これまで受けた授業で「グループワークなど、学生が参加する機会がある」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、6割(62.0%)が「あった」と答え、「必要か」については9割の学生(88.9%)が「必要」と回答し、「授業中に自分の意見や考えを述べる」よりはギャップが小さいものの、両者にはズレもある。専門領域による相違も明確で、経験者は保健・家政系の7割に対して理工農系では5割未満となっている。「必要か」については、人社教芸系に比して、理工農系や保健・家政系で「非常に必要」の割合がやや低い点は、「授業中に自分の意見や考えを述べる」の回答と同様である。主体的な学びというのはグループワーク等の参加型授業に限定されないものの、どのように位置づけていくかが問われている。(図1-31、図1-32)

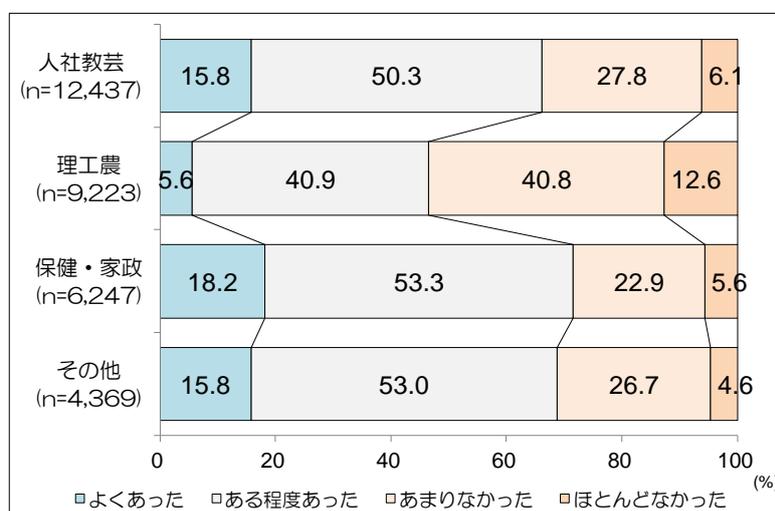


図1-31 グループワークなど、学生が参加する機会がある—経験の有無

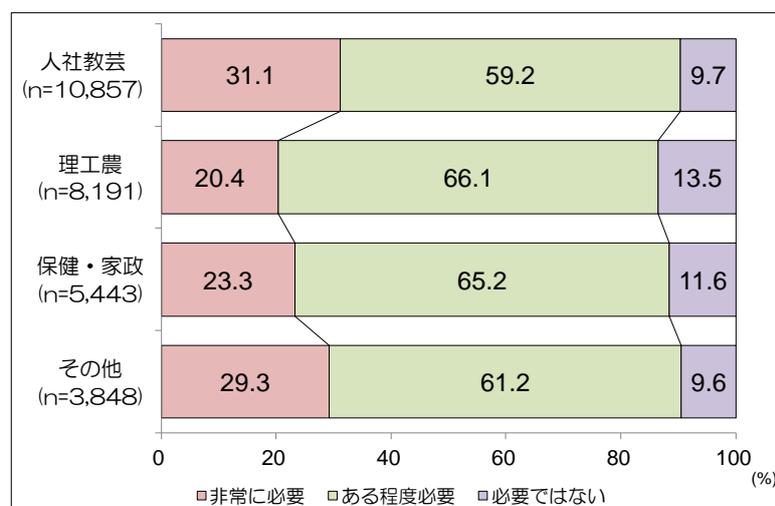


図1-32 グループワークなど、学生が参加する機会がある—必要の有無

### 予習・復習が前提の授業にはまだなっていない

これまで受けた授業で「予習・復習が必ず必要とされている」かについて「経験したか」と「必要か」という項目で尋ねたところ、「経験したか」については、約半数（46.7%）が「あった」と答え、「必要か」については8割の学生（82.8%）が「必要」と回答している。専門領域別では、人教芸系で経験者の割合が42.6%と理工農系や保健・家政系よりも低くなっている。「必要か」については、専門領域間で大きな相違は認められない。予習・復習の要求は授業外の学習時間とも関わる事項だが、要求する・要求されるのが前提という状況にはなっていない。（図1-33、図1-34）

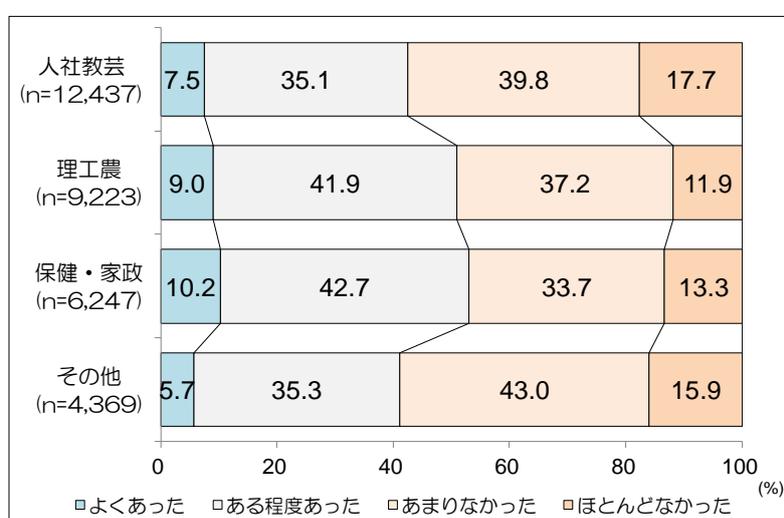


図1-33 予習・復習が必ず必要とされている—経験の有無

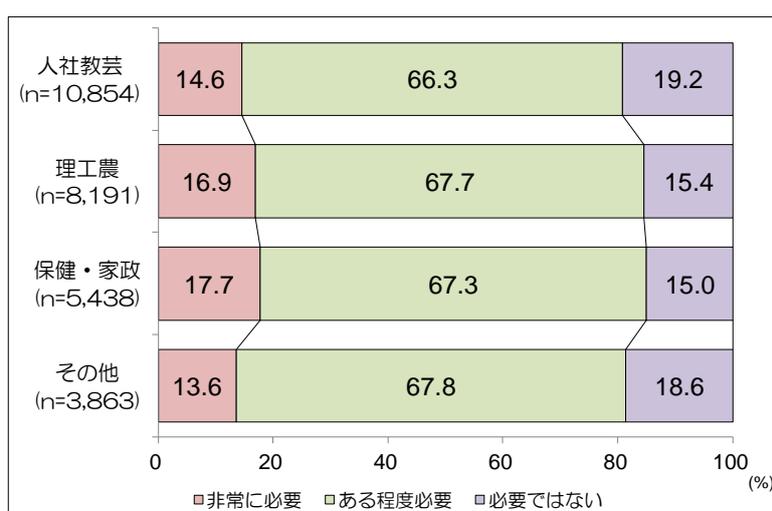


図1-34 予習・復習が必ず必要とされている—必要の有無

## 1-5 成績

### 優(A)の割合 2割以上3割未満で最も多い

学生の成績に関して優(A)の割合について尋ねた。全体では優(A)の割合は2割以上3割未満で最も多くなっているが(15.5%)、保健・家政のみ1割以上2割未満で最も多くなっている(図1-35)。

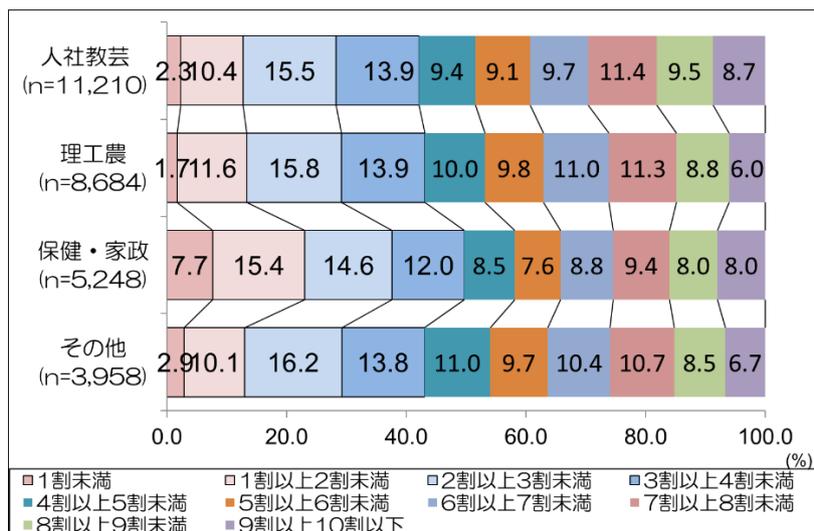


図1-35 優(A)の割合

### 良(B)の割合は3割以上4割未満で最も多い

学生の成績に関して良(B)の割合について尋ねた。全体では良(B)の割合は3割以上4割未満で最も多くなり(21.7%)、この傾向は分野を超えて共通である(図1-36)。

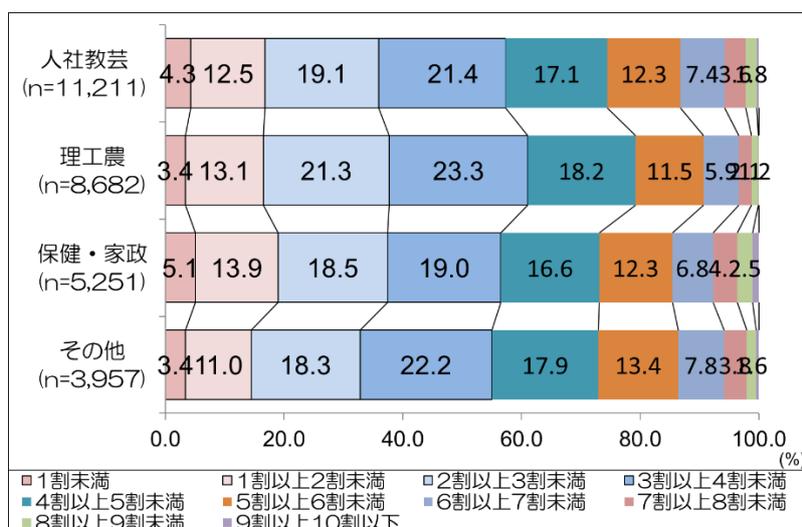


図1-36 良(B)の割合

### 可(C)の割合は1割以上2割未満で最も多い

学生の成績に関して可(C)の割合について尋ねた。全体では可(C)の割合は1割以上2割未満で最も多くなっており(30.9%)、この傾向は分野を超えて共通である(図1-37)。

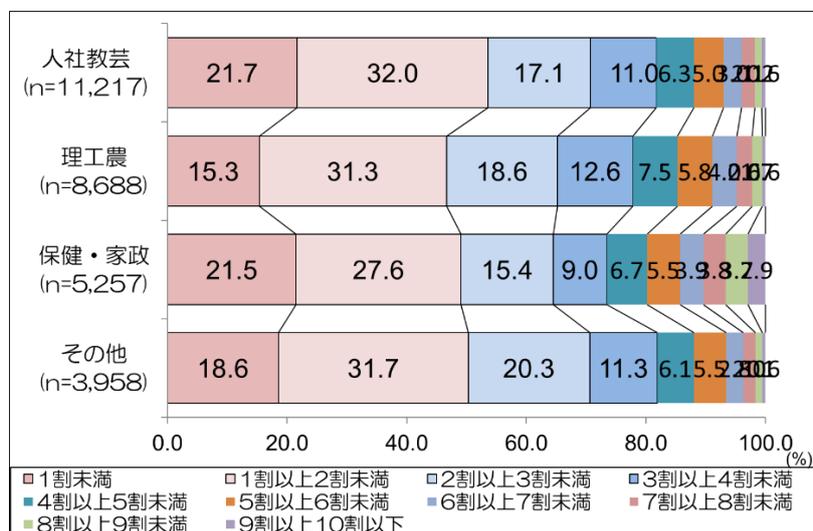


図1-37 可(C)の割合

### GPAは2.5以上3未満で最も多い

学生の成績に関してGPAについて尋ねた。全体ではGPAは2.5以上3未満で最も多くなっているが(28.8%)、人社会芸と保健・家政では3以上3.5未満で最も大きくなっている(図1-38)。

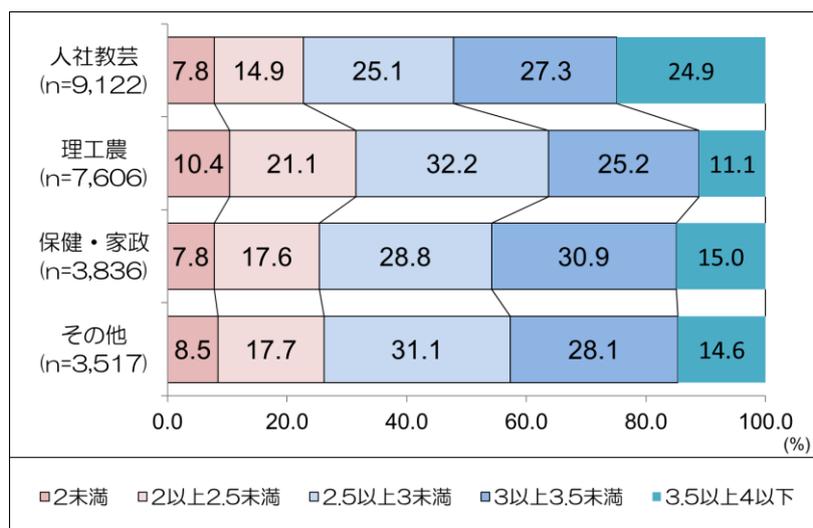


図1-38 GPA

## 1-6 卒業論文・卒業研究とゼミ・研究室への所属

### 卒業論文・卒業研究が必修であるものは8割弱

3年生以上の学生に卒業論文・卒業研究が必修であるかどうかについて尋ねた。卒業論文・卒業研究が必修であるものは全体で7割以上であり（75.5%）、「必修ではないが、執筆・実施する」も合わせると84.7%となる。必修である比率は理工農において特に高い。次いで、その他、人社教芸、保健・家政の順となる（図1-39）。

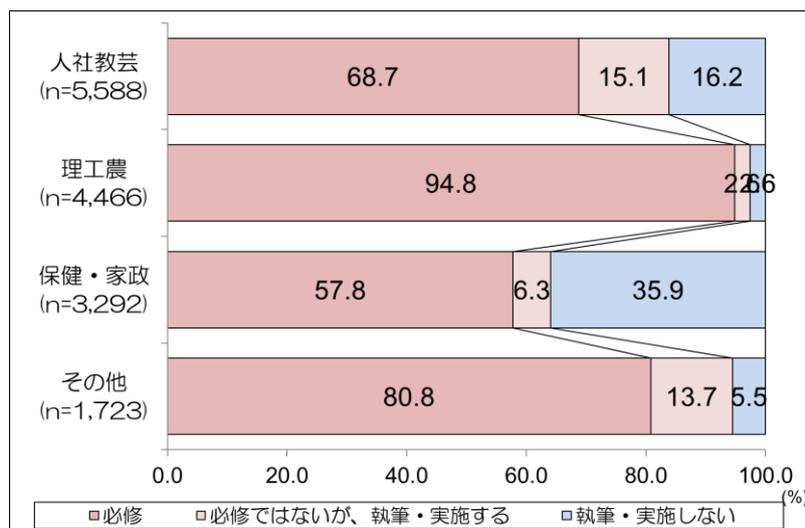


図1-39 卒業論文・卒業研究が必修であるもの

### 大多数のものがゼミ・研究室に所属

3年生以上の学生にゼミ・研究室への所属について尋ねた。全体で76.0%のものがゼミ・研究室に所属していると答えた。その比率はその他、人社教芸で高く、次いで理工農、保健・家政の順となる

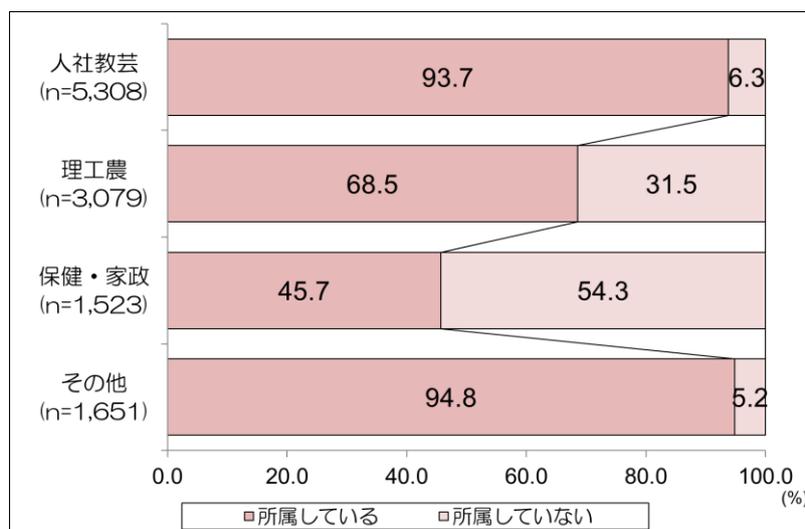


図1-40 ゼミ・研究室への所属

### ゼミ・研究室の教育を意味あるものと評価する学生が大多数

3年生以上の学生にゼミ・研究室の教育について尋ねた。全体で91.4%のものがゼミ・研究室での教育に意味があると考えている（「とても意味がある」48.6%、「ある程度、意味がある」42.8%）。その比率は分野間で大きな差はない（図1-41）。

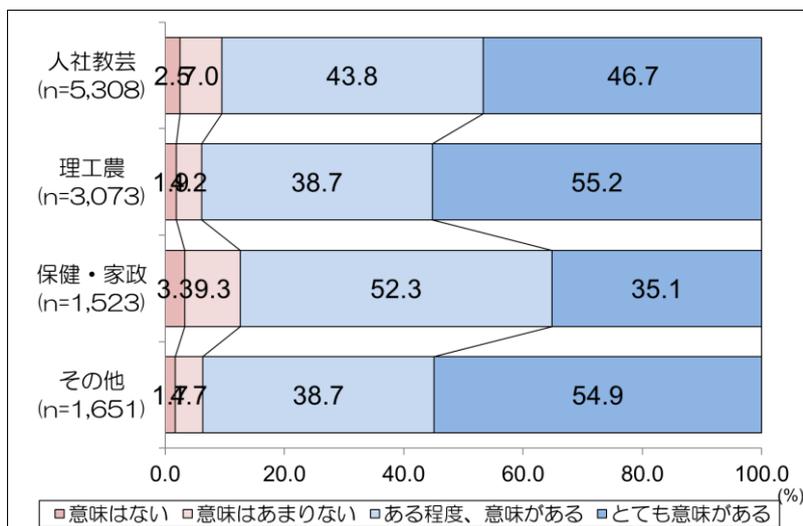


図1-41 ゼミ・研究室の教育の意味

### ゼミ・研究室へ所属していない理由は制度がないもしくは時期ではない

3年生以上の学生のうちゼミ・研究室に所属していない学生にその理由を尋ねた。理工農では96.2%が「まだ所属する時期ではない」としており、人社会教芸、保健・家政では、「所属するという制度がない」「まだ所属する時期ではない」の割合が概ね半々となっている（図1-42）。

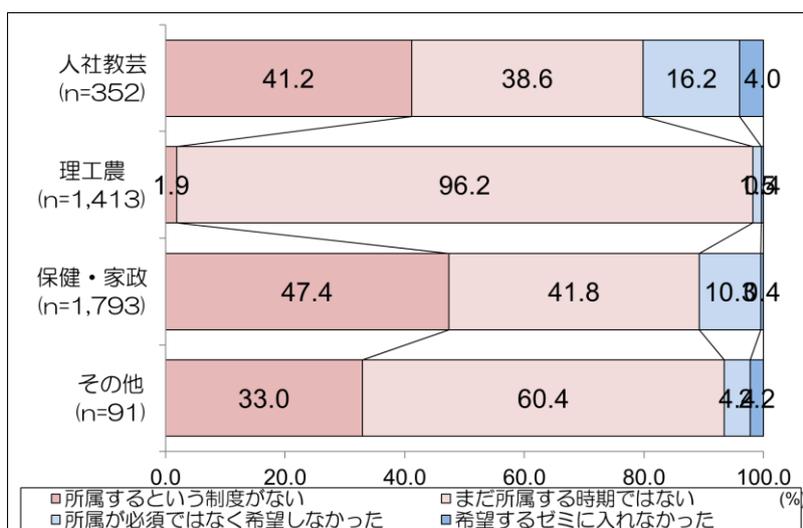


図1-42 ゼミ・研究室へ所属していない理由

## 第 2 章

### 大学教育への評価

## 2-1 大学の授業と自分との関係

### 保健・家政以外では、4割強の学生が卒業後にやりたいことが決まっていない

卒業後にやりたいことが決まっている傾向が強いのは、保健・家政である。しかし、それ以外の分野では、やりたいことが決まっていない学生はおおよそ4割強である(図2-1)。学年別では、やりたいことが決まっている学生は2年生で微減し、その後は学年が上がるにつれて増える傾向がある(図2-2)。

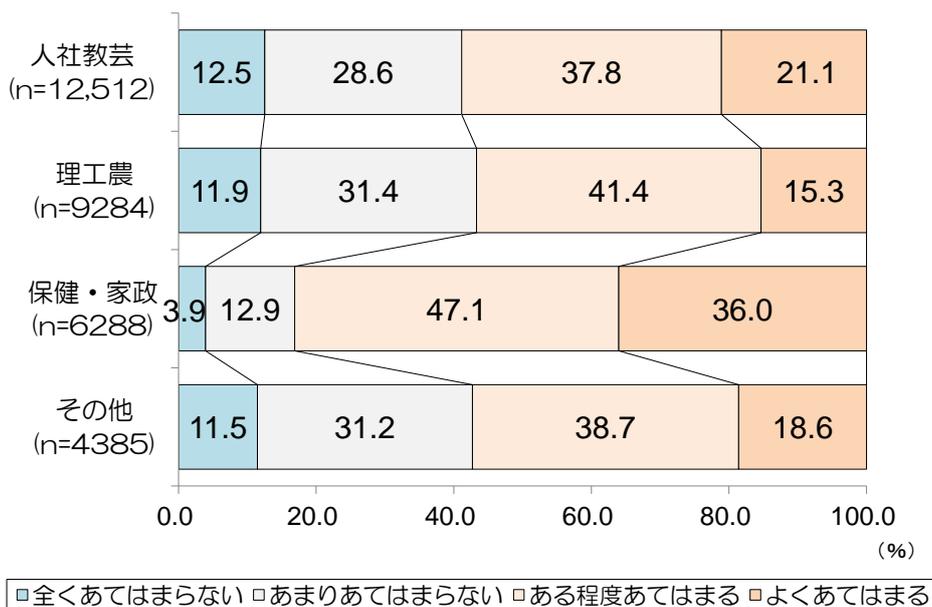


図2-1 卒業後にやりたいことは決まっている—専門分野別

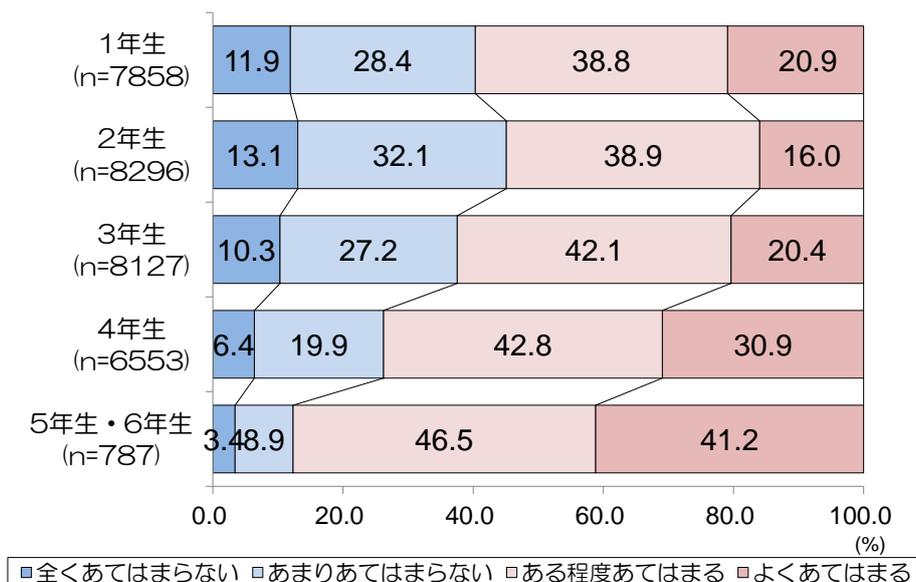


図2-2 卒業後にやりたいことは決まっている—学年別

### 将来と授業の結びつきが強い保健・家政、結びつきが弱い人社会芸

大学の授業が学生のやりたいことに密接している傾向が強いのは、保健・家政である。それ以外の分野では結びつきが弱く、人社会芸では47%、理工系では41%、その他では42%の学生が、やりたいことと授業が結びついていないと回答している（図2-3）。学年別に見ると、5・6年生は分野の影響の違いを反映しているだけであり、この傾向は学年によってそれほど変わるわけではない（図2-4）。

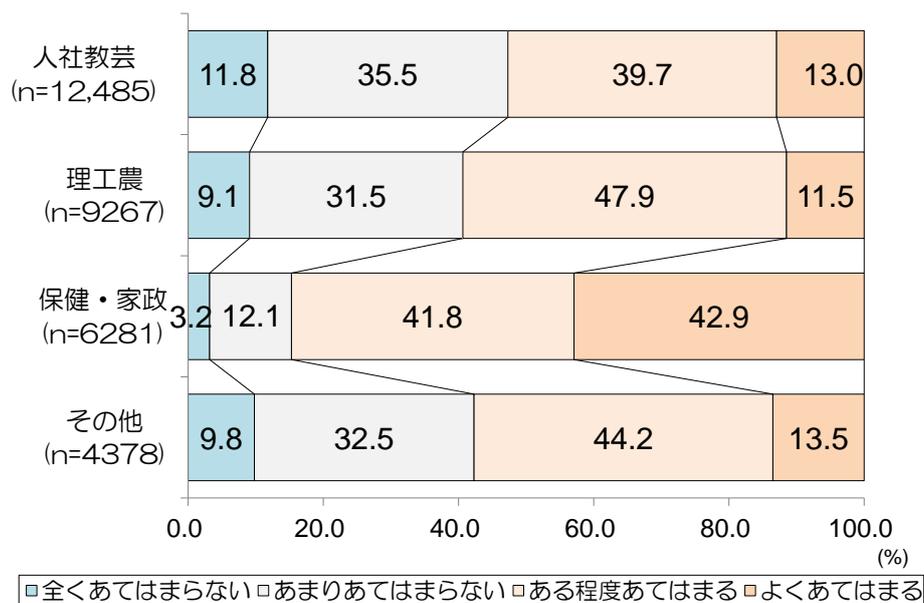


図2-3 大学での授業はやりたいことに密接にかかわっている—専門分野別

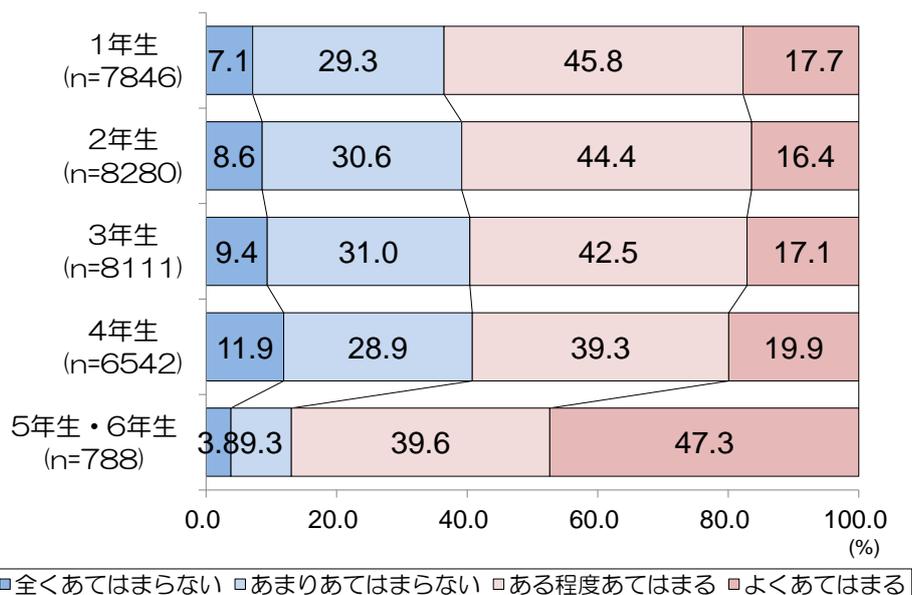


図2-4 大学での授業はやりたいことに密接にかかわっている—学年別

### 専門分野を問わず、6-7割の学生が授業を通じてやりたいことを見つけたい

やりたいことが決まっているかどうかは専門分野による違いが見られたが、どの分野でも授業を通じてやりたいことを見つけたいという授業への期待は高い。人社教芸でやや低いが、それでも67%である(図2-5)。学年別にみると、1年生でそうした希望が最も強く、2年生、3年生、4年生になるにつれて、減る傾向がみられる(図2-6)。

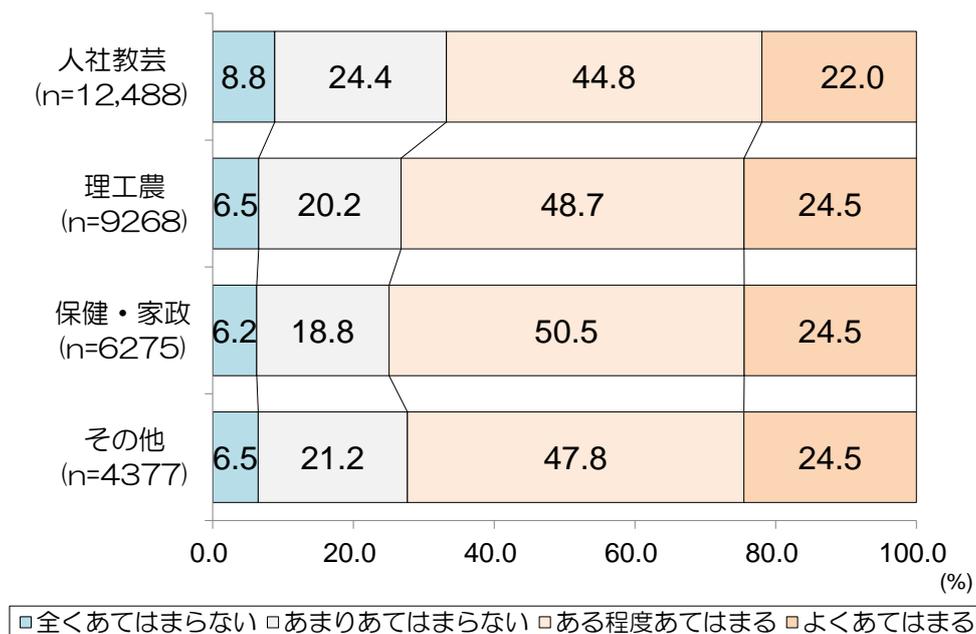


図2-5 授業を通じてやりたいことを見つけたい—専門分野別

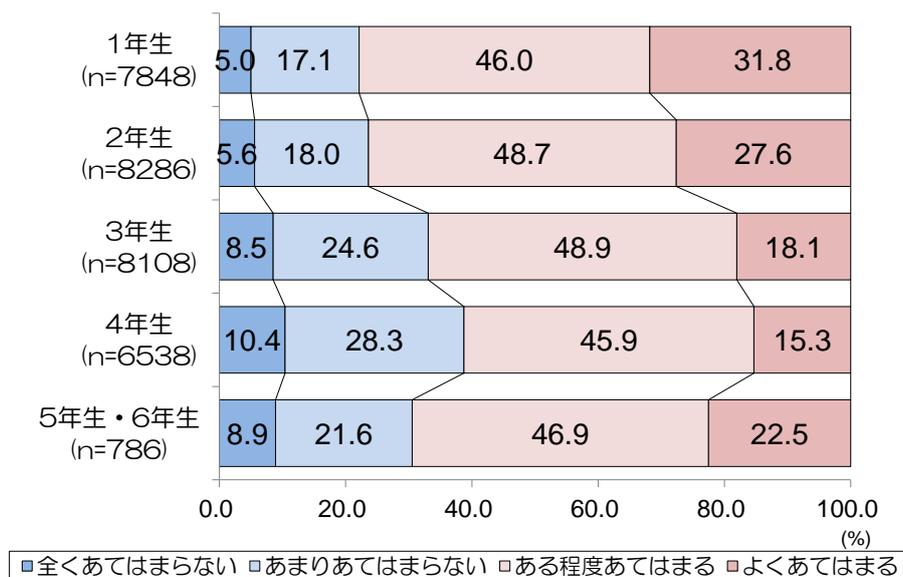


図2-6 授業を通じてやりたいことを見つけたい—学年別

## 2-2 大学の授業への評価と自分の能力認識

### 将来の職業に関する知識・技能が身につけていないという自己評価が約7割強

大学の授業を将来の職業との関連性という観点から評価してもらくと、特定の職業や国家試験という明確な目標を持つ保健・家政で91%と評価が高いが、人社会芸で65%、理工農で77%、その他で68%とやや低めである（図2-7）。それが身につけているかの自己評価は分野を問わず低い傾向にあり、約7割が身につけていないと感じている。他に比べて肯定回答が多かった保健・家政でも「十分」「まあ十分」の合計値は34%である（図2-8）。

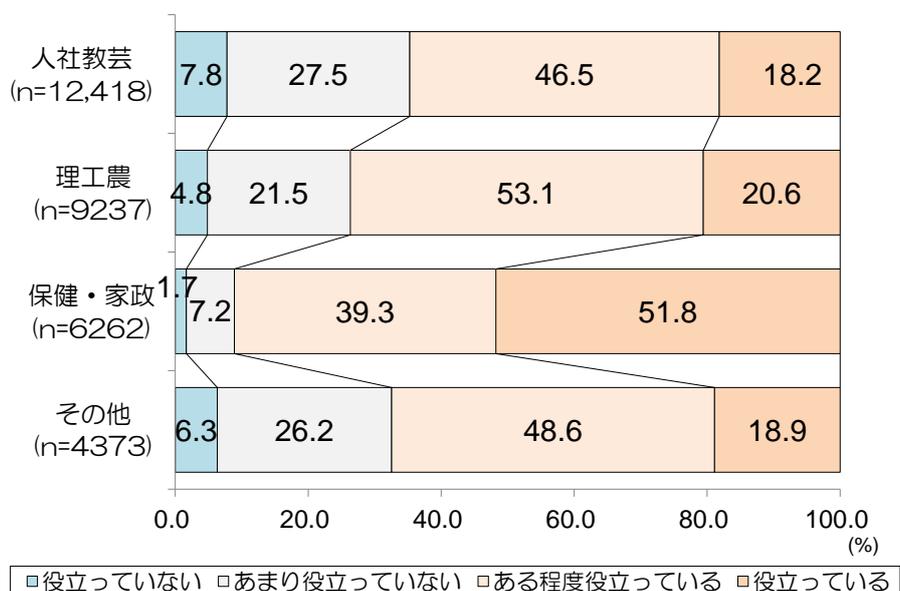


図2-7 将来の職業に関連する知識や技能—授業の評価

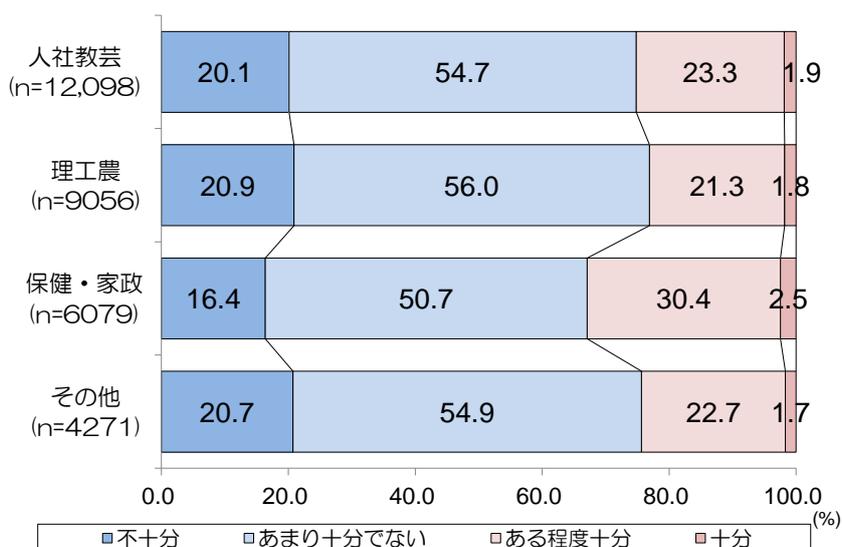


図2-8 将来の職業に関連する知識や技能—自分の実力

### 授業が専門分野の知識・理解に役立っているという認識は保健・家政で高い

授業が専門分野の知識・理解に貢献しているという認識は、保健・家政で高く 9 割を超える。他の分野でも、理工農では 83%、その他では 77%、人社教芸で 74%と低くない（図 2-9）。しかし、自分の実力に関する自己評価は高くなく、「不十分」「あまり十分でない」の合計は、理工農で 74%、保健・家政で 72%、その他で 72%、人社教芸で 66%となっている（図 2-10）。

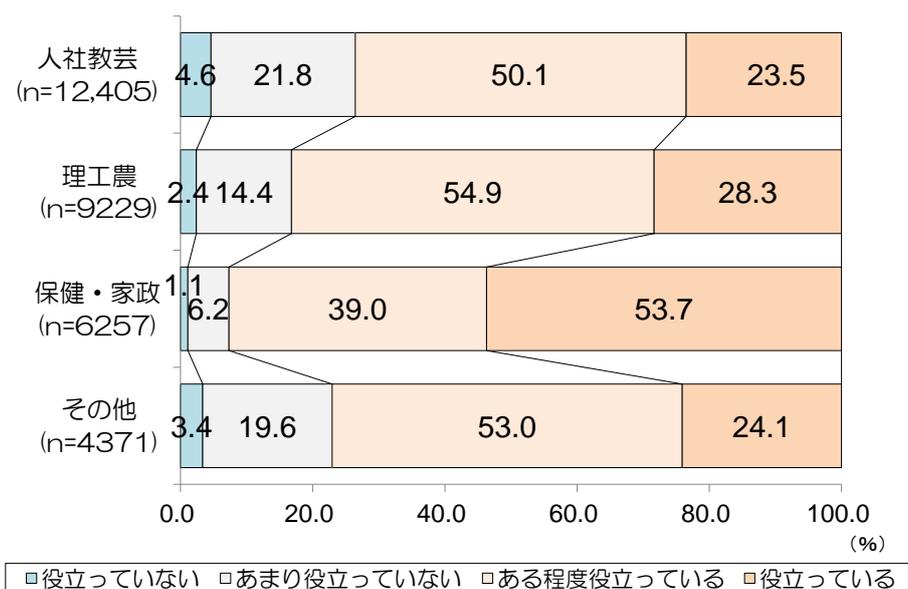


図 2-9 専門分野の知識・理解—授業の評価

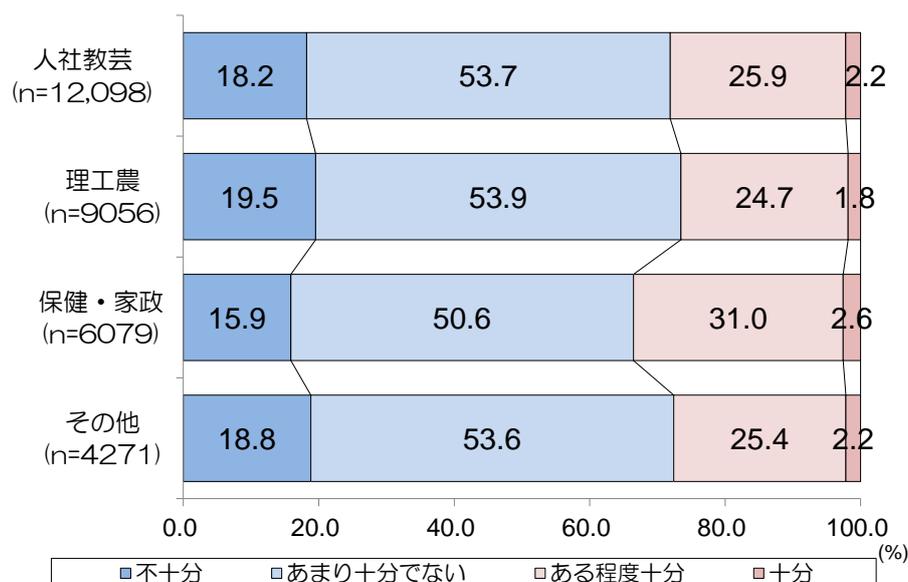


図 2-10 専門分野の知識・理解—自分の実力

## 論理的に文章を書く力を高める評価は、人社会芸でやや高め

論理的に文章を書く力が授業を通じて養われているかという点では、「役立っている」「ある程度役立っている」の合計は5-6割程度。保健・家政で53%、理工農で56%、その他62%であり、人社会芸は64%と他の分野よりは高い(図2-11)。自分の実力に関する自己評価は総じて高くなく、「不十分」「あまり十分でない」の合計は分野を問わず、7割前後となっている(図2-12)。

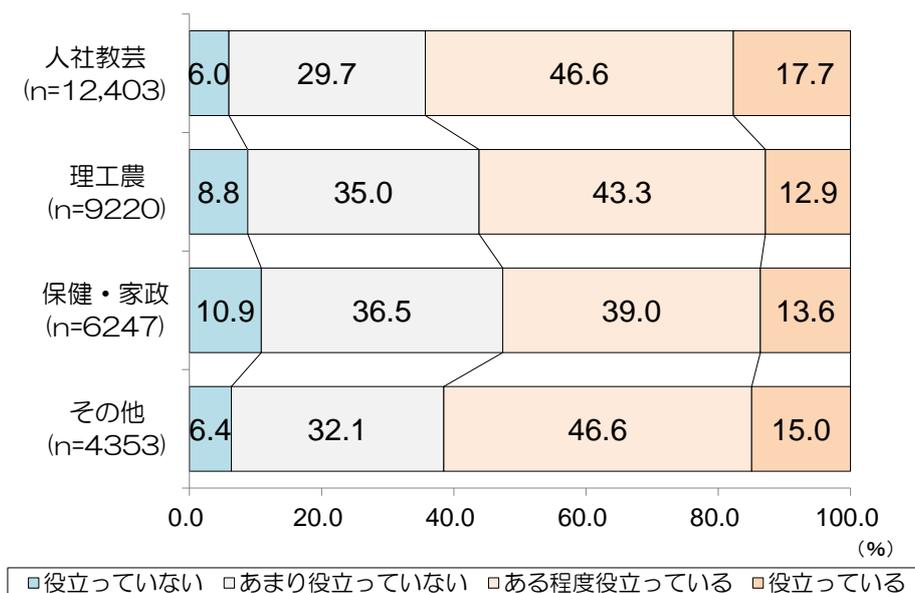


図2-11 論理的に文章を書く力—授業の評価

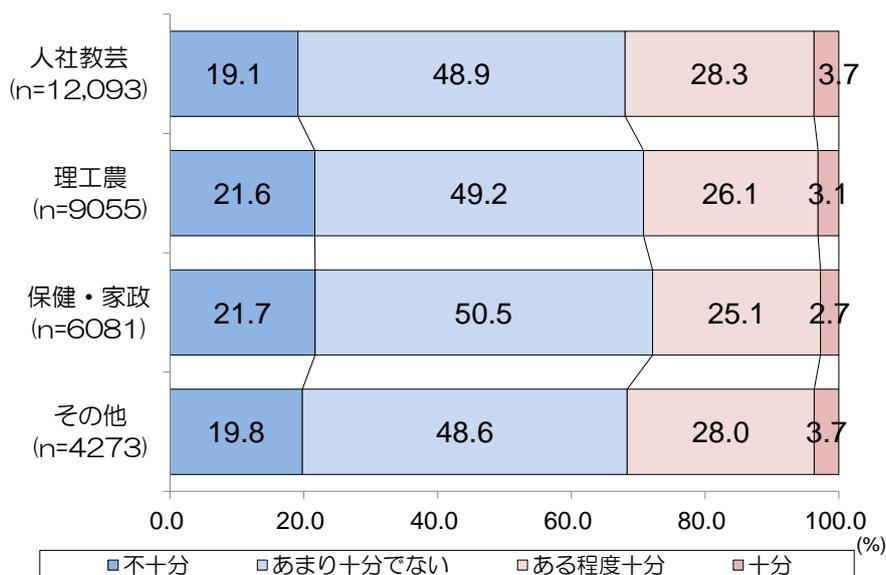


図2-12 論理的に文章を書く力—自分の実力

### 外国語の力の養成に対する授業の評価は、保健・家政、理工農で低め

授業が外国語の力を身につけるのに役立っているとする学生は、人教芸が 51%と最も高く、それ以外では理工農で 41%、保健・家政で 33%、その他で 44%と低い。「役立っていない」という回答に着目しても保健・家政が最も多い（図 2-13）。自分の実力の自己認識は総じて低く、「不十分」「あまり十分でない」と感じている学生が約 8 割にのぼる（図 2-14）。

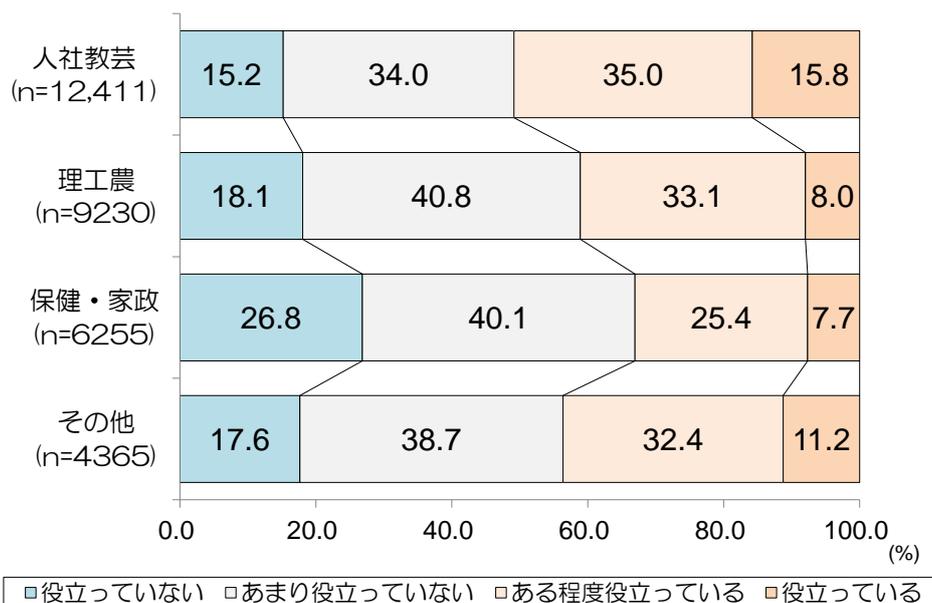


図 2-13 外国語の力—授業の評価

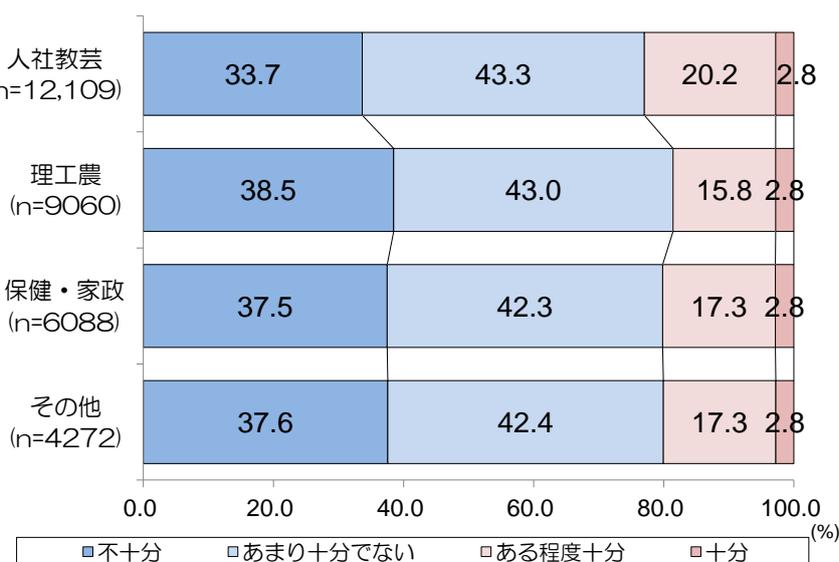


図 2-14 外国語の力—自分の実力

### 分析的・批判的に考える力の評価は、保健・家政で低い

ものごとを分析的・批判的に考える力を養う上で授業が役立っているか、という観点では、人社教芸で「役立っている」「ある程度役立っている」が70%と最も高く、逆に保健・家政で62%と最も低くなっている（図2-15）。自分の実力についての自己認識も同様の傾向で、保健・家政で最も評価が低く、「不十分」「あまり十分でない」の合計は、64%となっている（図2-16）。

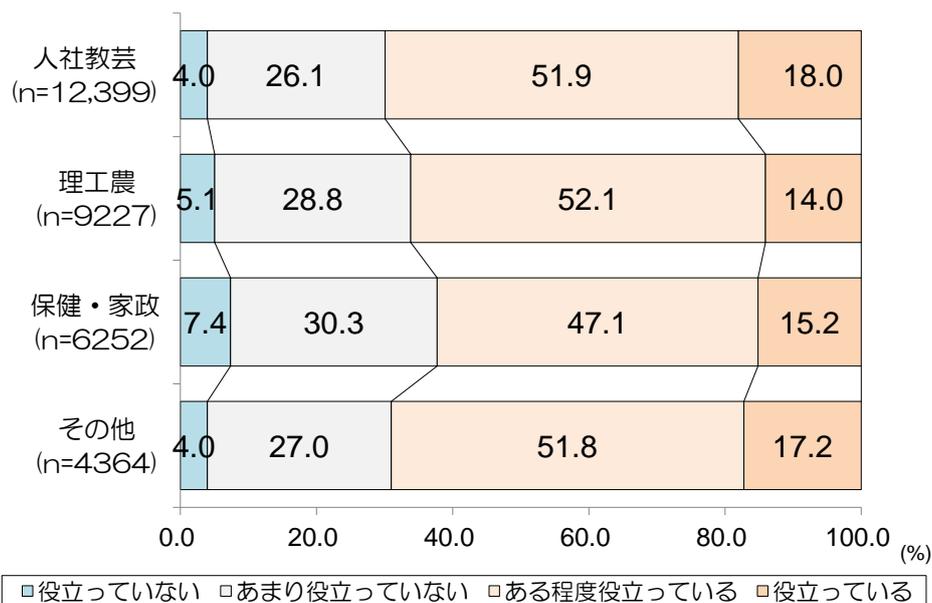


図2-15 ものごとを分析的・批判的に考える力—授業の評価

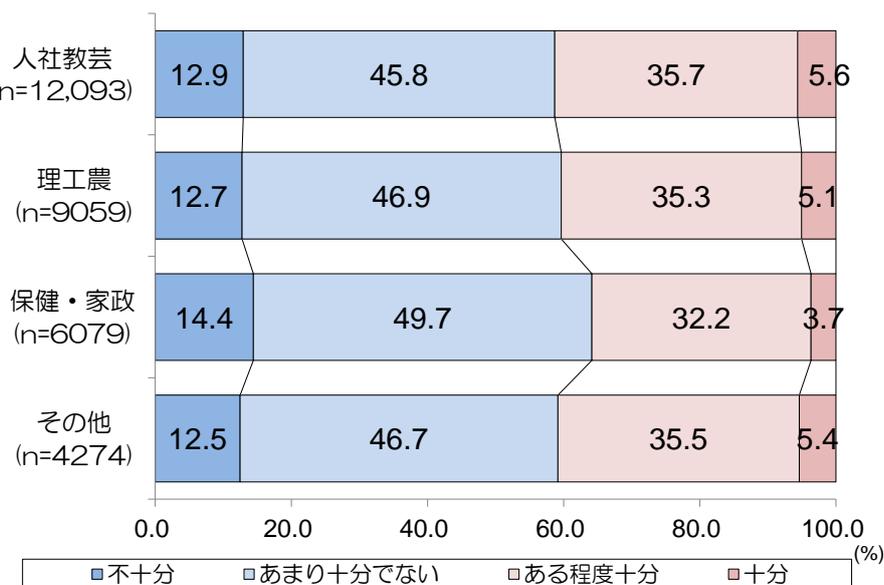


図2-16 ものごとを分析的・批判的に考える力—自分の実力

### 幅広い知識・ものの見方に対する評価は人社教芸、その他で高め

幅広い知識、ものの見方を養う上で授業が役に立っているかを尋ねたところ、「役立っている」「ある程度役に立っている」の合計は、その他で 76%、人社教芸で 75%となっており、理工農や保健・家政よりやや高い（図 2-17）。自分の実力に関する自己認識も同様の傾向で、「不十分」「あまり十分でない」の合計は、保健・家政と理工農でやや低めの開講にある（図 2-18）。

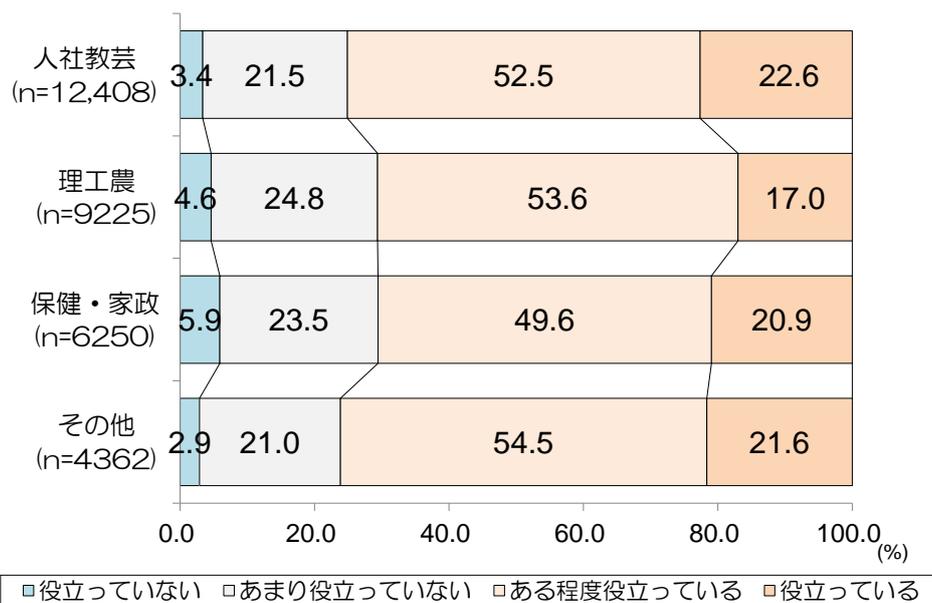


図 2-17 幅広い知識、もののみかた—授業の評価

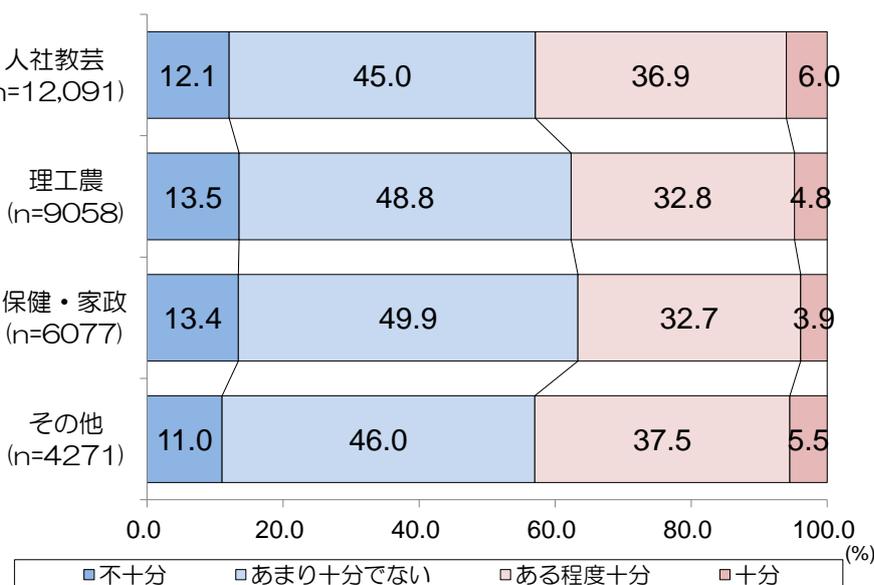


図 2-18 幅広い知識・もののみかた—自分の実力

## 2-3 大学満足度

### 7割以上が、授業全般について満足

在学する大学について、7つの観点で、どのくらい満足しているかを尋ねた。授業全般については、どの分野でも7割以上が満足（「満足」＋「ある程度満足」）していることがわかる。保健・家政系で75.0%、人社会芸でも72.3%が満足と答えている（図2-19）。

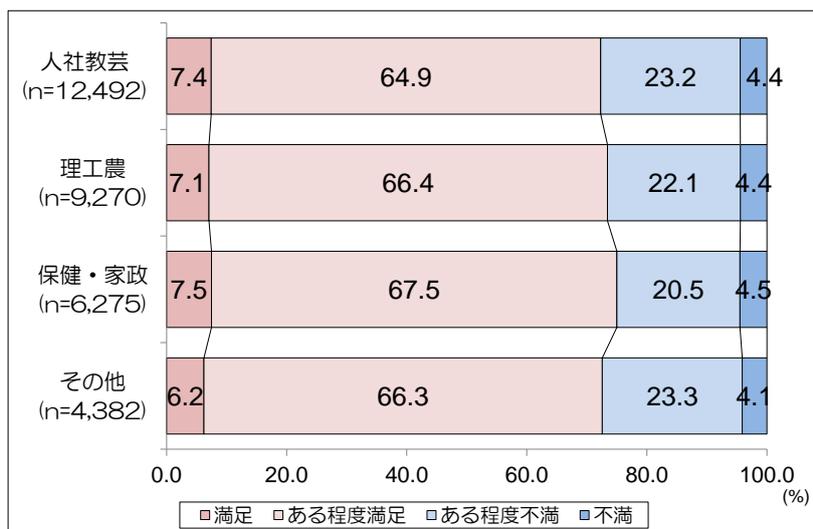


図2-19 授業全般についての満足度

### 保健・家政で、授業外での教員との接触について満足度が高い

授業外での教員との接触には、どの分野でも6割以上が満足（「満足」＋「ある程度満足」）と答えている。前回調査と同様、保健・家政系でもっとも満足度が高く（72.6%）、理工農系でもっとも低い（63.6%）傾向がある（図2-20）。

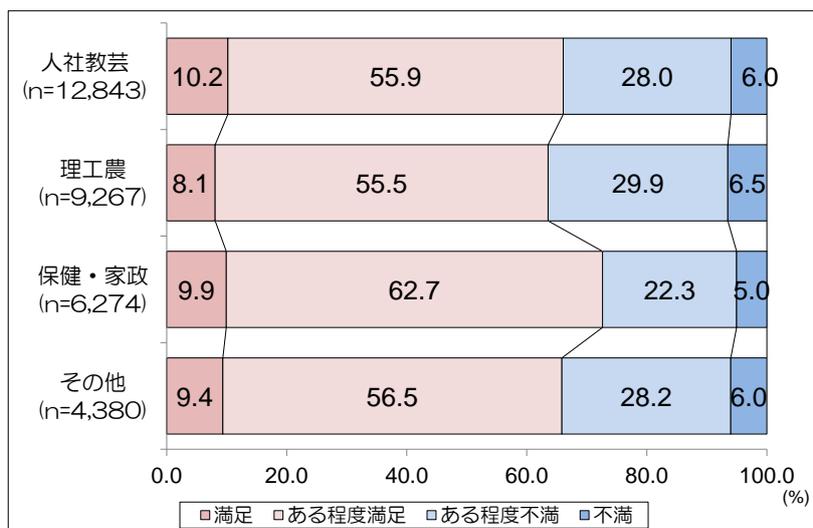


図2-20 授業外での教員との接触についての満足度

### 図書館などの学習施設には、7割以上が満足

図書館などの学習施設については、どの分野でも7割以上が満足（「満足」＋「ある程度満足」）している。人社教芸（83.3%）、理工農（83.4%）で、特に高い。いっぽう、前回と同様に保健・家政系ではやや低く、74.3%にとどまっている（図2-21）。

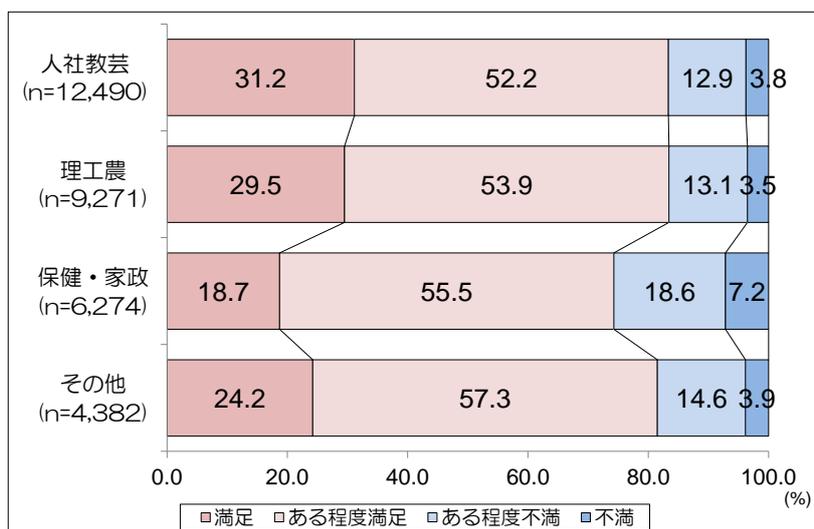


図2-21 図書館などの学習施設についての満足度

### 情報環境、サポートについては、おおむね7割以上が満足

PCなどの情報環境、サポートについては、どの分野もおおむね7割以上が満足（「満足」＋「ある程度満足」）している。人社教芸（77.8%）とその他（78.5%）は約8割に達するが、保健・家政は69.7%とやや低い（図2-22）。

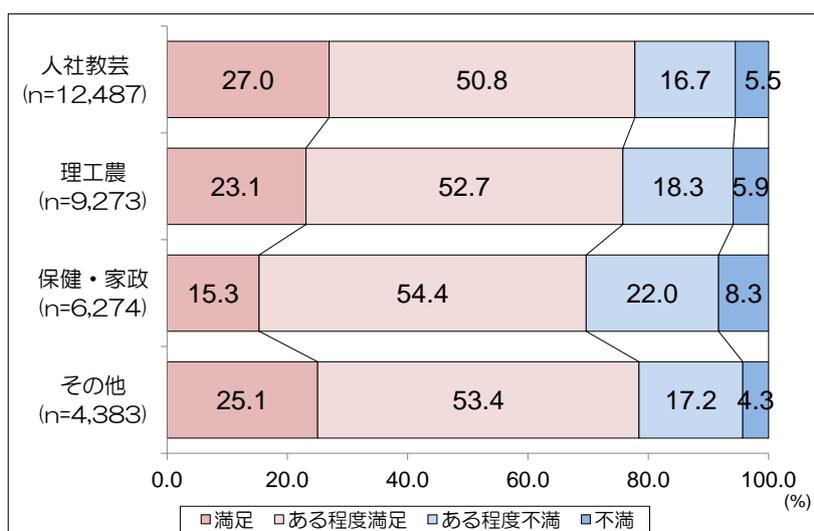


図2-22 PCなどの情報環境、サポートについての満足度

### 6割以上が就職指導に満足

就職指導についての満足度は、他の設問に比べ、全体的に少し低いのが特徴である。それでも、どの分野でも6割以上が満足（「満足」＋「ある程度満足」）している。分野間の違いは前回ほど顕著ではないが、人社教芸が最も高く、65.5%が満足と答えている（図2-23）。

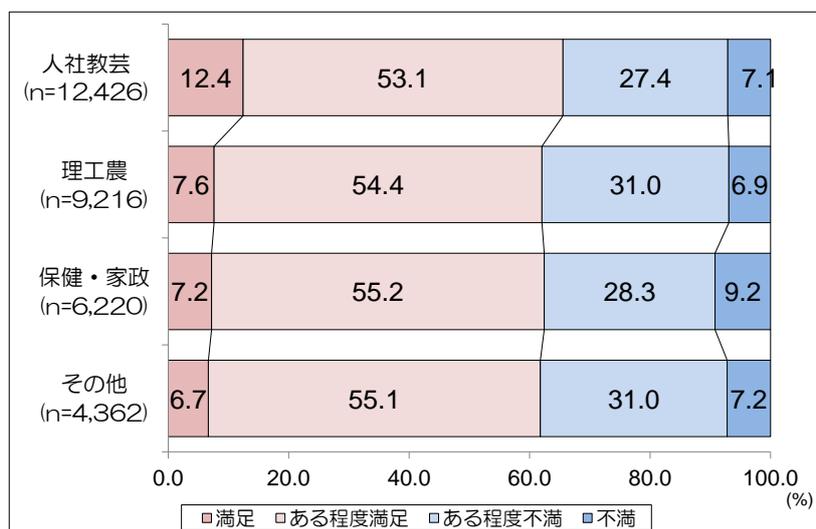


図2-23 就職指導についての満足度

### 学習・その他のサポートにも6割強が満足

学習・その他のサポートについても、どの分野でも6割強が満足している。分野間の差は非常に小さく、理工農で66.7%、その他でも64.4%が満足と答えている（図2-24）。

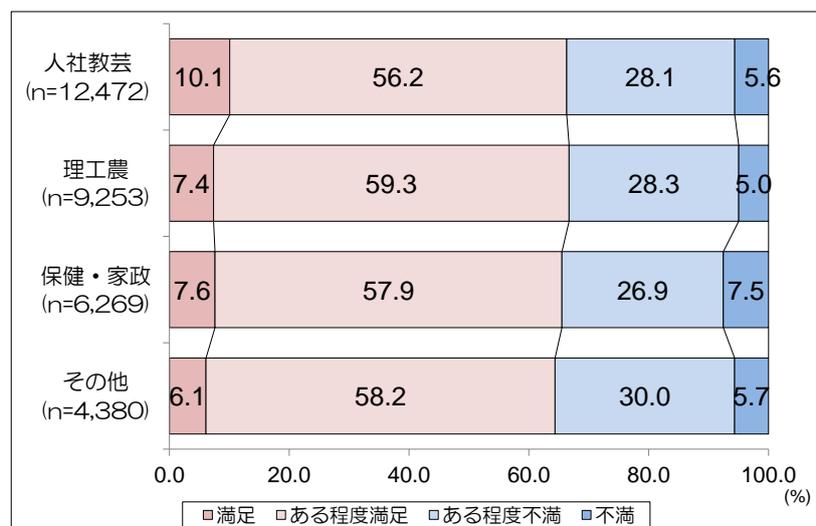


図2-24 学習・その他のサポートについての満足度

## 大学生生活全般には7割強が満足

最後に、大学生生活全般についての満足度を尋ねると、どの分野でも、7割強の学生が満足（「満足」＋「ある程度満足」）と答えている。分野間の違いが大きいことは前回と同様であり、最も高い理工農では77.4%、最も低い保健・家政でも74.4%が満足していることがわかる（図2-25）。

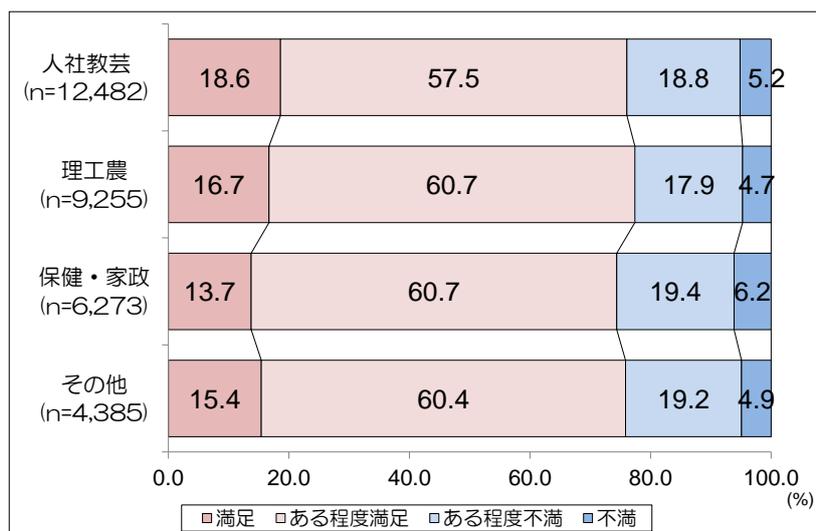


図2-25 大学生生活全般についての満足度

## 2-4 大学に入学するまでの経緯

### 一般入試受験経験者は約2/3

大学に入学するまでに経緯について、まず、大学個別の一般入試（学力試験）を受験した経験があるかどうかを尋ねた。全体では67.4%が一般入試（学力試験）を受験していた。分野別にみると、一般入試（学力試験）を受験した割合が最も高いのは理工農であり、79.2%であった。続いて、保健・家政68.6%、その他64.1%であり、最も低いのが人社会芸で、58.8%であった（図2-26）。

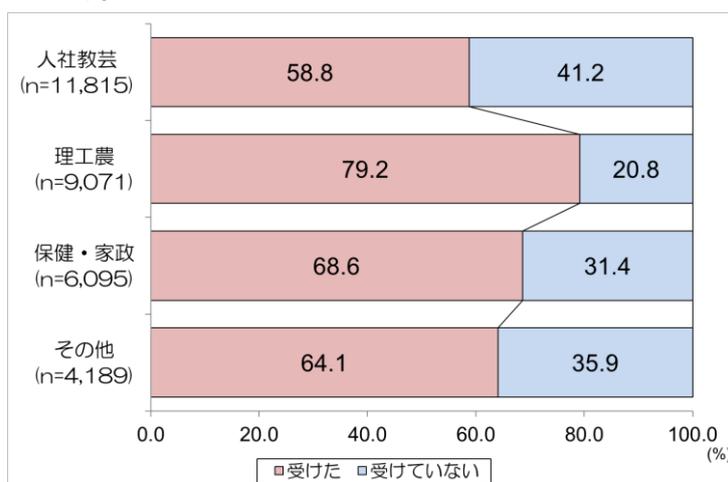


図2-26 大学個別の一般入試（学力試験）を受験した経験

### センター試験受験者は約3/4

センター試験の受験経験者は全体では75.3%であった。分野別に格差が見られ、最も高い理工農では87.3%とほとんどがセンター試験を受験している。逆に、最も低いのは人社会芸であり、65.8%と2/3に満たない。保健・家政とその他は全体の割合とほぼ同じであり、保健・家政76.7%、その他73.5%であった（図2-27）。

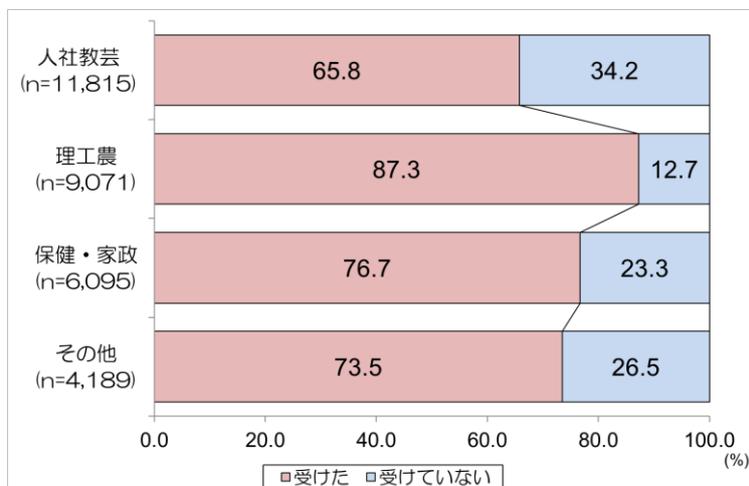


図2-27 センター試験を受験した経験

### 約4割の学生が推薦入試・AO入試を経験

近年、大学入試における比重を高めている推薦入試・AO入試について尋ねた。推薦入試・AO入試を経験した学生は全体では39.0%であった。この設問についても分野別で違いがみられ、最も高い人社教芸では半数近い45.8%にのぼる。逆に最も低いのは理工農であり、約1/4に当たる26.0%であった。保健・家政とその他は全体の割合とほぼ同じであり、保健・家政42.1%、その他42.3%であった(図2-28)。

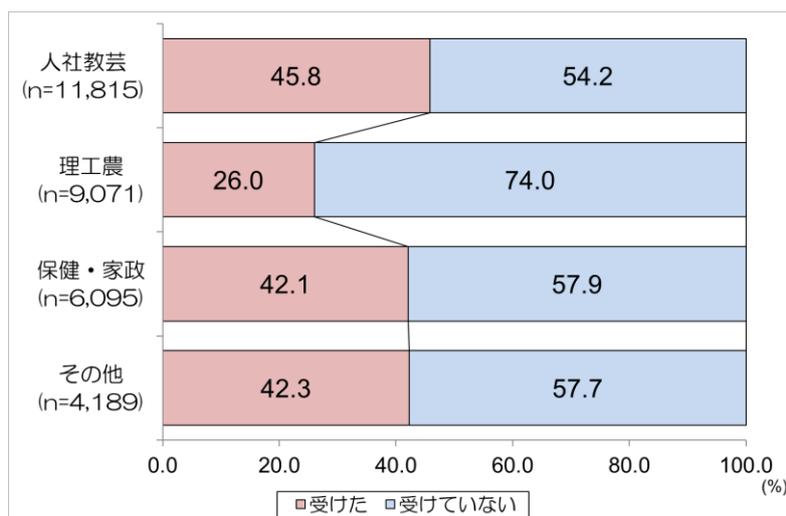


図2-28 推薦入試・AO入試を受験した経験

### 編入学経験者はきわめて限られている

編入学の経験について尋ねた。編入学を経験したと回答した学生は分野を問わず、きわめて少数であり、全体で2.3%にとどまった。日本では、編入学によって大学・学部を移動するという現象がきわめて例外的である事実が改めて浮き彫りとなった(図2-29)。

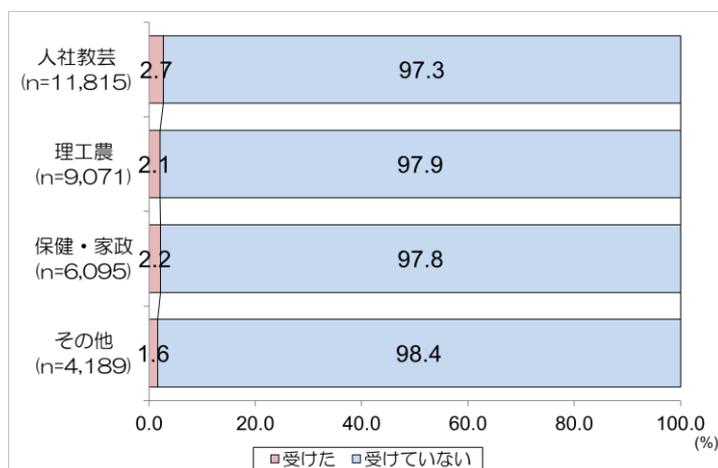


図2-29 編入学の経験

### 第一志望入学者は6割程度

在籍大学・学部への入学時における志望順位を訪ねたところ、全体で58.2%の学生が第一志望大学・学部に入學していた。第一志望の割合が高いのは人社教芸であり、65.3%であった。次いで、その他の56.7%であり、保健・家政はそれよりやや下がって54.3%、第一志望に入學した学生の割合が最も低いのは理工農の52.0%であった（図2-30）。

逆に、第2志望までに入らなかった大学・学部に入學した学生の割合が最も高いのは理工農の25.8%であった。最も低いのは人社教芸の18.3%であった。

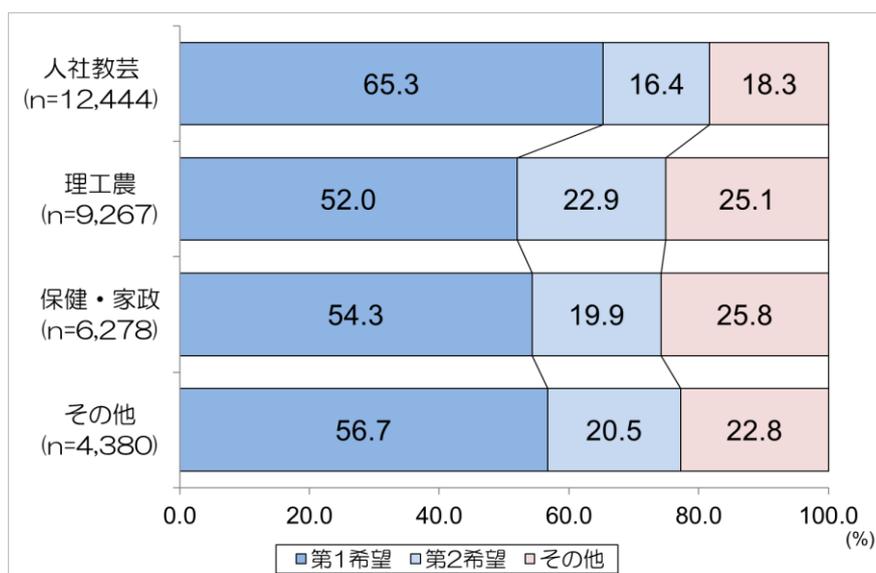


図2-30 大学・学部の志望順位

### 高校3年時には半数以上が3時間以上学習

高校3年生時の家や塾での1日の勉強時間について尋ねた。全体としてみると、半数以上の56.3%の学生が一日3時間以上を家庭や塾での学習に充てていることが分かった。2時間程度が19.2%、1時間程度は13.4%、学習していなかったと回答したのは11.1%であった。分野別にみると、3時間以上の割合が最も高いのは保健・家政であり、62.8%であった。理工農でも、保健・家政とほぼ同じ62.6%が3時間以上学習していた。逆に、学習時間が比較的短いのは、その他と人社教芸であり、3時間以上学習していた学生は、その他53.6%、人社教芸49.3%であった。これら分野では、学習をしなかったと答えた学生の比率が総体的に高く、その他では12.4%、人社教芸では15.3%が学習しなかったと回答した(図2-31)。

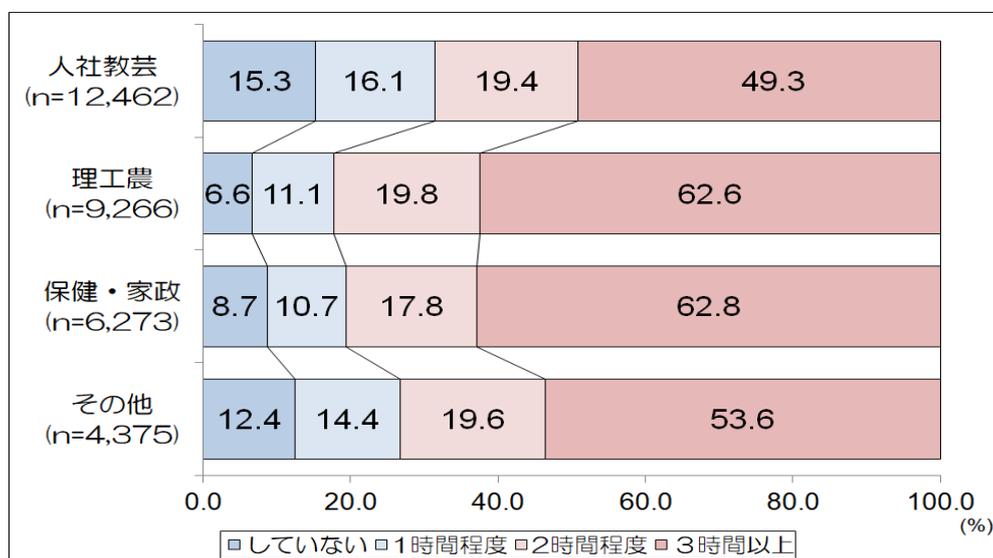


図2-31 高校3年生時の家や塾での1日の勉強時間

## 第 3 章

### 日常生活

### 3-1 学期中の過ごし方

#### 保健・家政系で長い授業・実験への出席時間

学期中の1週間の過ごし方に関する質問のうち、学習面について扱ったのが図3-1から図3-4である。授業・実験への出席状況は専門領域間で大きく異なり、21時間を超えて授業・実験に出席している学生は、入社数芸系で19.1%、理工農系で29.6%、保健・家政系で49.0%、その他で25.1%であった。前回調査とは学習時間を尋ねたカテゴリーが一部変更となっている点、またこの数値は全学年を扱ったもので、卒論執筆時の学年では授業・実験への出席時間が他学年とは異なる点等が影響している可能性に留意する必要があるが、保健・家政系で授業・実験への出席時間は長くなっている。なお、21時間を超えて授業・実験に出席している比率は、前回調査と比べて減少しており、CAP制の導入の進行やその実質化の可能性も示唆される。(図3-1)

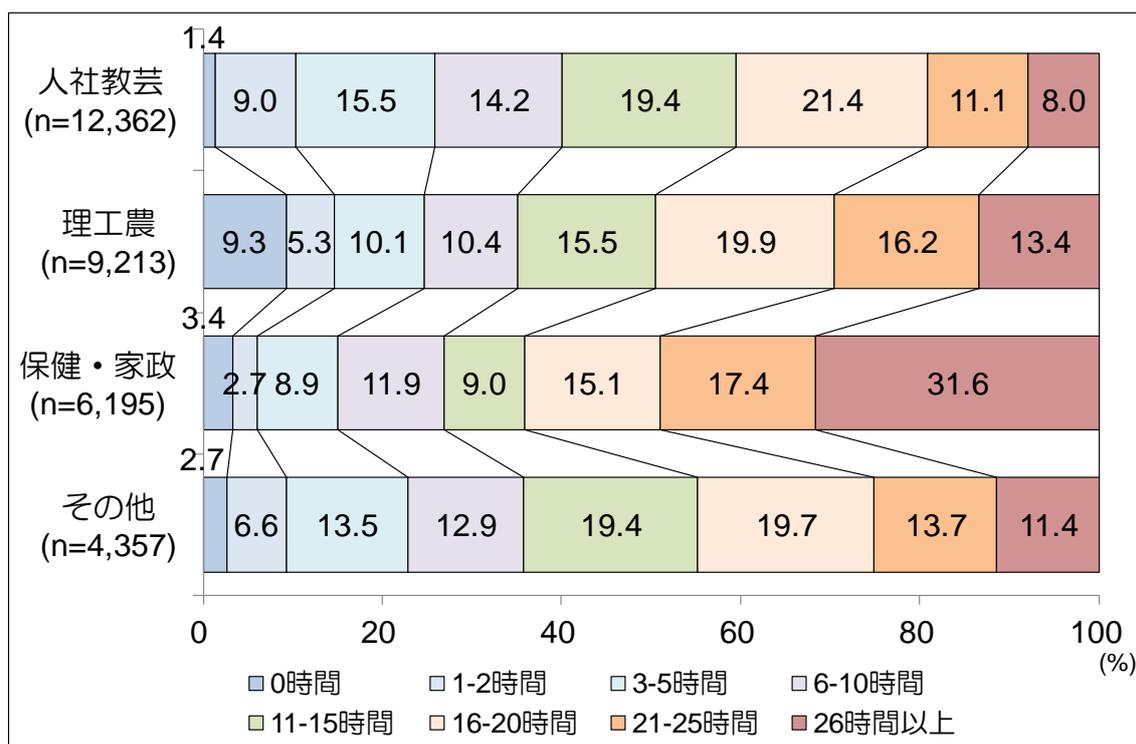


図3-1 授業・実験への出席

### 授業・実験の課題、準備・復習に費やす時間は過半数が1-5時間程度

学期中に、授業・実験の課題、準備・復習に費やす時間を尋ねたところ、いわゆる授業関連の授業外学習時間は、人教芸系、保健・家政系とその他では「1-2時間」と回答した学生が最多を占め、理工農系では「3-5時間」と回答した学生が最多であった。理工農系と保健・家政系では6時間以上を費やす学生の割合が他の専門領域と比べて多いものの、専門領域を問わず過半数の学生が1週間に1-5時間程度しか授業外の学習時間を行っていない。またこの傾向は前回調査からも大きく変わっていない。(図3-2)

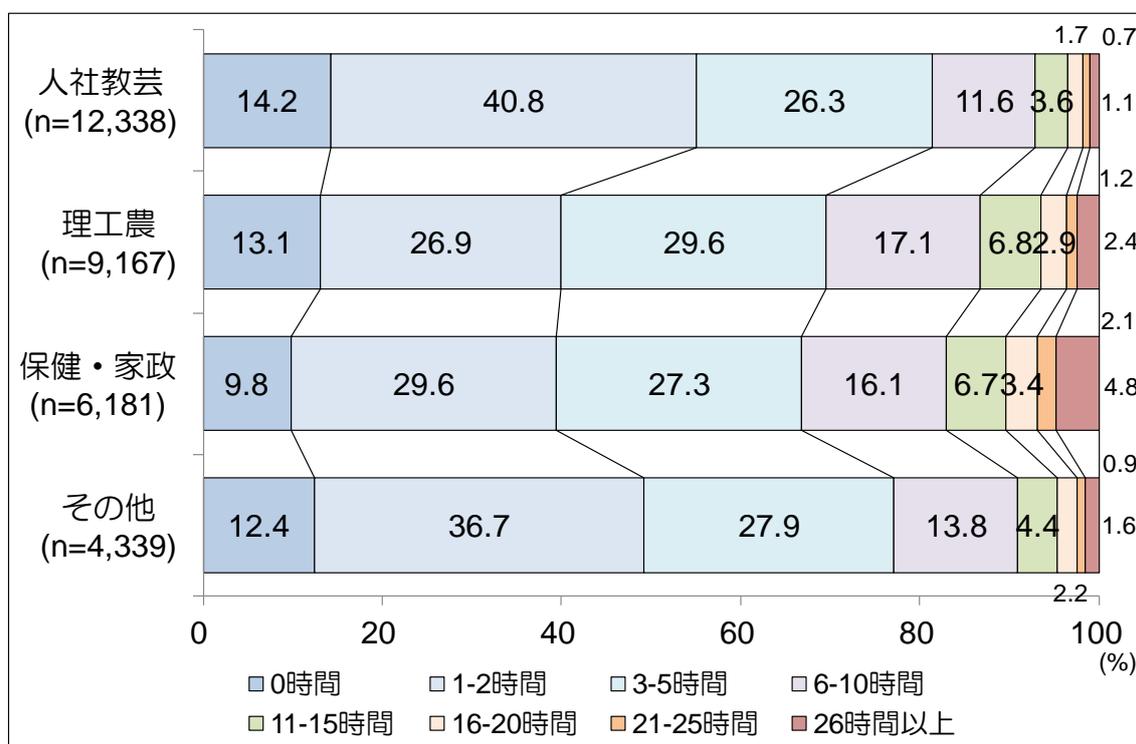


図3-2 授業・実験の課題、準備・復習

### 卒業研究・実験・卒論に費やす時間は理工農系で長い傾向

学期中に、卒業研究・実験・卒論に費やす時間（該当者のみ）を尋ねたところ、「0時間」という回答が全体では最も多く、保健系・家政系や人社教芸系でその割合が高くなっているが、理工農系では「26時間以上」と回答した学生も18.3%と多くなっている。（図3-3）

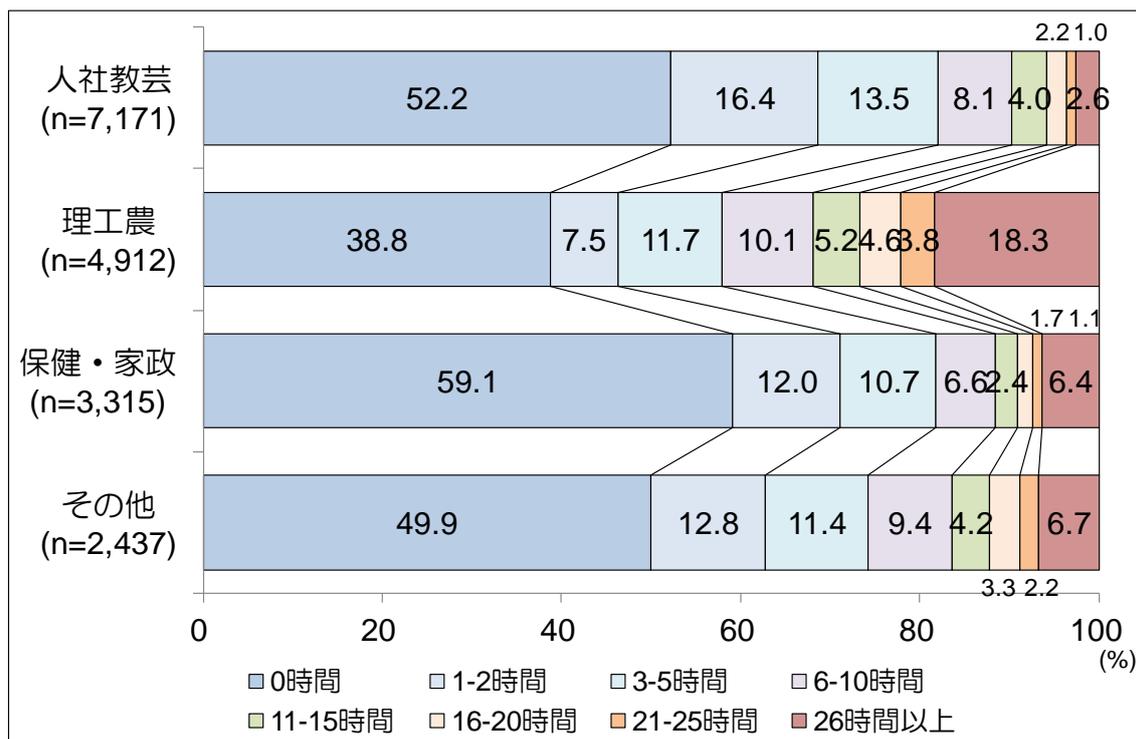


図3-3 卒業研究・実験・卒論（該当者のみ）

### 7割前後の学生は授業とは関係のない学習・読書に2時間以下しか費やしていない

学期中に、授業とは関係のない学習・読書に費やす時間を尋ねたところ、「0時間」および「1-2時間」という回答が多く、専門領域を問わず7割前後に達しており、その傾向は保健・家政系でより顕著である。これまで学習面についての1週間の生活時間をみてきたが、総じていえば、授業出席時間は長いものの、授業外の授業関連学習時間は短く、授業とは関係のないある意味でより自律的・主体的な学習時間も短くなっており、授業内しかも教室内中心の学習行動となっていることがわかる。(図3-4)

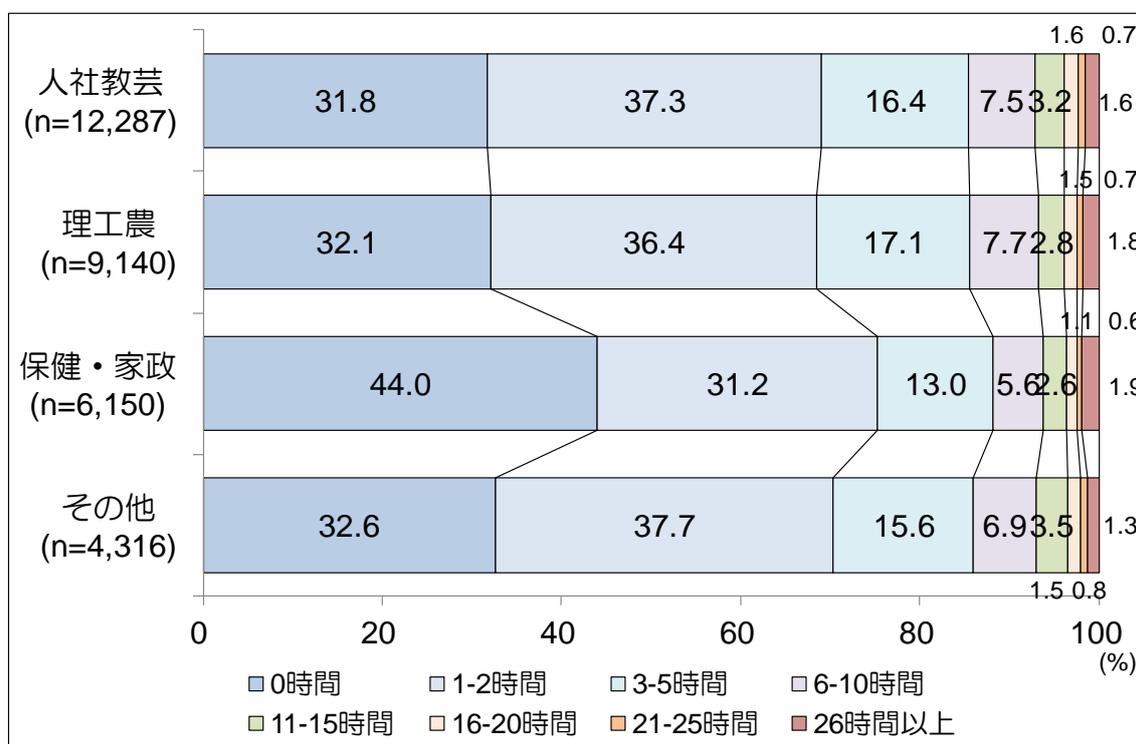


図3-4 授業とは関係のない学習・読書

### ほぼ半数の学生はサークル・クラブ活動に費やす時間が0時間

学期中の1週間の過ごし方に関する質問のうち、学習面以外について扱ったのが図3-5と図3-6である。学期中に、サークル・クラブ活動に費やす時間を尋ねたところ、専門領域を問わず「0時間」と回答したものが最も多く、過半数近くに及んでいる。「1-2時間」「3-5時間」までを含むと、4人3人の学生は1週間に5時間以下しかサークル・クラブ活動に費やしておらず、課外活動は活発とはいえない。(図3-5)

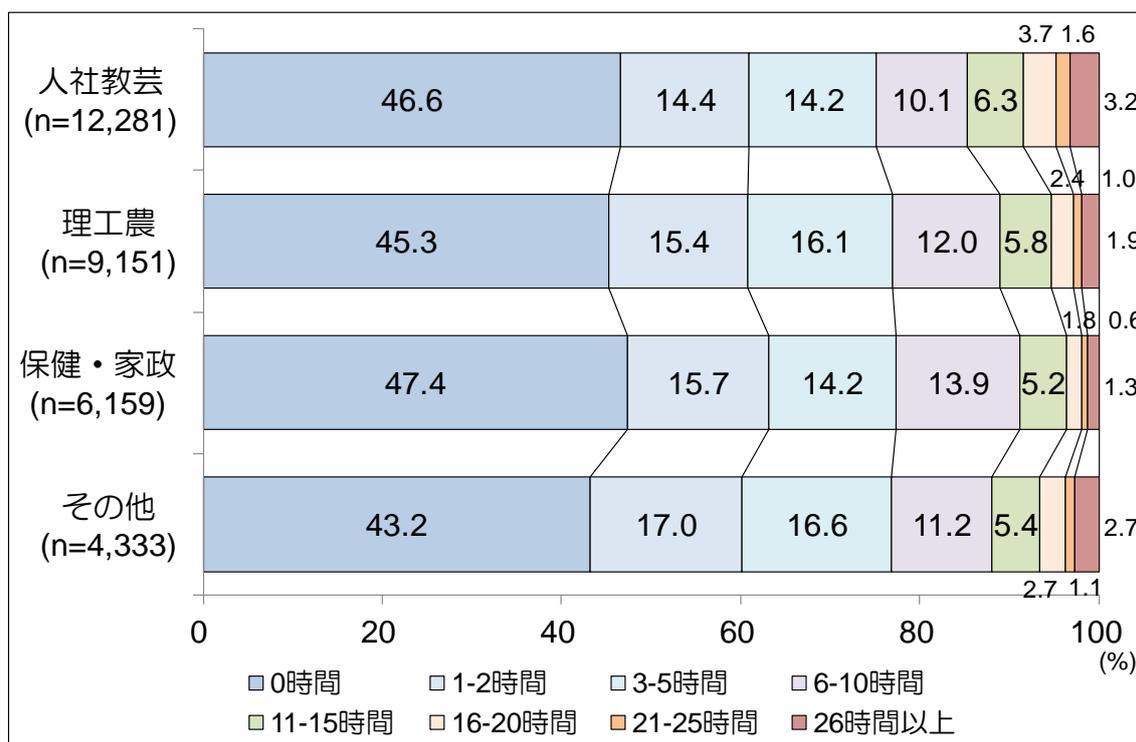


図3-5 サークル・クラブ活動

## 2割の学生がアルバイト・仕事をしない一方、1割の学生は21時間以上行っている

学期中に、アルバイト・仕事に費やす時間を尋ねたところ、保健・家政系では29.2%、理工農系でも24.8%が「0時間」と答え、4人に1人前後はアルバイト・仕事をっていない。ただしこの割合は、他の専門領域を含めて、前回調査よりはかなり低くなっており、アルバイト・仕事に費やす時間は増加している。人社教芸系では50.0%が1週間に11時間以上アルバイト・仕事に費やしており、保健・家政系（32.7%）や理工農系（37.5%）でも、ほぼ3人に1人は1週間に11時間以上アルバイト・仕事を行っている。（図3-6）

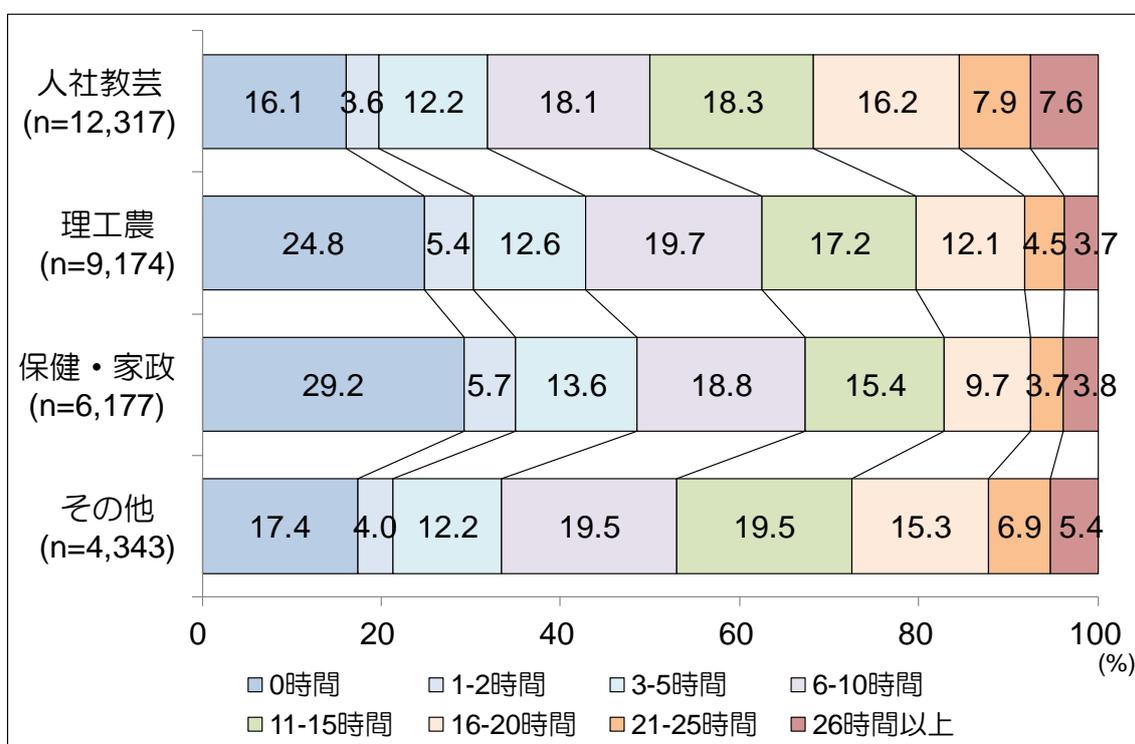


図3-6 アルバイト・仕事

### 3-2 読書

#### マンガを除く1か月の読書量—本を読まない割合が約5割

マンガを除き、一か月の間に何冊の本（電子書籍を含む）を読むか尋ねたところ、47.9%の学生が「読まない」と答えて、最も多かった。次に多いのは、「1冊読む」との回答で25.6%である（図3-7）。専門領域別にみると、保健・家政で読書の習慣が低く、「読まない」との回答が57.8%であり、保健・家政を専門とする学生の半数を超えていた（図3-8）。

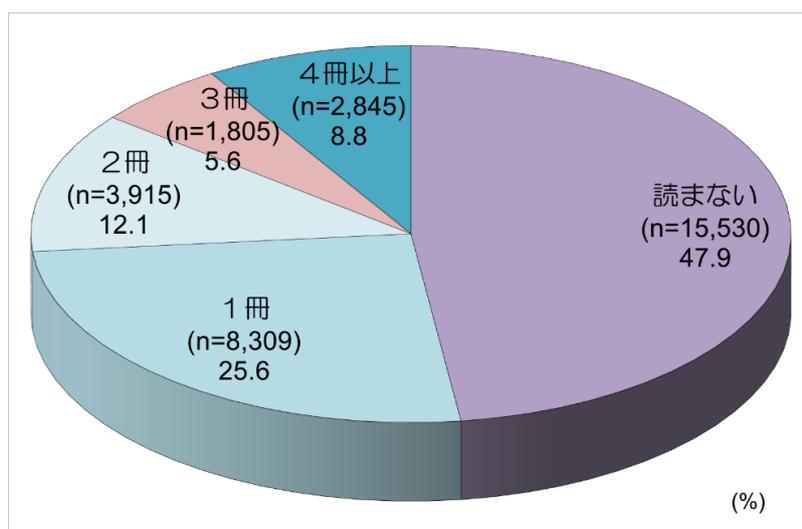


図3-7 マンガを除く1か月の読書量

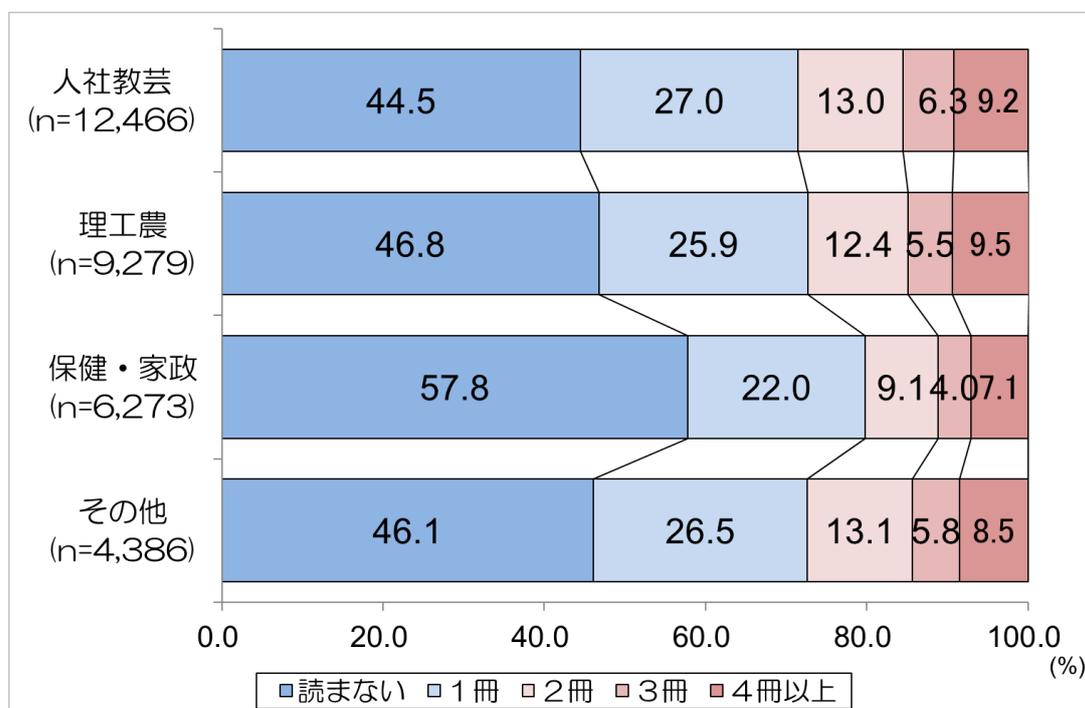


図3-8 マンガを除く1か月の読書量—専門領域別

### 3-3 居住形態

#### 賃貸が5割近く、寮は少数派で1割未満

居住形態を尋ねたところ、賃貸アパート・マンションが48.2%で最も多く、自宅が45.2%でこれに続き、この両者を合わせると93.4%である。寮で生活している学生は少数派であり、5.7%にすぎない(図3-9)。

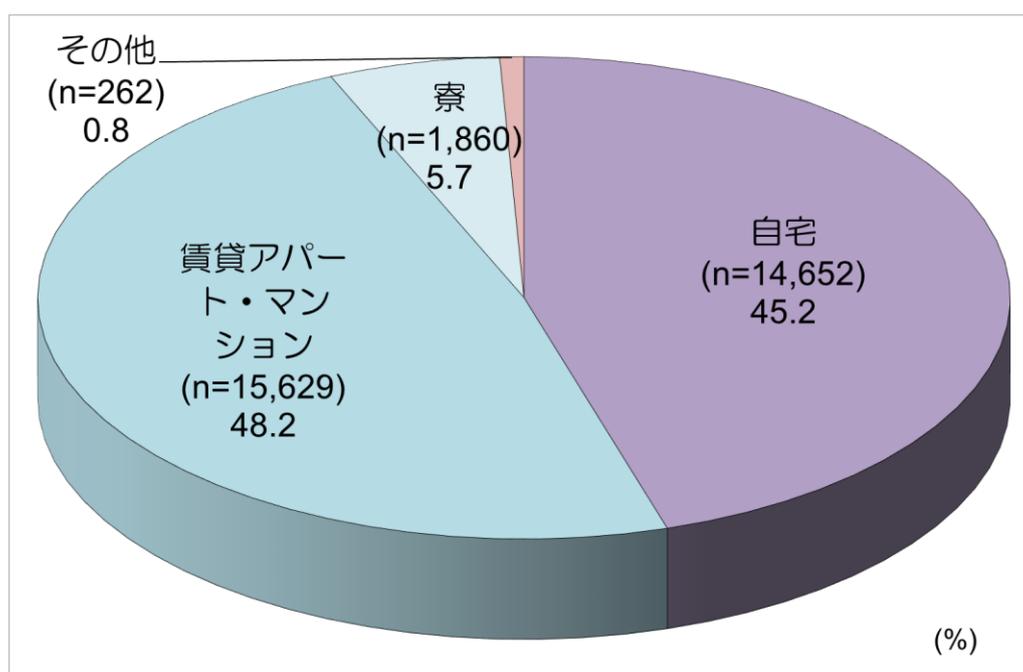


図3-9 居住形態

### 3-4 授業料を除いた1か月の生活費の出所

#### 授業料を除いた生活費の出所—両親からの支援額は3万円以下の割合が半数以上

授業料を除いた生活費収入を両親にどれほど頼っているかを尋ねたところ、専門領域に限らず、3万円以下（「0万円」と「1万円から3万円」の合計）の割合が最多であり、各専門領域の学生の半数以上を占めた。人社教芸とその他では、「0万円」の割合（それぞれ36.2%と34.2%）が最多であり、「1万円から3万円」との回答（それぞれ31.0%と33.2%）が2番目に多く、「4万円から6万円」との回答（それぞれ19.4%と20.2%）が3番目に多い。一方、理工農・保健家政では、「1万円から3万円」（それぞれ31.3%と28.8%）が最多であり、「0万円」との回答（それぞれ25.6%と24.5%）が2番目に多く、「4万円から6万円」との回答（それぞれ24.7%と22.8%）が3番目に多い（図3-10）。

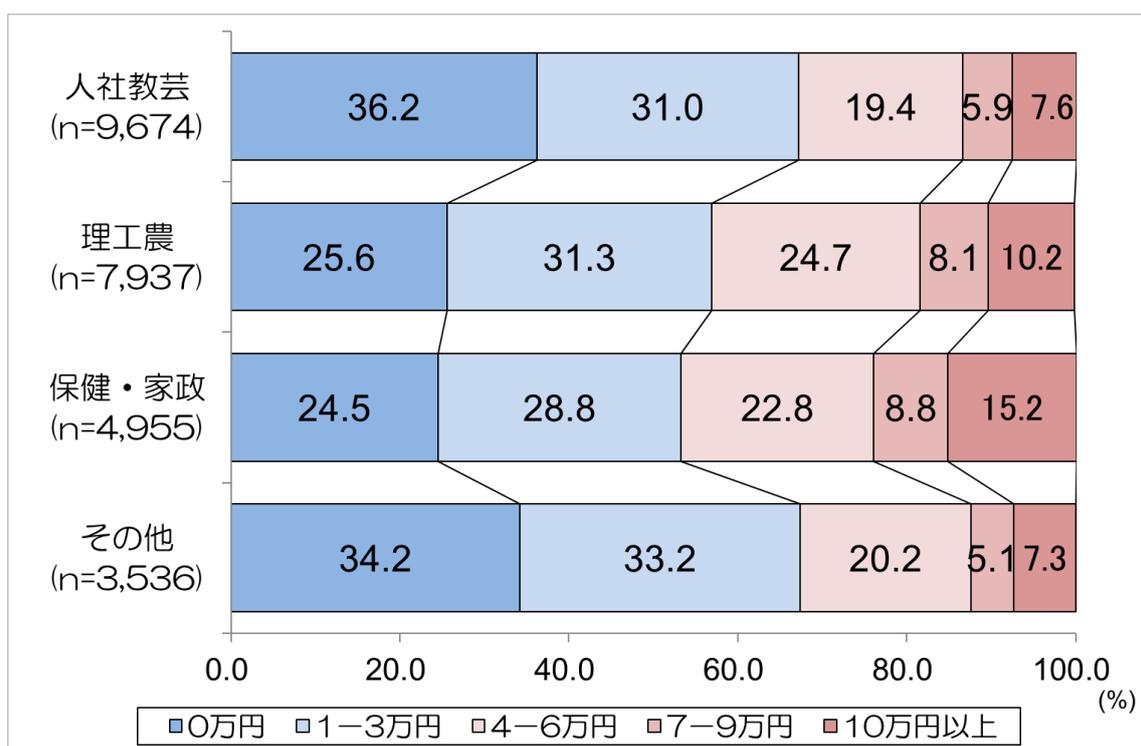


図3-10 授業料を除く生活費の出所—両親

### 授業料を除いた生活費の出所—奨学金からは「0万円」が最多の6割以上

授業料を除く生活費の出所のうち、奨学金からの出費額を尋ねたところ、どの専門領域でも「0万円」と回答した学生が最も多く、人教芸で61.5%、理工農で61.3%、保健・家政で62.0%、その他で63.7%となった。また、どの専門領域でも共通して次に多いのは「4万円から6万円」と答えた学生の割合であり、約2割程度である（図3-11）。

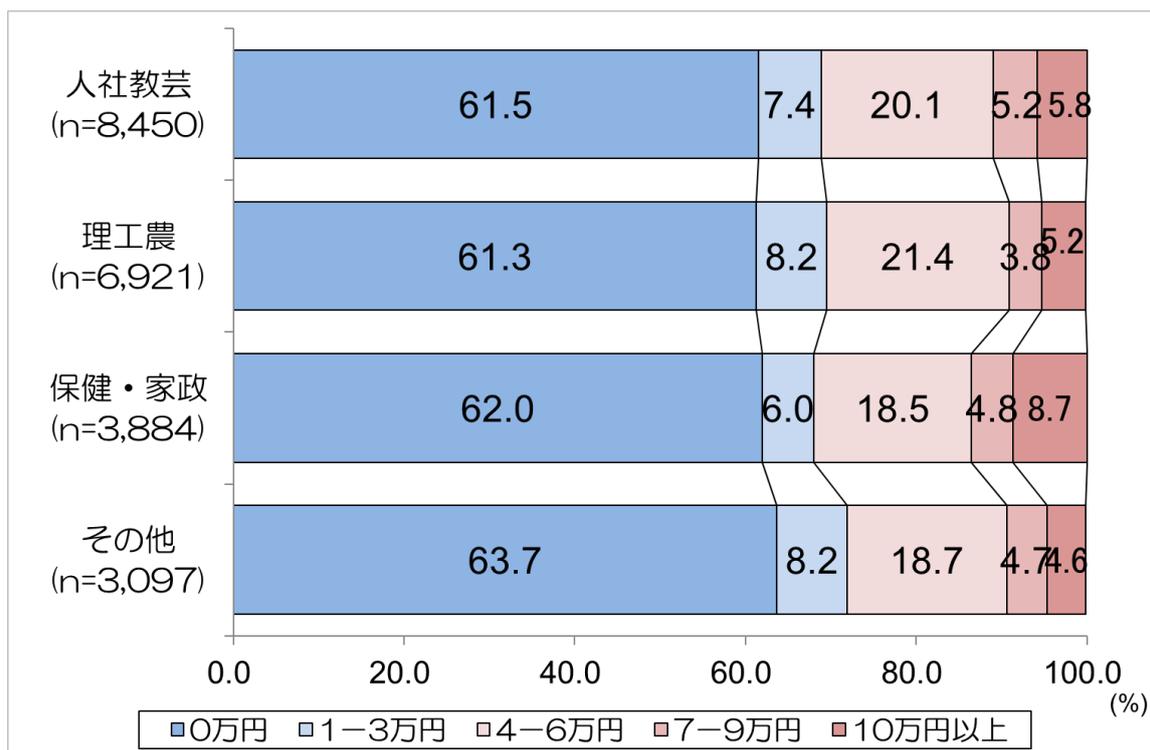


図3-11 授業料を除く生活費の出所—奨学金

### 授業料を除いた生活費の出所—アルバイト・給与からは人社会芸が多い

授業料を除く生活費に対して、アルバイト・給与からの出費額を尋ねたところ、「0万円」の回答が最も多かったのは保健・家政の21.2%であるのに対し、回答が最も少なかったのは人社会芸の12.2%であった。一方、アルバイト・給与から「10万円以上」出費しているとの回答が最も多かったのは人社会芸の12.7%であるのに対し、回答が最も少なかったのは理工農の4.5%であった（図3-12）。

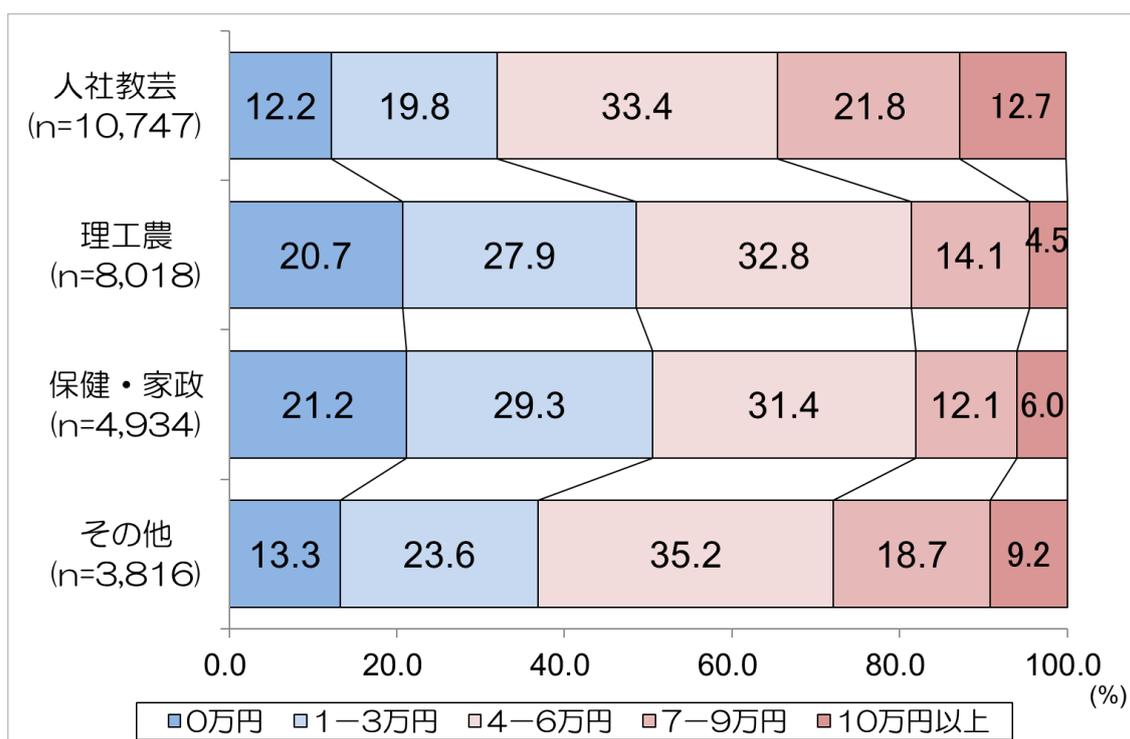


図3-12 授業料を除く生活費の出所—アルバイト・給与

### 授業料を除いた生活費の出所—両親、奨学金、アルバイト・給与以外の出所は少ない

授業料を除く生活費について、両親、奨学金、アルバイト・給与以外の出所を尋ねたところ、「0万円」との回答が最多であり、専門領域を問わず9割前後を占める（図3-13）。

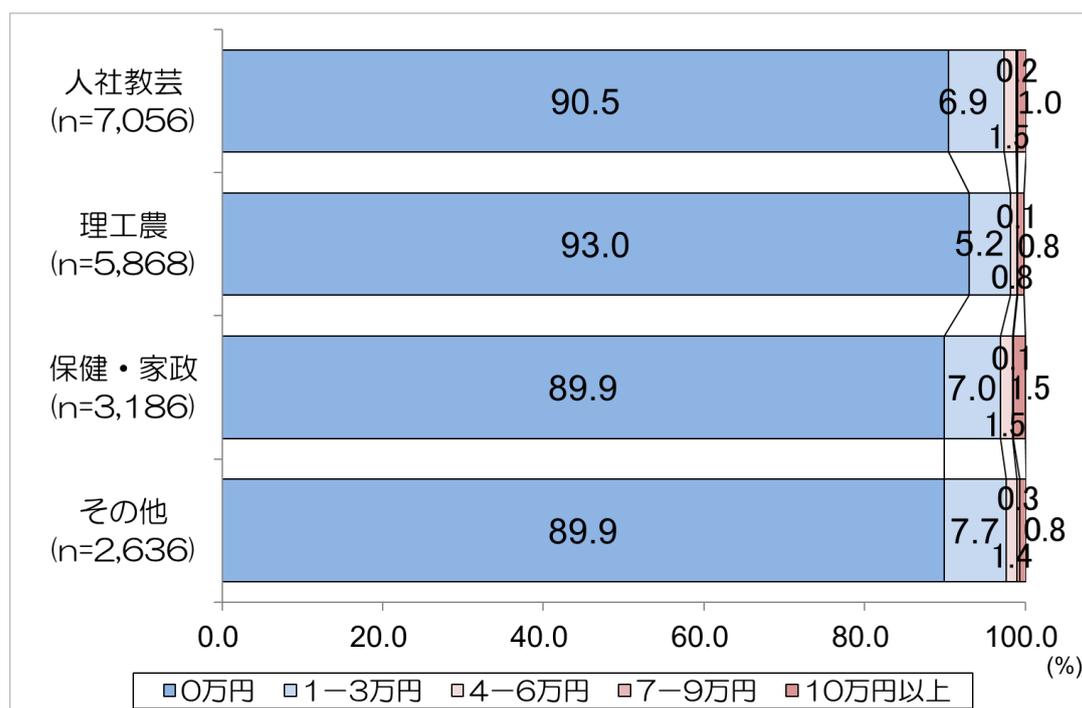


図3-13 授業料を除く生活費の出所—その他

### 3-5 日常の意識

#### 熱意がわからないという思いを過半数が経験

日常の意識について、6つの観点で尋ねた。「生活に熱意がわからない」では、どの分野でも「ときどきある」が最頻値で4割程度を占める。これに「よくある」の1割強を加えると、どの分野でも過半数を超え、理工農（56.8%）が最も高い（図3-14）。

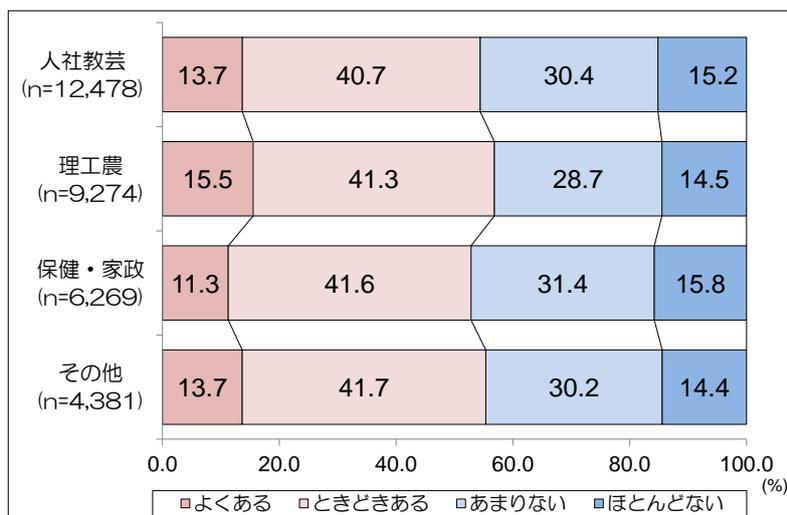


図3-14 生活に熱意がわからない

#### 理工農で、授業についていけないという学生が多い

授業からの遅れを感じる事が「ほとんどない」という回答はどの分野でも1割強以下であり、多くの学生が多少とも遅れを感じている。特徴的なのは理工農で、「よくある」が14.3%、「ときどきある」が46.0%でいずれも他分野より高い割合である（図3-15）。

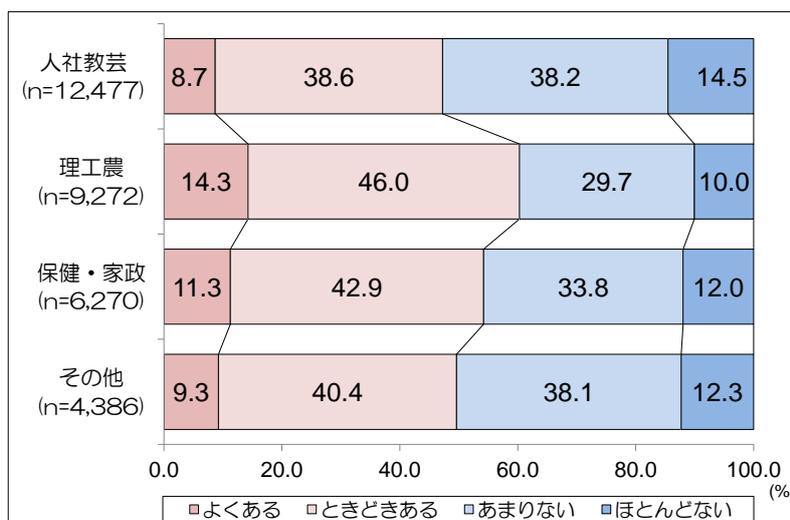


図3-15 授業の内容についていけない

### 転学科等をよく考える学生は1割強

学科・学部・大学のうちどれを念頭に回答しているかが明らかでないが、現在の所属を変更することについて「よくある」という学生はどの分野でも1割強である。「ときどきある」を加えると理工農の38.6%が最も高い（図3-16）。

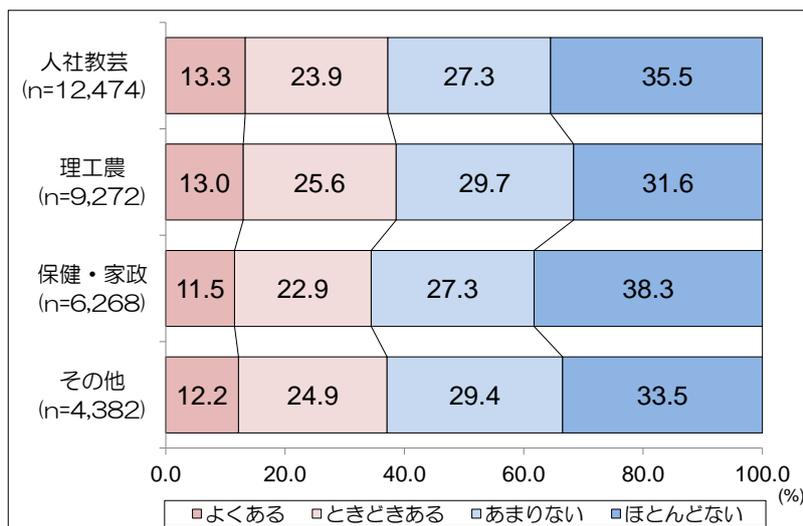


図3-16 他の学科・学部・大学や学校に入り直したい

### 経済的な心配が「よくある」「ときどきある」で1割強

どの分野でも、過半数が経済的困難を感じる事が「ほとんどない」と答えている（人社教芸55.8%、理工農54.8%、保健・家政58.7%、その他56.4%）。他方、どの分野でも「よくある」は2%程度、「ときどきある」は10%程度で、分野間の差は大きくない（図3-17）。

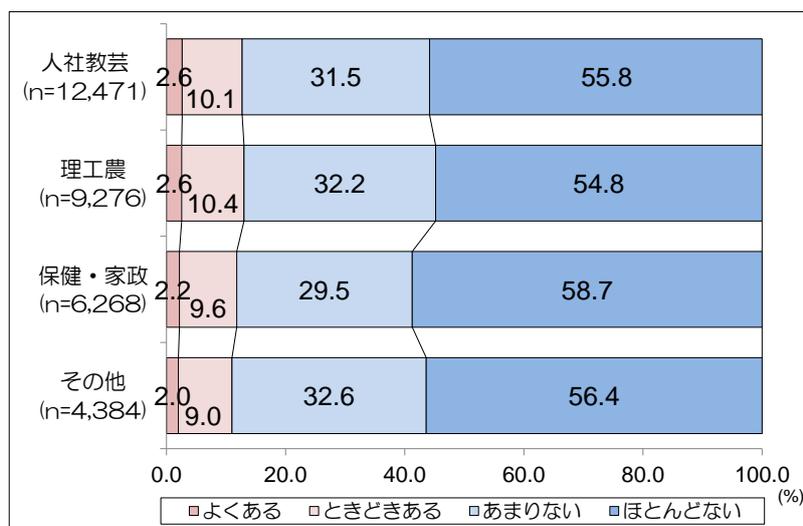


図3-17 経済的に勉強を続けることが難しい

### 保健・家政では、周囲の学生への評価が高い

周囲の学生の意欲のなさを感じるについて、「よくある」と「ときどきある」を合わせると、人社教芸で 44.9%、理工農で 42.6%、その他で 44.7%である。保健・家政だけは 32.6%と 4割を切っている（図 3-18）。

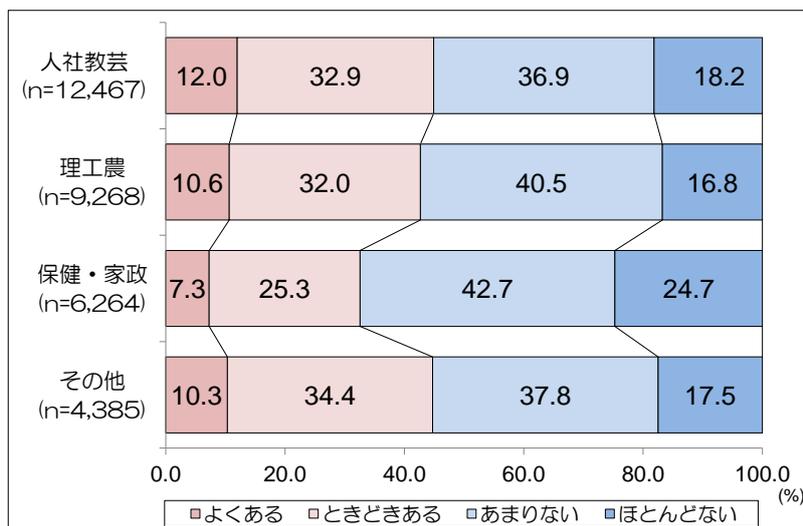


図 3-18 周囲の学生に意欲がない

### 保健・家政では、就職不安が弱い

就職に対する不安は「よくある」と「ときどきある」を合わせると、全分野で過半数となる。特徴的なのは保健・家政で、「よくある」が 22.4%、「ときどきある」が 37.7%、合わせて 60.1%で他分野よりも少ない（図 3-19）。

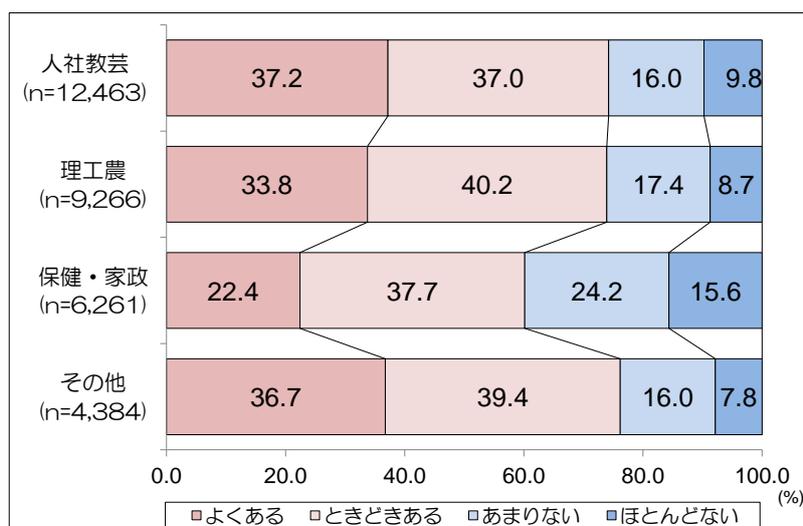


図 3-19 思い通りの就職ができるか不安

### 3-6 授業への取組み方

#### 理工農では、グループワーク等への積極的参加が少ない

授業への取組み方について、3つの観点で尋ねた。グループワーク等のインタラクションがある授業への積極的取組みに関して、唯一理工農だけ、肯定的回答（「あてはまる」＋「ある程度あてはまる」）が過半数を下回っている（図3-20）。

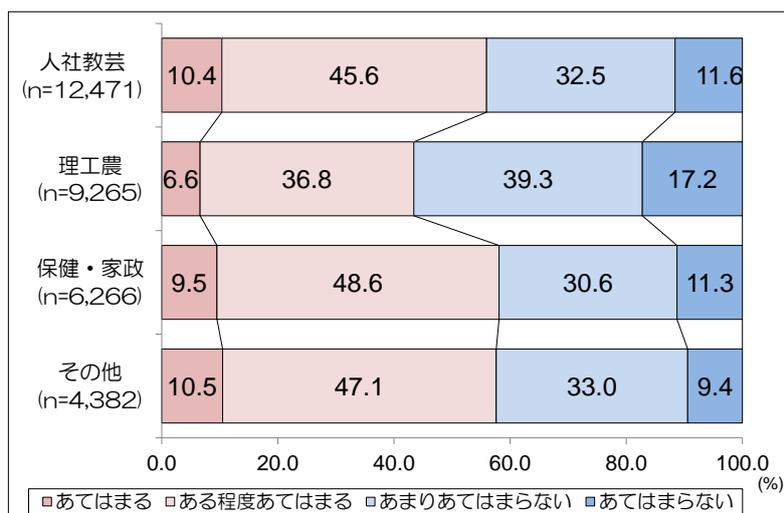


図3-20 グループワークやディスカッションに積極的に参加している

#### どの分野でも、予復習に関する回答は大きく二分されている

予復習への取組みについては、肯定的回答（「あてはまる」＋「ある程度あてはまる」）と否定的回答（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）の割合が拮抗している。どの分野でも、否定派がやや多く過半数だが、肯定派との差は大きいものではない（図3-21）。

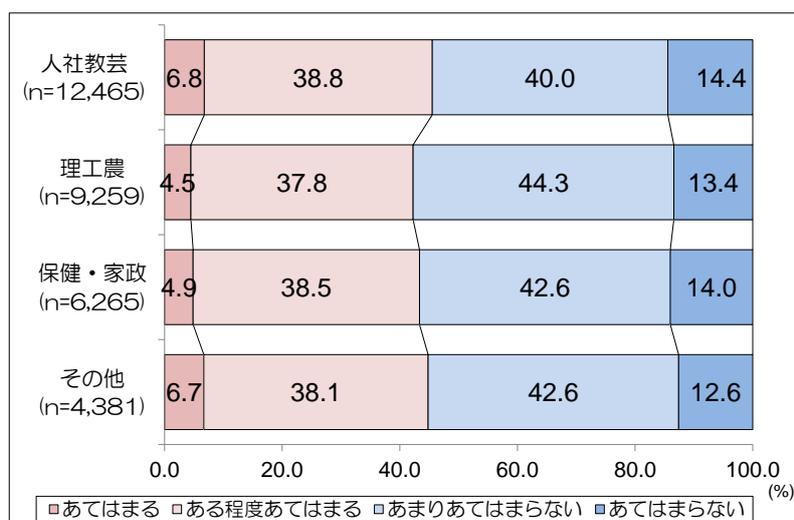


図3-21 必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる

### 教員への質問・相談を行っている学生は3割程度

教員への質問・相談について、肯定的回答（「あてはまる」＋「ある程度あてはまる」）は  
 人社教芸で 28.5%、理工農で 25.2%、保健・家政 30.6%、その他 28.2%で、この中では保  
 健・家政で最も高く、理工農で最も低い（図 3－2 2）。

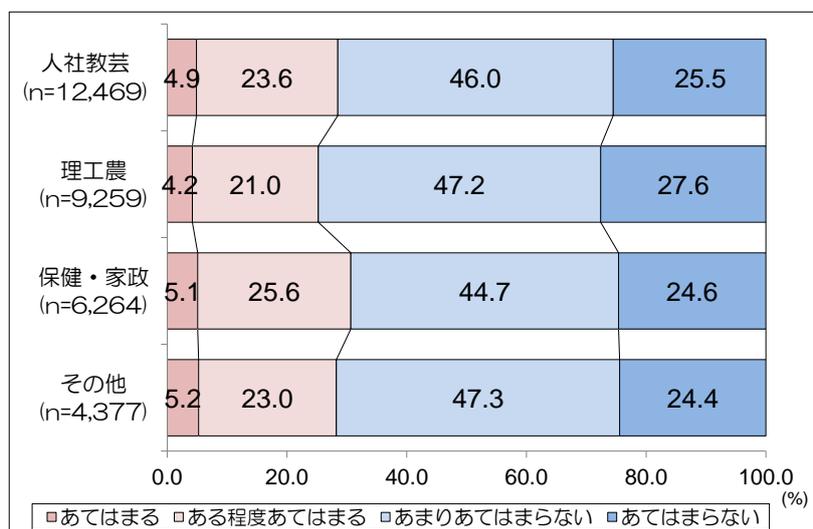
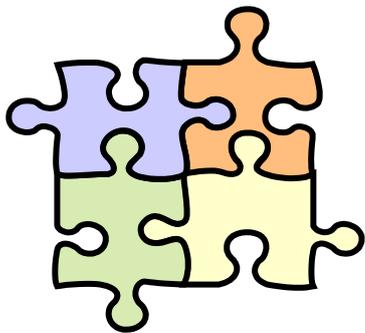


図 3－2 2 先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている

資料編

調査票



# 全国大学生調査(第2回)

東京大学 大学経営・政策研究センタ

2018年11月

- この調査は皆さんが大学でどのように生活・学習しておられるのかを明らかに、日本の大学教育のあり方を考える基礎とするとともに、皆さんが在学する大学での教育改善にも役立てることを目的としています。
- いただいた回答はすべて統計的に処理され、あなた個人についての情報が他の目的で使われることは決してありません。この調査は全国で120の大学で行われています。
- 回答は貴学部から指示された日程内に提出をお願いします。  
この調査は各大学の協力を得て、東京大学大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センターが『文部科学省科学研究費補助金』を得て行うものです。
- 全国大学生調査アンケート事務局 電話:0120-\*\*\*-\*\*\* (フリーダイヤル)

- 回答者から抽選で100人に、3千円の図書カードをさしあげます。最終頁にメールアドレスを記入してください。
- 調査結果の概要は2019年5月ころに下記に掲載する予定です。  
<http://www.pu-tokyo.ac.jp/crump/>
- この調査に対するお問い合わせは左記のアンケート事務局をお願いします。



## 授業についてお聞きします

問1 今学期は1週間あたり、何コマ分の授業を履修していますか。

1週間あたり	10.8	コマ
--------	------	----

問2 大学に入ってから次のような経験はありますか、またそれは有用でしたか。

<a~hそれぞれ横にお答えください>	経験した				経験していない
	有用ではない	どちらともいえない	有用	非常に有用	
a. フレッシュマン・セミナー	1.8	8.8	10.9	2.7	74.8
b. 高校での未習科目を学ぶための補習的な科目	2.4	13.1	23.0	5.1	55.4
c. 大学での勉強の方法(スタディ・スキル)を学ぶ科目	2.4	15.1	26.1	6.2	49.1
d. 就職や将来のキャリアをテーマとした科目	2.3	12.7	34.1	13.4	36.5
e. インターンシップ(教育実習や工場実習を含む)	1.2	5.4	16.8	14.6	61.2
f. 他学部での聴講	1.9	8.7	14.0	5.3	68.9
g. 留学(4か月未満)	1.1	2.1	3.7	4.6	87.3
h. 留学(4か月以上)	1.0	1.8	1.9	2.4	91.9

問3 これまで受けた授業の形態について、全体が10割になるようお答えください。

講義 (100人以上)	講義 (50人以上100人未満)	講義 (50人未満)	演習・ゼミ	実験・実習
2.47 割	2.69 割	2.69 割	1.04 割	1.12 割

問4 これまで受けた授業では、下のようなことがどれくらいありますか。またそれは必要ですか。

<a~i それぞれ横にお答えください>	経験したか				必要か		
	ほとんど なかった	あまり なかった	ある程度 あった	よくあった	必要では ない	ある程度 必要	非常に 必要
a. 授業内容に興味がわくよう工夫されている	3.9	25.0	60.9	8.5	1.3	34.6	50.5
b. 理解がしやすいように工夫されている	2.6	19.6	65.6	10.4	1.1	26.2	58.9
c. TA などによる補助的な指導がある	19.9	31.6	35.6	9.6	14.3	52.7	18.6
d. 出席が重視される	2.7	13.0	49.6	32.8	15.2	50.7	20.3
e. 最終試験の他に小テストやレポートなどの課題が出される	1.2	7.2	49.2	40.5	8.9	58.8	18.4
f. 適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される	25.5	38.9	27.3	6.3	9.4	47.2	29.5
g. 授業中に自分の意見や考えを述べる	14.2	39.4	37.0	7.5	13.0	54.8	18.4
h. グループワークなど、学生が参加する機会がある	7.5	29.8	47.6	13.1	9.6	53.9	22.6
i. 予習・復習が必ず必要とされている	14.6	37.5	37.8	8.0	14.8	57.8	13.5

問5 あなたの成績について教えてください。

(5段階評価の場合(例えば秀、優、良、可、不可)は、上位2つを合わせて優(A)と考えてください。不可の割合は除いてください)。

優(A)	良(B)	可(C)
4.47 割	3.33 割	2.19 割

GPA	
2	8

問6 3年生以上の方にお聞きします。(1年生と2年生は次ページに進んでください)

6-1 卒業論文、卒業研究は必修ですか、また執筆・実施しますか。

73.2	必修
9.0	必修ではないが、執筆・実施する (予定も含む)
14.8	執筆・実施しない

6-2 あなたはゼミ・研究室に所属していますか。

75.3	所属している	23.8	所属していない
------	--------	------	---------

「1 所属している」を選んだ方にお聞きします

6-3 所属している学生は(1学年あたり)何人くらいですか。

10.8
------

6-4 ゼミ・研究室での教育をどう思いますか。

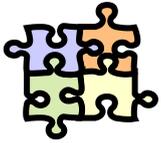
2.3	意味はない
6.1	意味はあまりない
42.4	ある程度、意味がある
48.1	とても意味がある

「2 所属していない」を選んだ方にお聞きします

6-5 所属していない理由としてあてはまるものを1つ選んでください。

28.4	ゼミ・研究室に所属するという制度がない
62.2	まだ所属する時期ではない
7.2	所属が必須ではなく希望しなかった
0.8	希望するゼミに入れなかった

次ページにお進みください



## 大学教育への評価をうかがいます

問7 大学の授業とあなたとの関係についてどう思いますか。

<a~cそれぞれ横にお答えください>	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	よくあてはまる
a. 卒業後にやりたいことは決まっている	10.4	26.4	40.2	21.7
b. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっている	8.9	29.0	42.4	18.1
c. 授業を通じてやりたいことを見つけたい	7.2	21.4	46.7	23.2

問8 次の点で大学の授業は、どのくらい役立っていると思いますか。また自分の実力はどの程度あると思いますか。

<a~fそれぞれ横にお答えください>	これまでの授業経験は		自分の実力は					
	役立っていない	役立っている	不十分	十分				
a. 将来の職業に関連する知識や技能	5.5	21.3	46.4	25.0	18.9	52.1	23.0	1.9
b. 専門分野の知識・理解	3.1	16.0	48.7	30.2	17.4	50.9	25.3	2.1
c. 論理的に文章を書く力	7.6	32.2	43.3	14.8	19.5	47.1	25.8	3.2
d. 外国語の力	18.2	37.0	31.6	11.1	34.8	41.1	17.2	2.7
e. ものごとを分析的・批判的に考える力	4.8	27.2	50.0	15.9	12.5	45.0	33.4	4.8
f. 幅広い知識、もののみかた	4.1	22.3	51.5	20.1	12.1	45.2	33.5	5.0

問9 あなたの大学について次の点でどのくらい満足していますか。

<a~gそれぞれ横にお答えください>	不満	ある程度不満	ある程度満足	満足
a. 授業全般	4.3	22.1	65.0	7.1
b. 授業外での教員との接触	5.9	27.0	56.3	9.3
c. 図書館などの学習施設	4.3	14.1	53.2	26.9
d. PCなどの情報環境、サポート	5.8	18.0	51.6	23.0
e. 就職指導	7.3	28.5	53.0	9.1
f. 学習・その他のサポート	5.7	27.7	56.8	8.2
g. 大学生活全般	5.1	18.4	58.5	16.4

問10 大学に入学するまでの経緯について。

<a~dそれぞれ横にお答えください>

10-1. 入試形態	受けた	受けていない
a. 大学個別の一般入試（学力試験）	63.8	30.9
b. センター試験	71.2	23.4
c. 推薦入試・AO入試	37.2	58.2
d. 編入学試験	2.1	89.8

10-2. 志望順位	57.2 第1志望	19.2 第2志望	21.9 その他
------------	-----------	-----------	----------

10-3. 高校3年生のころ 家や塾での1日の勉強時間	10.9 していない	13.2 1時間程度	18.9 2時間程度	55.4 3時間上
--------------------------------	---------------	---------------	---------------	--------------



# 日常生活についてうかがいます

問11 学期中の、1週間の生活時間を教えてください。

<a~fそれぞれ横にお答えください>		0時間	1-2時間	3-5時間	6-10時間	11-15時間	16-20時間	21-25時間	26時間以上
学期中	a. 授業・実験への出席	4.1	6.3	12.1	12.2	15.9	19.0	13.8	14.2
	b. 授業・実験の課題、準備・復習	12.5	33.2	26.9	14.0	5.1	2.4	1.1	2.2
	c. 卒業研究・実験・卒論（該当者のみ）	26.8	6.8	6.6	4.6	2.2	1.6	1.1	4.4
	d. 授業とは関係のない学習・読書	33.3	34.8	15.3	6.9	2.9	1.4	0.7	1.6
	e. サークル・クラブ活動	44.5	14.8	14.6	11.2	5.6	2.7	1.1	2.3
	f. アルバイト・仕事	20.7	4.5	12.2	18.4	17.1	13.3	5.8	5.3

問12 あなたは本（マンガを除く）を一ヶ月に何冊くらい読みますか。（電子書籍を含む）

47.2	読まない	25.2	一冊	11.9	二冊	5.5	三冊	8.6	四冊以上
------	------	------	----	------	----	-----	----	-----	------

問13 あなたの住居は下のどれにあてはまりますか。

44.5	自宅	47.5	賃貸アパート・マンション	5.7	寮	0.8	その他
------	----	------	--------------	-----	---	-----	-----

問14 一ヶ月の生活費（授業料を除く）をどのようにまかなっていますか。

両親等から	奨学金	アルバイト・給与	その他
3.4 万円	2.4 万円	4.6 万円	0.4 万円

問15 あなたはこれまでに次のようなことを感じたり思ったりしたことがどのくらいありますか。

<a~fそれぞれ横にお答えください>	ほとんどない	あまりない	ときどきある	よくある
a. 生活に熱意がわかない	14.8	29.6	40.5	13.5
b. 授業の内容についていけない	12.2	34.4	41.1	10.7
c. 他の学科・学部・大学や学校に入り直したい	34.1	27.8	24.0	12.5
d. 経済的に勉強を続けることが難しい	55.3	30.9	9.8	2.4
e. 周囲の学生に意欲がない	18.6	38.6	30.9	10.3
f. 思い通りの就職ができるか不安	10.2	17.7	37.8	32.7

問16 授業に対してどのように取り組んでいますか。

<a~cそれぞれ横にお答えください>	あてはまらない	あまりあてはまらない	ある程度あてはまる	あてはまる
a. グループワークやディスカッションに積極的に参加している	12.6	33.6	43.2	9.0
b. 必要な予習や復習はした上で授業にのぞんでいる	13.6	41.4	37.7	5.6
c. 先生に質問したり、勉強の仕方を相談したりしている	25.4	45.5	22.8	4.7

問17 あなたが所属する大学の教育について、ご意見を自由に記入してください。

別紙に記入しても結構です

### ■あなたの所属と学年

大学名	大学
学部名	学部
現在の学年	1年生 24.1    3年生 24.8    5年生以上 2.4 2年生 25.4    4年生 20.0
性別	男性 54.4    女性 43.4

調査項目はこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。

2019年4月以降にも使えるメールアドレス（なるべく携帯でないもの）を記入してください。

これは賞品を送付するためのものです。記入したくなければ、無理にお書き頂く必要はありません。

メールアドレス	
---------	--



## 全国大学生調査(第2回) 第1次報告書

---

発行 2019年9月1日  
編集・発行 東京大学 大学院教育学研究科 大学経営・政策研究センター  
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1  
電話 03-5841-3993 FAX 03-5841-3993  
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/>  
印刷・製本 株式会社日本ビジネスプラン

---



